HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	無住集落における共同のいとなみ ： 福井県小浜市上根来集落の歴史と現在から
Author(s)	白木, 達也
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	学士
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/91473
Type	bachelor thesis
File Information	2023shiraki.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

令和 5 年度卒業論文

無住集落における共同のいとなみ

-福井県小浜市上根来集落の歴史と現在から-

北海道大学文学部
人間システム科学コース 地域科学研究室
指導教員：宮内泰介
学籍番号：01200073
氏名：白木達也

内容

1 はじめに 3

1-1 研究の背景と目的 3
1-2 調査地 4
1-3 研究の方法と論文の構成 7

2 上根来集落の歴史 9

2-1 時代区分 9
2-2 炭焼き期 9
2-2-1 「炭焼き期」の産業 9
2-2-2 「炭焼き期」の森林の利用 12
2-2-3 「炭焼き期」の寺社とその行事 14
2-2-4 「炭焼き期」の田畑とその管理 18
2-2-5 「炭焼き期」の生活（交通、行商、食事） 20
2-2-6 「炭焼き期」の学校生活と卒業後の進路 22
2-2-7 「炭焼き期」の集落の意思決定と集まり 25
2-3 分収造林期 27
2-3-1 「分収造林期」の産業 27
2-3-2 「分収造林期」の森林の利用 30
2-3-3 「分収造林期」の寺社とその行事 32
2-3-4 「分収造林期」の田畑とその管理 34
2-3-5 「分収造林期」の生活（交通、行商、食事） 35
2-3-6 「分収造林期」の学校生活と卒業後進路 36
2-3-7 「分収造林期」の集落の集まり 39
2-4 畜産期 40
2-4-1 「畜産期」の産業 40
2-4-2 「畜産期」の森林の利用 44
2-4-3 「畜産期」の寺社とその行事 44
2-4-4 「畜産期」の田畑とその管理 45
2-4-5 「畜産期」の生活 48
2-4-6 「畜産期」の学校生活 49
2-4-7 「畜産期」の移住 50

2-5 移住期 **52**
2-5-1 「移住期」の仕事 52
2-5-2 林道の開通と「百里会」の発足 53
2-5-3 「共同墓地」をつくる 54
2-5-4 無住集落へ 55

3 上根来集落の「共同のいとなみ」 58

3-1 親戚関係 **58**
3-2 「結い」の変容 **60**
3-3 共有物の「共同管理」 **60**
3-4 「結い」と「共同管理」 **61**

4 上根来集落の現在 63

4-1 奉仕活動 **63**
4-2 寺社の管理と行事 **67**
4-3 森林の管理と木材の収益 **71**
4-4 「鯖街道」関連のイベント **76**
4-5 さまざまな「通い」 **79**
4-6 まとめ **82**

5 上根来集落のこれから 83

5-1 「むらじまい」せずに時代にあった維持管理を **83**
5-2 「伝える」から「受け継ぐ」へ **87**
5-3 上根来集落の今後を「歴史」から考える **91**

6 おわりに 94

1　はじめに

1-1　研究の背景と目的

近年「限界集落」や「消滅可能自治体」という言葉がメディアでも話題となり、「増田レポート」では 2040 年までに全国の約半数の市町村が消滅するということが示唆された（増田 2014)。一方で、都市から農村への移住者が増加する「田園回帰」の傾向も指摘されており（小田切・筒井 2016)、日本全国で「地域活性化」や「地域づくり」の取り組みが行われるようになった。しかし、一元的な「活性化」には批判的な声もあり、限界集落については、「積極的な撤退」(林・斎藤 2010)や、集落住民の「尊厳ある暮らし」を保証しつつ、「集落を看取る」という「むらおさめ」（作野 2006）も提唱されている。

いずれも集落の終焉を受け入れるという点で変わりはないが、「積極的な撤退」では、国土保全や食糧問題の観点から、全てを守り切れないことを想定し、守れるものは守れる体制を整えた上で、集落移転をすることが望ましいとしている。一方で、「むらおさめ」については、集落の住民が最後まで幸せに住むことに焦点を当て、集落住民の「尊厳ある暮らし」を保証した上で、集落を「看取る」という「集落ターミナル・ケア」を行い、時には集落の様子を後世にのこすために「アーカイブ」を作ることもある。

いずれにしても、集落の終焉を認めたうえで、何をすべきかが議論されているように、「集落の終焉」を点で見ている。しかし、終焉を迎えるにしても、集落は本来それぞれの「歴史」を持っており、集落が栄えていた時期から、集落の住民が減少する時期、集落の衰退を食い止めるために奮闘する時期など、様々な「歴史」を踏まえて終わりを迎えていくはずである。「積極的な撤退」や「むらおさめ」はこのような、集落がどういった「歴史」を歩んできたのかという視点が足りないのではないかと感じる。それでは、実際に「無住集落」となる集落はどういった「歴史」を辿っていたのだろうか。「日本廃村百選」（2020:148-149、164-165）を参照して、2 つの集落が「廃村」となる過程を簡単に見てみたい。

1 つ目は石川県小松市光谷町である。光谷町は水の便が悪く、耕地に乏しかった一方で、「光谷まくり総まくり」と呼ばれる一致団結の気風があった。この光谷町は、戦後、現金収入を得るため、町を挙げて「リンゴ栽培」に取り組んだ。しかし、三八豪雪と呼ばれる昭和 38 年の豪雪の被害で、リンゴ園は壊滅し、その翌年から住民は離村することになった。離村後は「光谷会」という元住民の会を結成して、寺社の行事を行い、「ふるさとセンター」まで建設したが、生まれ育った世代が高齢化したため、平成 26 年に記念碑だけを残して、あとは取り壊し、「光谷会」も解散した。

2 つ目は滋賀県多賀町保月である。保月は中山道の脇往還の要衝であったが、戦後には「炭焼き」で生計を立てていた。しかし、プロパンガスの普及で炭焼きでは暮らせなくなり、子どもたちは学校卒業後、町へ出て働くようになった。その後、集落再編事業で集団移転するも、冬以外は、林業組合で製材の仕事をして住む人もいた。しかし、平成 22 年に、鹿の食

害により製材の仕事を失って住む人がいなくなるものの、「故郷を愛する会」を作って、集落の維持管理をしていた。その後、元住民以外も参加しやすいように、「保月を愛する会」と名称を変更して、現在も維持管理を行っている。

以上 2 つの事例を参照すると、そもそも「集落の終焉」の地点を決めることがいかに難しいかがよく分かる。そこで、2 つの集落の「歴史」を参照して、簡単に図にまとめてみる（図 1）。すると両集落とも、戦後すぐに行っていた「産業」がある出来事を境にできなくなって、その対応を考えるが、結局離村して「無住集落」となった一方で、ほったらかしにせず、その後も「いとなみ」が行われているという「歴史」を歩んでいた。このように共通点こそあるが、「無住集落」といっても、集落それぞれの「歴史」を歩んでいるので、無住集落の「その後」を議論するためには、集落の「歴史」を踏まえる必要があるのではないか。

そこで、本稿では、福井県小浜市上根来集落を事例に、「住民同士のつながり」に着目して、「集落の『歴史』」と「無住化後の現状」を明らかにすることで、集落の「歴史」を踏まえた新たな無住集落のあり方について議論することを目的とする。

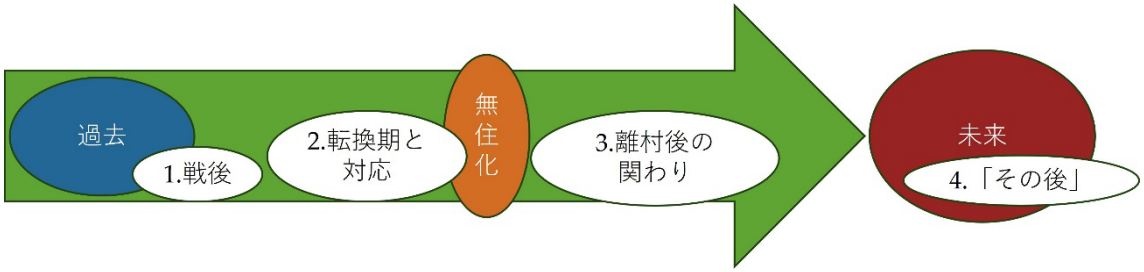

図 1 無住集落の歴史

（浅原 2020:148-149、164-165）より作成）

1-2 調査地

本研究の対象地である福井県小浜市は福井県の南西部、若狭のほぼ中央に位置している。北は国定公園の指定を受けた若狭湾に面し、海岸線の一部は「蘇洞門（そとも）」を有するリアス式海岸となっている。南は、東西に走る京都北部一帯に連なる山岳で、一部は滋賀県と境を接している。また、日本海を挟んで朝鮮半島に向かい、昔からシルクロードの日本での玄関口として、京都・滋賀・奈良への大陸文化・南蛮文化の伝達の経路となっていた。北陸圏域の福井県にありながら、風俗、習慣、言語などは近畿圏域との歴史的・文化的つながりがあり、気候も概ね穏和・温暖である [1]。

[1] 小浜市「小浜はこんなまち（人口・沿革など）」
https://www1.city.obama.fukui.jp/shisei/obamashinitsuite/132.html

そして上根来集落は、小浜市の中でも南に位置し、滋賀県高島市との市境にある。また小浜市街地から車で 30 分、遠敷側上流の標高 300m付近にある山里で、かつては炭焼きや農業等を営み人口 300 人を数えたものの、現在は住民が 0 人の「無住集落」となっている。

上根来集落は、若狭と京都を結ぶ街道群である「鯖街道」の中でも「針畑越え」（図 2）の沿線集落である。「針畑越え」は、最大の物流量を誇った若狭街道に対し、古代、若狭国府が置かれた遠敷の里から、針畑峠を越えて朽木を経由し、京都鞍馬に向かう針畑越えの道は、険しい道のりではあるが若狭と京都を結ぶ最短ルートとして盛んに利用された。若狭人たちは、一塩した鯖を背負い、「京は遠ても十八里」、京都まで遠いとはいってもせいぜい十八里（７２キロ）と言いながら、急峻な峠をせっせと越えていったという。ブナ林が広がる近江との国境・上根来の山中には、かつて峠を行きかった人々の足跡によって深くえぐられた山道が続き、山道に残された石積みの井戸や地蔵などが、旧街道の風情を色濃く示している。また、この道には、峠を越えて若狭にやってきた兄弟神、海彦・山彦の伝説が語り継がれおり「一番古い鯖街道」とも言われている。峠を越えて先に若狭に鎮座した弟神は、街道沿いの若狭彦神社に奉られ、遠敷の神様が東大寺二月堂の創建に際して若狭の水を送ったという伝説にちなんだ神事、お水送りも現在に伝わっている。街道沿いにはお水送りを行う若狭神宮寺のほか、若狭国分寺や多田寺、明通寺など、天皇や貴族に庇護された、創建を古代に遡る古刹・仏像が集積しており、奈良・京都とのつながりを色濃く示す歴史的景観を形成している[2]。

図 2　鯖街道

（「鯖街道[3]」より）

（最終閲覧日 2023/12/22）

[2] 「海と都をつなぐ若狭の往来文化遺産群～御食国若狭と鯖街道～」「針畑越え」 https://www1.city.obama.fukui.jp/japan_heritage/story/index.php?id=3 （最終閲覧日 2023/12/22）

[3] 鯖街道　「鯖街道」とは

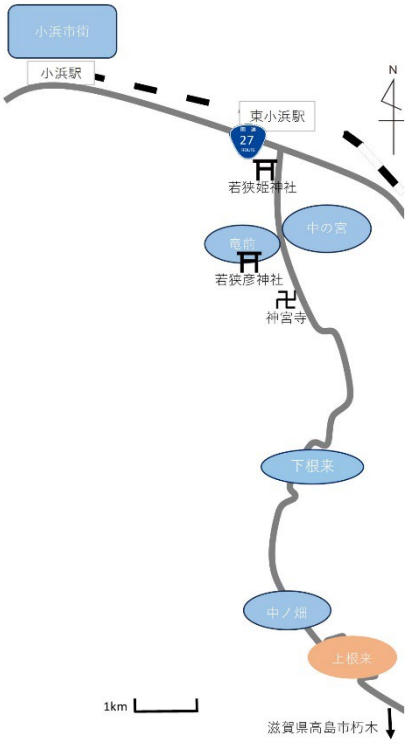

図 3 上根来周辺図

図 4 上根来集落図（詳細）

（図 3 は筆者作成、図 4 は H さんに頂いた資料である。）

図 3　上根来航空写真

（国土地理院撮影の空中写真(2013 年撮影)より。中央上が上根来の中心集落で、右下の赤い

https://sabakaido.jp/about/（最終閲覧日 2023/12/22）

屋根が「畜産団地」、またこの「畜産団地」辺りが「三軒家」である。）

1-3　研究の方法と論文の構成

本研究では主に聞き取り調査を実施したのだが、その対象者のプロフィールと調査日時については、以下の表 1、表 2 の通りである。

表 1　調査対象者のプロフィール

	生まれ	現在の住まい	職業	その他
A さん（男）	1955 年	中の宮	建築業	百里会会長
B さん（男）	1958 年	竜前（上）	建築業	百里会三役
C さん（女）	1934 年	竜前（下）		「親世代」、H さんの母
D さん（男）	1945 年	多田（小浜市内）	建築業	
E さん（男）	1949 年	竜前（上）	建築業	上根来生産森林組合会長
F さん（男）	1936 年	竜前（上）		「親世代」
G さん（男）	1969 年	竜前（下）		
H さん（男）	1958 年	竜前（下）	測量	百里会三役

（聞き取りより作成）

表 2　調査日時と調査内容

調査日時	調査内容
2019 年 6 月 4 日	B さんへの聞き取り。
2022 年 5 月 27 日	A さん、B さん、H さんへの聞き取り。
2022 年 7 月 8 日	A さんへの聞き取り。
2022 年 7 月 9 日	「奉仕活動」に参加。
2022 年 7 月 9 日	D さんへの聞き取り。
2022 年 7 月 9 日	E さんへの聞き取り。
2022 年 7 月 9 日	F さんへの聞き取り。
2022 年 7 月 10 日	C さんへの聞き取り。
2023 年 5 月 7 日	鯖街道の整備に参加。
2023 年 7 月 8 日	A さんへの聞き取り。
2023 年 7 月 9 日	F さん夫妻、B さんの母への聞き取り。
2023 年 10 月 22 日	「奉仕活動」に参加。
2023 年 12 月 10 日	G さんへ電話での聞き取り。
2023 年 12 月 11 日	A さんへ電話での聞き取り。
2023 年 12 月 18 日	A さんへ電話での聞き取り。

本論文は全 5 章で構成される。 1 章では、限界集落が取りうる手段を示した後、集落の行く末は集落の歴史を踏まえて考えるべきだということを述べた。 2 章では、独自に時期区分した後、上根来集落の「歴史」について、主に戦後から「無住集落」に至るまでの内容を項目ごとに、具体的に記述する。3 章では、2 章の内容を「共同のいとなみ」の観点から

まとめ、その内容を議論する。 4 章では、「無住集落」になった現在、上根来集落と元住民の接点について、元住民の上根来への「想い」も交えて記述する。最後に 5 章では、それまでに述べた、上根来集落の「歴史」と「現在」を踏まえて、今後の上根来集落について、元住民の「想い」の葛藤を描く。

2　上根来集落の歴史

2-1　時代区分

この章では、聞き取り内容をもとに、上根来集落の歴史について記述する。記述する項目は多岐にわたるが、主に⑴産業、⑵森林、⑶寺社と行事、⑷田畑、⑸生活（交通、行商、食事等）、⑹学校と卒業後進路、⑺集落の意思決定と集まり、⑻移住、について述べる。ただ記述方法としては、時代ごとに区切って記述する。したがって項目ごとの移り変わりが少々分かりにくくなるが、その点は 3 章で補うことにしたい。さて上根来では戦後に集落として主に 3 つの産業を経たのち、住民たちが集落を離れ、無住化に至っている。そこで①炭焼き期（主に戦後～1963 年〔S.38〕）、②分収造林期(1963 年〔S.38〕～1976 年〔S.51〕)、③畜産期（1976 年〔S.51〕～1993 年〔H.5〕）④移住期（1993 年〔H.5〕～2013 年〔H.25〕頃）、⑤無住化後（2013 年〔H.25〕頃以降）と時代を区切って述べることとする。

2-2　炭焼き期

2-2-1　「炭焼き期」の産業

上根来集落では、いつから炭を焼いていたかは定かではないが、少なくとも戦前から、炭焼きを生業としていた。しかし後述するように、エネルギー革命をきっかけに、炭焼きでは生計を立てられなくなり、新たな産業を模索するようになる。そこで、集落の産業として「炭焼き」が主流であった、1963 年までを「炭焼き期」として記述していくことにする。それでは、主に戦後～1963 年〔昭和 38 年〕の「炭焼き期」における、⑴産業、⑵森林、⑶寺社と行事、⑷田畑、⑸生活（交通、行商、食事等）、⑹学校と卒業後進路、⑺集落の意思決定と集まりは具体的にどのようなものだったのだろうか。1 つずつ具体的に記述していく。

まず「産業」についてだが、炭焼きの詳細と、炭焼きにおける収入、共同のいとなみについて述べていく。炭焼きの大まかな流れとしては、まず炭窯を新設すると同時に雨に濡れないように小屋を建てる。その後木を伐採して同じ長さに揃え、炭を焼く。その後できた炭を自宅や共同の倉庫に運ぶという流れである。特に窯の新設においては「土」が大切であり、「土」の良し悪しは炭の出来を大きく左右したようで、F さんやＢさんは以下のように語っている。

> 土が悪いと、炭になってる火が消えんねや。それを見分けるのはなかなかでした。土の見分けはやっぱり若いもんじゃない。年寄りの人はよう経験もしとるし、よう知っとった。そんな人らに見てもろてしたんや[4]。

[4] 2022 年 7 月 9 日に行った F さんへの聞き取りより。

適した窯場所がないと、木地山峠を越えて、滋賀県側まで行ったりしてたな。木地山っていう集落は朽木の一番奥になる。

炭窯は毎年作るわけではない。自分とこの山から搬出できる範囲で木を出してくるんやけど、炭にできる材料の木が集めやすくても、炭窯にできる土があるかないかや。火に強くて水に弱い。そういう性質の赤土があるかないかやな。それがあるとこを見つけて、そこへ窯を作らなあかんのや。材料集めやすいしここにしようか、ではあかんわけや。すべて人力なんやから[5]。

以上のように、やはり炭焼きにおける「土」は肝だったようで、その目利きには年配の方の経験が必要だったようだ。またBさんの語りにあるように、「土」の存在は窯を作る場所の決定にも大きな影響を与えたようだ。そのため峠を越えて滋賀県の朽木で窯を作ったり、良い土に巡り合えないと窯の新設を断念したりすることもあったようだ。また当然木の種類によっても炭の出来は変わる。その中でも特に「クリ」の木は良い炭にならなかった一方で、「ホソ」、「ケヤキ」、「サクラ」は良い炭になった[6]。

ところで炭焼きはどのくらいの収入になったのだろうか。炭焼きでは、現金収入が得にくかったという。その原因は主に2つ挙げられる。1つは雪深い地域であったため冬の作業ができないという理由である。それに加えて、できた炭は一度自宅や上根来区共同の倉庫に入れたのち、盆か正月にまとめて卸しており、その時期にしか現金収入が得られなかったのである。そこで生活を維持するために、様々な方法を駆使して、お金を工面したという。1950年代の炭焼きについて、Cさんや F さんは以下のように語っている。

冬の間、出稼ぎに行った人もおったな。舞鶴の合板にな。うちも一年行ったわ。どこにあったんか私も全然知らんけどな。3か月ほど行ってくる。1、2、3月。昔は冬はよう雪降ったやろ、上根来らでも、何も仕事することないんや。もう炭焼きもできんもん、冬は。もう山の全然ない人、2.3人は一年中出稼ぎにいっとったな。2.3軒は一年中出稼ぎにいっとったな。炭焼きする山もないし、そんな人もおった[7]。

炭を買う問屋が小浜にあってんけど、3軒か4軒か。問屋も得意があってやな。問屋によって、値段ええとこもあったんや。(炭が) 盆頃にも金になるんやけど、半年も炭のお金もらえへんと、こっちも生活しなんねん。炭が売れん時でも先に金がない場合があるやろ。そうすると先に金もらう。炭の値段が安なんねや。炭が出とらんのに、

[5] 2019年6月4日に行ったBさんへの聞き取りより。
[6] 2022年7月10日に行ったCさんへの聞き取りより。
[7] 2022年7月10日に行ったCさんへの聞き取りより。

お金をもらうんやさけえ。金のないんもんはしゃーない。安くても金いるんやさけえ。お金の蓄えのあるもんは炭の値段もええしやな。そういうことやったんや[8]。

以上のように、冬の出稼ぎに行くことやお得意先の炭問屋に前借りすることで、何とか生活を維持していた家もあった。しかしF さんが語っている通り、前借りすると売れる炭の値段が安くなって、悪循環に陥り、より貧しい暮らしになることが想定できる。いずれにしても炭焼きで生計を立てるのはかなり苦しかった。また A さんは土地を相続する時に、抵当権がついていたという。これも炭焼きでは現金収入を得ることが難しかったことに起因するとA さんは語っていた。

（上）根来が生活で大変やった頃に、（祖父の）兄貴が家を出とるのやわ。ほんでアメリカ行って、お金を稼いで、根来へ送金してきて、このA 家っていうのがずっと来とるらしいんやわ。ほんで、集落の親世代のおじちゃんらに聞くと、アメリカから（ドルを）送金して来とるもんで、「ドル箱やドル箱や」ってみんな言うたらしいんや。

ほんでうちの親父が亡くなったときに、いろんな話を聞いたんやけんど、冬は雪が多くて仕事ができんやん。そうすると仕事ができるのが 4 月 5 月からしいんやわ。それから山の木切って、炭を焼いて、炭がお金になる言うと、盆頃にしかならんらしいんやわ。それまでは収入ないやん。なもんで、遠敷の「金屋（かなや)」の金貸しをしとるとこへ、みんなお金を借りに行っとったらしいんやわ。でその時に、「読み書きそろばんのできる人」っちゅうのがおらんかったらしい。僕から言うと、ひいじいさんの世代やな。ほんで、そのひいじいさんって言うのが「読み書きそろばんのできた人」やったもんで、集落の人らがお金を借りに行くときに、一緒について来てもらったらしいんやわ。そうするとお金貸す方は、お前が代筆で名前書いたるんやから「お前が保証人やぞ」と。っていうことでそこに全部名前を書いてやったんやわ。

そうしたら、その人らが返さんかったら、保証人のとこ来るやろ。ほんで、僕が相続するときに、抵当権が全部ついとったんやわ。うちの山を差し押さえとったんや。ほんで、僕のじいちゃんの兄貴っていうのは、このままでは岩本の家っていうのは成り立っていかんさかいに、自分がアメリカ渡って金を送るから、「お前（じいちゃん）が全部それを取り戻せ」と。それで全部返してもろたらしいんやけど、その時代、抵当権の解除まではしてなかったんやわ。なもんで、僕が相続するときに全部残っとったんや。ほんで、「なんでやろ」って親戚のおじさんやとか根来の年寄りに聞いたら、お前とこの家はそうやったんやと。そんな家やったらしいわ[9]。

このように、戦前の上根来でも、炭焼きでは現金収入を得られない期間が長かったため、

[8] 2022 年 7 月 9 日に行ったF さんへの聞き取りより。
[9] 2022 年 7 月 8 日に行ったA さんへの聞き取りより。

山を担保にお金を借りに行く人が多かった。そこで、「読み書きそろばんのできた人」だった A さんの曽祖父は、その肩代わりをして借金が膨らんだため、「じいちゃんの兄貴」（曽祖父の息子）がアメリカへ出稼ぎに行ったという。いずれにしても、炭焼きで暮らしを成り立たせることは非常に難しかったことがよく分かる。

ところで、炭焼き自体は世帯ごとで行っていたが、窯作りと小屋作りだけは大変な仕事なので、集落の住民と共同で作業していた。

> 窯作るときにみないいってして男は 8 人くらい手伝いに来てくれるんや。またよその人が窯作ると、うちも手伝いに行く。大体親せきやわ [10]。
> 炭窯を作るには 8 人ほど人はいるんや。部落の人ら、親戚の人らに来てもうて、またその人らの時にはわしらも行って窯を作っとった。窯作るには、雨に当たらんように小屋をこしらえなあかんさけえな。冬は雪降るし。人手がいったんや。大方 2 日ほどでちゃんと窯も仕上がり、小屋もできる [11]。

このように窯作りと小屋作りでは決まって 8 人の親戚が手伝いに来るようで、共同で作業を行ったようだ。これを「イイ（結い）」と呼び、手伝いに来てもらった家には「イイ返し（結い返し）」として、炭窯新設の手伝いに行くという。また炭焼きでは、ほとんどの家の子どもがその手伝いをしていたようで、特に炭窯の場所から炭を集落に運んで来る手伝いをしていた家が多かったようだ。

2-2-2 「炭焼き期」の森林の利用

上根来集落の森林の利用について、私有林と区有林に分けて記述してみよう。しかし、もとは全て区有林だったという話がある。A さんが伝え聞いた話では、ずっと昔に区有林を「分け山」して集落に近い「クチの山」と集落から遠い「オクの山」の 2 個所を世帯ごとに均等に分配したとのことである [12]。しかし分配の際に「お金がなくて登記ができなかった家」があったり、暮らしの中で「集落内の別の家に売却せざるを得ない家」もあったりしたという。実際に F さんや C さんが炭焼きをしていた 1950 年になると、「山を持たない」家が少なくとも 2,3 軒あったという。また D 家はそのうちの一軒である。

ここで述べる私有地は、「分け山」の時に個人登記したものであるが、「炭焼き期」では主に炭焼きをする場として利用された。B さんによると、炭焼き用に木を切った後の地面は基

[10] 2022 年 7 月 10 日に行った C さんへの聞き取りより。
[11] 2022 年 7 月 9 日に行った F さんへの聞き取りより。
[12] B さんの話の中でも、「大体平等になるように区有林を分けおうてた」（2019/6/4）という発言がある。

本「ほったらかし」だったそうだが、「生活に余裕のある人」は針葉樹を植林した[13]とのことなので、間伐材を売却して、生活の足しにしていた世帯もあったのかもしれない。

一方で区有林は、「分け山」の時に分配しなかった山のことだと考えられるが、利用方法は2つあったと考えられる。1つは集落の共有財産としての利用である。区有林にはF さんの祖父の代頃から、スギなどの針葉樹を植林していたという。そのスギ等を伐採して売却していたという。その収益は集落の共有財産として利用しており、集落のバス旅行の費用にも充てていたそうで、その様子を以下のように語っている。

> 山を伐採しとった金で景気は良かった。区有林を伐採したお金で、子供時分は毎年区をあげて旅行に行っとった。昭和 30 年頃から毎年、京都や奈良に、日帰りで。区有林を全部合わせて、何百丁もあるわけではないけど、植林してあっただけのことで。それがあの頃はええ値段であの頃は売れたさかいに[14]。

また時に、「集落の共有財産」である区有林は、売却して換金することもあった。特に、集落での生活が苦しくなった、1953 年（S.28）の台風 13 号[15]による水害の際は、上根来集落でもかなり被害を受けた。その時に区有林を売却しているが、その費用で 1961 年頃に集落で水道を作ったという。

> 水道ができたのは昭和３６年。それまでは谷の水を竹で引っ張ってきていた。その水で生活していた。（台風）１３号の水害の後でやな、生活もちょっと苦しくなってきたもんで、区有林を売ろうかという話になってたんや。昔のマゴジサン（祖父）から植えた区有林で、ごっついスギやらあったんやけえな。それを売った金で水道ができた。水道を作るために区有林を売ったわけやなかってんけんど[16]。

---

[13] 植林の方法についてはB さんが以下のように語っている。（2019/6/4）
「自然林の多様な樹種の中に自然と生えた杉の木が割と多くあったので、その中でも大きな杉の木によじ登って種を採ってきて、蒔いてどうにか植えられる程度に大きくしたものを植えた。そういうことができない場合は、尾根の雪がどうにか解けてなくなる時分に杉が生えている山の上へ登って、自然に落ちた種が伸びたものを引き抜いて背負って持ち帰って選定したり、曲がったものは鉈でポンポンと落として形よくしてから数年かけて苗づくりをして、やがて山へ入って植林をしたもんや。」

[14] 2022 年 7 月 9 日に行ったE さんへの聞き取りより。

[15] *昭和２８年９月の「台風１３号」では、嶺南地域を中心に複数の河川が氾濫するなどし、福井県内の死者・行方不明者は１３７人にのぼったそうだ。最も被害が大きかった小浜市では、当時の被害の様子を紹介する展示会が今でも行われている。（NHK 福井 NEWS WEB 2023/8/25 の記事より https://www3.nhk.or.jp/lnews/fukui/20230825/3050015576.html 最終閲覧日 2023/12/05）*

[16] 2022 年 7 月 9 日に行ったF さんへの聞き取りより。

またもう一つの利用方法としては、弱者救済の場としての利用である。それは「山を持たない」人達の炭焼きの場所としての利用である。先述したように、1950 年頃で「山を持たない」家があった。これらの世帯の炭焼き場として区有林が使われていたという。

> 炭焼きするのは個人の山やしやな。そやけんど、上根来の中でも山のないもんがおんねん。その人らは区有林を分けてやってやな、炭焼きしとった。23 軒やったけんど、山のないもんが 4,5 人おった [17]。

2-2-3 「炭焼き期」の寺社とその行事

上根来集落には神社が一つ、お寺が一つ存在するが、まず神社の行事や宮司さんについて見ていく。神社の名前は「廣嶺神社」という。小浜市内にも同じ名前の「廣嶺神社」が 6 つ程あり、その一つの小浜市千種二丁目にある廣嶺神社の宮司さんに尋ねると、その全ての「廣嶺神社」の総本社は兵庫県姫路市にある「廣峯神社」であるという。また小浜市千種二丁目の「廣嶺神社」について若狭の語り部 [18]は以下のように語っている。

> 小浜市千種二丁目の廣嶺神社は、平安時代の貞観二年（八六〇）に播磨国白幣山の廣峯神社から、大中臣おおなかとみ佐波近重により勧請されたと伝わります。（中略）御祭神、御神紋は廣嶺神社と同じで、全国にある牛頭天王の総本宮として知られています。牛頭天王は、病気や災難から人々を守る荒神としても名高く、平安時代に京都で流行った疫病を鎮めるために分祀したのが祇園社（八坂神社の前身）で、祇園祭の原型と伝えられています。千種の廣嶺神社祇園祭も、「祇園信仰」を取り込んだものと考えられます。総本宮も古くは「広峰信仰」として、災厄・疫病を祓う白幣祭が執り行われていました [19]。

正確なことは不明だが、上根来集落の「廣嶺神社」も同様の「祇園信仰」を取り込んだものではないかと考えられる。

では実際に聞き取りの結果から、上根来集落の「廣嶺神社」で、炭焼き期に行われていた神社の行事を以下の表に示す。

---

[17] 2022 年 7 月 9 日に行った F さんへの聞き取りより。
[18] 「若狭の語り部」とは小浜市の観光ボランティアガイドのことである。
[19] 「御食国若狭小浜　お菓子処 井上耕養庵」の HP において、若狭の語り部の 1 人である、網本恒治郎さんが語っている。

表 3　上根来集落における神社の行事

7 月 7 日	祇園祭 （サンヤレ祭り）
9 月 1 日	はっさく（八朔）
10 月 10 日	遠敷祭り
12 月 7 日	ヤマノクチ

（出典）聞き取りより

以上が聞き取りの範囲で分かった「廣嶺神社」で行われていた行事であるが、1 つずつ簡単に見ていく。ただ「祇園祭」や「はっさく」については、どういったイベントであったかは覚えていないようだ。戦前生まれの F さんや C さん以外の口からは聞くことができなかったので、1950 年代には行われなくなったのかもしれない。ただ C さんが「月に一回みんなお休みの日があった」と語っていたので、これらは年中行事の一つではないかと推測される。なお「八朔」について、辞書で調べると、「陰暦八月朔日。また、その日に行われる行事。古く農家では新穀の贈答や豊作祈願の行事が行われた[20]。」とある。上根来でも豊作祈願の行事であったと推測される。一方「祇園祭（サンヤレ祭り）」については、詳細は分からないのだが、小浜市千種二丁目の「廣嶺神社」で 7 月中旬に「祇園祭」が行われるので、このお祭りに関連した行事なのかもしれない。「遠敷祭り」については、若狭一宮である若狭彦神社と若狭姫神社のいわゆる秋祭りである。このお祭りが上根来集落の「廣嶺神社」でも若狭彦神社と同日に行われていたという。しかし 1945 年生まれの D さんは遠敷祭りについて語っていた一方、1955 年生まれの A さんはお祭りを行っていた記憶がないとのことなので、1960 年前後には「廣嶺神社」でのお祭りは行われなくなったのかもしれない。「ヤマノクチ」については、「山じまい」の行事であったと考えられる。冬には雪が降って炭焼きなどの山仕事ができなくなるので、山に 1 年間の感謝を伝える神事であった[21]。具体的には、集落の人が（神社の）掃除とか終わってから、ちゃんと服も着替えてお参りして、社務所でお神酒とおこわをお供え[22]」していた。また厄年の人がいる場合は、その方がお参りをして、鏡餅をお宮さんに供える行事が同時に行われた[23]。

次に宮司さんについて見ていく。宮司さんはかなり昔から若狭彦神社の宮司さんが兼任で務めていたようだ。しかしあまり「廣嶺神社」に顔を見せることはなかったようで、F さんは「わしら子供の時分には（宮司さんが）広宮神社に来た事は子供ながらに覚えとる。大人になってからは来んようになったな。そのこと(理由)はわしら分らんな[24]。」と語っている。宮司さんが「廣嶺神社」に顔を見せなくなった理由については A さんが現在の若狭彦

[20] 明鏡国語辞典より。
[21] 2022 年 7 月 8 日に行った A さんへの聞き取りより。
[22] 2023 年 12 月 11 日に行った A さんへの聞き取りより。
[23] 2022 年 7 月 8 日に行った A さん、2022 年 7 月 9 日に行った F さんへの聞き取りより。
[24] 2023 年 7 月 9 日に行った F さんへの聞き取りより。

神社の宮司さんからお話を伺ったようで、以下のように語っている。

> 彦姫神社の宮司さんも 2 年前に亡くなったんやけえ。今度新しい宮司さんが京都から来てくれとるんや。先代の宮司さんが亡くなった時に、この辺の神社の役員しとる人から初めて連絡あった。ほんで『今まで不義理しとったのは自分らも知っとるんや』と。っていうのは親の代からネゴリの者らと仲良くなかった。自分とこのお宮さんの木を勝手に切ったとか。木が折れてくるもんで、切らんならんやん。『そんなんを言うて仲が上手いこといっとらんで悪かったんや』と（新しい宮司さんが言っていた）[25]。

以上のように宮司さんとの些細なもめ事がきっかけで、「廣嶺神社」に顔を出すことがなくなった。また遠敷祭りが行われなくなった時期と重なっているので、宮司さんが顔を見せなくなったことが遠敷祭りの中止と関係しているのかもしれない。さてこれ以降は完全に住民たちが神社の管理をするようになったのだと考えられるのだが、常駐の宮司さんがいなかったこともあってか、住民たちの手で神社を管理するという意識がもともと強かったようである。それを象徴する一つが神社の「役」である。「役」の名前は A さんによると、「コウゾン」というそうだ。その「役」には、「年の順」に「持ち回り」で 2 年間就任し[26]、「お宮さんの世話役[27]」をする。また正月にはこの「コウゾン」さんが家に集落の人々を招待してもてなすこともあった[28]。

以上「廣嶺神社」について見てきたが、次は同様にお寺での行事と住職について述べていく。上根来集落にあるお寺の名前は「宗福寺」という。曹洞宗のお寺で、檀家の全てが上根来集落の住民であり、上根来の住民全員がその檀家である。聞き取りの結果明らかになった、この「宗福寺」で行われていた行事は以下の通りである。

表 4　上根来集落におけるお寺の行事

2 月 2 週目	涅槃
8 月 14、15、16 日	施餓鬼
8 月 15 日	盆踊り
8 月 23 日	地蔵盆

（出典）聞き取りより

以上のように「宗福寺」での行事はお盆に集中しているが、一つずつ見ていく。まず涅槃

[25] 2023 年 7 月 8 日に行った A さんへの聞き取りより。
[26] 2022 年 7 月 9 日に行った D さんへの聞き取りより。
[27] 2023 年 12 月 11 日に行った A さんへの聞き取りより。
[28] 2022 年 7 月 9 日に行った E さんへの聞き取りより。

とは一般的に、「釈迦入滅の日とされる陰暦二月十五日に釈迦を追慕して行う法会」であり、「涅槃図をかかげ、遺教経を読誦する」仏教行事である[29]。上根来集落では、「団子まき」をしたようで、「色のついた団子を集落の人らで持ち寄ってお供えして、その団子をお寺の中でまいて、それを拾って、持ち帰ったり、お寺で少しは焼いて食べたり」という行事もしていた[30]。次に施餓鬼とは、明鏡国語辞典では、「仏教で、餓鬼道に落ちて飢餓に苦しむ亡者のために行う供養。」とされている。上根来集落でも、集落中の人々がお寺に寄って、先祖の供養をしていた。また盆踊りについては、上根来の住民の楽しみの一つだったようで、同じ谷筋の下の集落との交流もあったようである。その様子を C さんは以下のように語っている。

> 盂蘭盆に盆踊りをした。若いとき、結婚するまでやね、友人がおった。学校の友人ではなしに。婦人会ではなし、まだ若いときやさけな。今でも友達でおるんやけど。若かったもんで友達になっとった。その友達も下根来くらいから踊りに来とったわ。その時分な。今でもよう話する、下根来の(友達と)。男も何人も踊りに来とったで。うちらからも男は 2.3 人行くしな。もうそんなことしか面白いことあらへんやん。あれより面白いことあらへんやんかって今でも言うとるわ[31]。

このように、上根来の住民が他の集落の盆踊りに行くこともあり、盆踊りは他の集落との交流の場であったようだ。次に地蔵盆についてだが、一般的に地蔵盆とは、主に京都周辺で行われる、子どもが地蔵をまつる行事である。。上根来集落でも、お寺で行われたわけではなかったようで、「ドノカ」という場所で行っていたとのことだ。「ドノカ」とはお寺より下にある（図 4 参照）延命地蔵のことで、ここにも建物がたっている。実際に上根来集落で行われていた地蔵盆は「ドノカに集落中の地蔵を集めてお参り」し、「大人がお供えしたお金やらお菓子を子どもがもらう[32]」というものであった。地蔵盆には小浜市の市長が訪れることもあったようで、「子どもら頑張ってるさかいおっちゃんら参りに行くぞって感覚で来てくれる市長さんが何代もあった」という[33]。

次に住職さんについて述べる。はじめは一家で上根来集落に住んでいたようだが[34]、1950 年頃から住職の奥様だけが上根来に残り、住職さんは東京へ出てしまったようである。その後、法事のたびに東京の住職にお願いするのが不便だったようで、近くのお寺にお願いするようになったようである。この時の様子について、F さんは以下のように語っている。

---

[29] 明鏡国語辞典より。
[30] 2023 年 12 月 11 日に行った A さんへの聞き取りより。
[31] 2022 年 7 月 10 日に行った C さんへの聞き取りより。
[32] 2023 年 12 月 11 日に行った、A さんへの聞き取りより。
[33] 2022 年 7 月 8 日に行った、A さんへの聞き取りより。
[34] 住職さんの家には、C さんの一つ上と三つ上の子どもがいたとのことだ。

それまでの住職は、「ひがしのきんえい」っちゅう和尚さんやったんや。「ひがしのきんえい」っちゅうて、なかなかえらい坊さんやったらしかったんやわ。その住職は上根来の宗福寺のお寺（の住職）やってんけど東京に住んどったんやわ。ほんでまあ盆とかやな、正月とか、人亡くなったっていうときも葬式しに帰ってこんなんやろ。ほいて遠く呼ぶもんでやな、まあなんかちょっとしたことあっても不便でしゃあないわな。まあの坊さんはそれでいいか知らんけどかなわんやけ。それでその時分に正明寺さんなら正明寺さんにこうなったさけえ、あっけむしてくれとか言うてな。あんじょう正式に頼んであるちゅうと危なかったけど。なんも言わんとそうしとったやろ。そやもんで何回も人死んだりなんかするっちゅうとやな、上根来の人で、ほんなら正明寺さんに頼みに行って来よか、遠敷なら遠敷にも神通寺っちゅう寺があんにゃけ、その寺へ頼みに言うて行ったんやわ。(東京の和尚に)いちいち言うとったら、あかんさけにちゅうて。(正式に)引き継ぐ前から、そんなことしとったんやわ[35]。

以上のようにして、他のお寺に法事をお願いすることが多くなったところで、住職が上根来に帰ってきた際に、引継ぎのお願いを住民の方からしたようである。そして「宗福寺」の住職は正式に正明寺[36]の住職さんに兼務してもらうようになった。

また神社の「宮役」と同様に、「寺役（寺総代）」もあった。「寺役」または「寺総代」とは一般的に、檀家の代表であり、お寺の運営に関わる人を指す。上根来では、「寺役」に 5 人就任するのだが、その中でも、「寺役」の代表を「筆頭総代」と呼び、5 人の中で「筆頭総代」を含めた重要な三人を「三役」と呼んでいる。その「三役」の任期は決まっておらず、4 年から 6 年就任するのが慣例である[37]。

2-2-4 「炭焼き期」の田畑とその管理

上根来集落では、その面積の差こそあれど、大方の世帯が畑と田んぼを所有しており、畑は家の周辺にあった一方で、田んぼは家の周辺にあるとは限らずにあちこちに点在していた。また農耕と肥料作りのため、牛を各世帯で飼っていたようである。ここでは田畑とその管理について、収穫物の利用と共同のいとなみについて見ていく。

まず畑については完全に自給用だった。畑ではイモ類、ゴボウ、夏野菜、玉ねぎ、大根など何でも作っていた。E の奥様は「ピーマン一つにしても、焼いたら本当にピーマンの香りがする」と語っており、上根来で採れた野菜は格別に美味しかったようだ。一方でお米については、ほとんどが自給用であるが、一部農協に供出していた。とはいっても「肥料代（を

[35] 2023 年 7 月 9 日に行った F さんへの聞き取りより。
[36] 「正明寺」は神宮寺の近くにある（図 3 参照）。
[37] 2023 年 12 月 11 日に行った、A さんへの聞き取りより。

稼ぐ）ぐらい[38]」のものであり、あくまでも余ったものを売る程度だった。また農耕用の牛についても、子どもを産ませて一年か二年育てたのちに「経済連」（経済農業協同組合連合会）に卸していた家もあった。

次に田んぼでの作業における共同のいとなみに注目する。田んぼは作業が大変である上に、水路が必要であるので、共同でのいとなみが必要不可欠であった。そこで、炭焼きでもそうであったように、大変な作業は「イイ（結い）」によって行っていた。特に稲刈りや脱穀を親戚同士で寄りあって行っていた家もあったが、元住民の皆さんが口をそろえて大変な作業だったと言っていたのが「肥やし上げ」である。「肥やし上げ」とは牛の糞尿から堆肥を作って貯めておく作業のことで、春先に田んぼへまく作業も「結い」で行ったようである。当時の様子を B さんは以下のように語っている。

> 牛の下に割り藁をほおりこんで、やがてそれをめくって、おばさんらが数人でその牛の糞と藁がいっしょくたになったのをまるめて、藁で編んだ背中あてに背負って、今で言うと肥やし袋の半分ぐらいの量かな、春先まで田んぼ始まるまで毎日や、それを集めて肥やし作ってためておくのが仕事やったんや。肥やし上げ、肥やし上げって言うとったけども。一軒で自分の家の分だけ作るってできんことなので、昔の「結い」というやつや。親類やら近所やらのおばちゃんらが五人なり七人なり集まって今日はうちや、明日は隣や、という具合に回って肥やし作りや。そうして作った肥やしを、田んぼ仕事が始まったら、その肥やしを何人かがまるめてほいっとほおり投げ、受け手はその臭いのを受けて背中に負うて田んぼに配ったということやな[39]。

以上の「肥やし上げ」は多くの方が臭いが強烈で嫌だったと語っており、精神的にも大変だった作業のようである。そういった意味でも「結い」を通して、みんなでやる意味があったのかもしれない。

また水路の管理も集落の共同で行ったようである。上根来集落の田んぼの場所は上の方から、「ウエノウラ」、「シイネ」、「シモクボ」と呼び[40]、大きく分けて 3 つあったようである。それに応じて 3 つの水路があったようだ。それらの水路の管理を当番制で行っていたようで、当時の様子を A さんは以下のように語っている。

> だから僕らの小さいころは水の時間割があったもん。あんたんとこは夜の 7 時から 8 時までやでとかって。朝やったらええわいな。夜とかやったら大変や。それが怖かったのを覚えとるわ。手掘りで水路を作って水を通しとったんや。水路のとこに蓋で止まるようにしとったんやわ。（して水を仕分けていた。）うちあんまり水引いてない

[38] 2022 年 7 月 9 日に行った D さんへの聞き取りより。
[39] 2019 年 6 月 4 日に行った B さんへの聞き取りより。
[40] 2022 年 7 月 10 日に行った C さんへの聞き取りより。

ってときは、当番やけど少し開けとくと、自分とこへも入るし下へも流れる[41]。

以上のように水路から田んぼに水が平等にいきわたるように、当番制で管理をしていたようである。このように、大変な作業であると同時に共同で水を使うので、田んぼでお米を作ることは「一軒ではできない」いとなみだったようである。

2-2-5 「炭焼き期」の生活（交通、行商、食事）

ここでは、「炭焼き期」の住民の生活について具体的に記述していく。その前に、上根来集落の状況を想起していただけるように、まずこの時期の上根来集落の人口と世帯数を「小浜市遠敷郷土誌」を参照する[42]。

表 5 「炭焼き期」の上根来集落の人口と世帯数

	昭和 35 年	昭和 37 年
上根来（人口）	119	112
上根来（世帯）	23	22

（出典）聞き取りより

この資料では昭和 35 年（1960 年）以降の統計しかないが、太平洋戦争中は何軒か疎開で親戚が来ている家があり[43]、その時は「大勢やった[44]」という。

それではまず交通状況、具体的には上根来周辺の「道」について見ていく。以前は土道すらなかったようだが、1950 年頃から遠敷の町から中ノ畑集落（図 3 参照）まで「ツルハシを振って作った[45]」土の道ができたそうだ。しかし「炭焼き期」では中ノ畑から上根来までの道はできなかったようだ。次に「行商」について見ていく。先程見たように「道」が整備されていない影響もあって、上根来集落から小浜市街へ買い物に行く機会は少なかったようである。そのためか、上根来集落には行商が来ていたようである。聞き取りの結果、多様な行商がいたのではないかと考えられる。まず小浜から上根来を超えて朽木まで向かう行商である。この行商は鯖を背負っており、炭小屋で休憩して朽木の方へ向かって行ったという。子どもの頃その行商を見た A さんは次のように語っている。

---

41 2022 年 7 月 8 日に行った A さんへの聞き取りより。
42 「小浜市遠敷郷土誌」(p124)、この資料では隔年で統計を取っている。
43 D さんの父親も戦争で負傷後、京都にいたが、疎開で上根来に戻ってきたという。
44 2022 年 7 月 10 日、C さん行った聞き取りより。
45 2022 年 7 月 9 日、F さんに行った聞き取りより。

炭を負いに行っとった時の記憶で、鯖を背中に背負って行商に朽木へ行く、おじさんがうちの窯で休憩して行ったんで覚えとんやわ。窯作って館してそこで仕事しとるやろ。ほんでうちの人らがそこで仕事しとるって知っとるもんで、休憩に寄って朽木の方へ行ったもんで。こうやってしとるんやわってその時思ったんを覚えとるんやわ。小学校 2、3 年以降はあんまり見んようになった。毎回同じおじちゃんやったわ[46]。

このように小浜から朽木に向かう行商については、朽木側の山で炭焼きをしていた A さんや B さんは目撃している一方で、そういった行商は見たことがないと語った人もいた。その一人の F さんが見た行商は以下のように語っている。

中ノ畑まで自転車で行商の荷物をのせて来てやな、中ノ畑で自転車を置いて、そこから（荷物を）背中で背負って上根来まで上がってくる。干した干物の魚やかまぼこ、ちくわなど売りに来た。男の人、二、三人のものが代わる代わるに来とった。朽木までは道はあったけんど、越えられない。上根来で行商して売って中ノ畑までまた戻り、中ノ畑から自転車で帰った。その行商は道ができても来とった[47]。

このように A さんが先に語っていた行商とはかなり食い違っているので、A さんや B さんが見た行商とは別の「自転車の行商」がいたと考えられる。また生業としての「行商」とは別の事情で行商をしていた人がいたという。その人は中ノ畑集落に住んでいて、「お父さんが山の事故で早くに亡くなって、駄菓子を仕入れて、夕方になるとネゴリの家に売りに来る」お母さん（亡くなった方のお嫁さん）だったという。

いずれにしても「炭焼き期」の上根来集落では多様な「行商」で賑わうほど、「鯖街道」の「行商」の文化が残っており、さらに「行商」を必要とするほど、「都市」とは隔絶された集落であったことが読み取れる。

さて続いては集落の住民の食生活を見ていく。基本的にお肉を食べることはなく、育てたお米と野菜、あとは乾物を食べるのが日常だったようだ。特に乾物は、越冬の保存食として若狭地方でよく食べられていた「サバのへしこ」を食べたようだ。そのため小浜市街に買い物へ出たときに食べる「焼きサバ」や、飼育していた牛が病気以外の理由で亡くなってしまった時に食べる牛肉はごちそうだったという。C さんは当時の食生活を以下のように語っている。

日々の食事は白米と人参のお浸し、大根の漬けもん（たくわん）、鯖とイワシのへシコを作って一年中食べた。大根もたくさん作った。沢庵をたくさん作って一年中あった。冬になると茎（葉っぱ）と大根を混ぜて、漬けもんを作った。夏は

[46] 2022 年 7 月 8 日、A さんに行った聞き取りより。
[47] 2022 年 7 月 9 日、F さんに行った聞き取りより。

きゅうりの糠漬けも造った。

魚は小浜に行って買ってくる。車がないので一日掛けの買い物だった。四月から五月のちょうど鯖のいい時期にへシコを作る。へシコはよう食べた。一年中食べた。小浜に行った時に焼きさばを買ってきてくれることがあったが、これはご馳走やった[48]。

しかしこの時期中ノ畑集落との食生活も少し異なっていたようだ。その違いが「お米」だったようで、Aさんは以下のように語っている[49]。

僕が小学校の1年生の頃、給食はあったんやけども、ご飯だけは持っていかなあかんかったんやわ。ほんで同級生の子とご飯食べるやんか。何！？って言うたん覚えてるわ。中ノ畑の人は麦飯やったんや。米いうたら白米しか知らんやん。びっくりしたもん。鮮明に覚えとるんや。ほんで珍しいし交換してほしいやん（笑）。そやけど食べれたもんやなかったな。

中ノ畑では地形的に「ほんまの谷なところ[50]」だったようで、田んぼがほとんどなかったようである。それに比べて供出できるほどお米ができる上根来集落は同じ小入谷の集落の中では恵まれていたのかもしれない。

2-2-6　「炭焼き期」の学校生活と卒業後の進路

上根来集落には小学校があり、中ノ畑集落と上根来集落の子どもたちが通っていた。ここでは「炭焼き期」の上根来小学校の沿革と学校生活、そして中学校卒業後の進路について具体的に記述していく。まず「小浜市遠敷郷土誌」を参照して、上根来小学校の沿革[51]と児童数の変遷[52]を見ていく。

---

[48] 2019年5月19日、Cさんに行った聞き取りより。
[49] 次の章で述べるが、中ノ畑の子どもと上根来の子どもは同じ上根来小学校に通っていた。
[50] 2023年7月8日、Aさんに行った聞き取りより。
[51] 「小浜市遠敷郷土誌」p251より。
[52] 「小浜市遠敷郷土誌」p252より。

表 6　上根来小学校の沿革

1941 年 4 月	国民学校令改定に基づき、遠敷村立上根来国民学校と改称する。
1947 年 4 月	新学校制度実施に伴い、遠敷村立上根来小学校と改称する。
1947 年 5 月	遠敷村立遠敷中学校、上根来分教室を設ける。
1949 年 4 月	遠敷中学校の上根来分校となる。
1951 年 3 月	町村統合により小浜市遠敷中学校上根来分校となる。
1953 年 9 月	小浜市第二中学校上根来分校と改称する。
1955 年 4 月	小浜第二中学校上根来分校を廃止する。 中学生は小浜第二中学校へ通学することになり、寄宿舎に入舎する。
1955 年 4 月	校舎を上根来二の一〇番地に新築移転する。

（出典）「小浜市遠敷郷土誌」p251 より。

表 7　上根来小学校　「炭焼き期」の児童数の変遷

西暦	男子生徒数	女子生徒数	合計生徒数
1940	19	13	32
1942	13	13	26
1947	11	11	22
1950	16	11	27
1955			33
1960			33

（出典）「小浜市遠敷郷土誌」p252 より。

表 4 で上根来小学校の沿革を見たように、中学校の名前の変化はあるが、大きな変化は 1947 年から 1955 年の間は上根来小学校に中学校の分校があったこと、そして 1955 年に校舎が新しい場所に移ったことである。それでは時代の流れとともに具体的な学校生活を見ていく。まず中学校の分校があった時の生活だが、C さん（1934 年生まれ）と F さん（1936 年生まれ）はこの分校に通っていたようで、「シンセイ中学」と呼んでいる。特に C さんは中学生になるのと同時に分校ができたようで、分校の様子を以下のように語っている。

> シンセイ中学校、私ら(のとき)から上根来で作ってもろて。上根来でまた三年行った、6 年生から。小学校のとこにもう一部屋作ってもろて、一部屋におった。そんなことって中々ないもんね。それも少ないもんで、1 年、2 年、3 年と一つの教室でおりました。先生 1 人で。そやけど 8 つ下の妹はもう二中行けてんわ。寄宿舎できて。（小浜に）出てきて寄宿舎入れてもろうて[53]。

このように分校とは言うが、小学校の教室を一つ借りるぐらいだったようで、1950 年代前半は中ノ畑までも道が整備されていなかったため、小浜市街への通学は現実的ではない

[53] 2022 年 7 月 10 日、C さんに行った聞き取りより。

と考えられての応急処置的なものだったのかもしれない。続いて校舎の移築についてだが、これは 1953 年の台風 13 号によって校舎が被害を受けたことが原因だという。この台風の被害を受けた後、新しい校舎に移るまでの間、小学生だった D さん（1945 年生まれ）は当時の様子を以下のように語っている。

> 昭和 28 年に 13 号台風で、災害があったんや。校舎が倒れかけたもんで、その時の新しい市長さん[54]がまあ誰かの知りあいやったらしいんやわ。ほんでこのついでに市長さんが新しい学校にしてあげるって。その間つっぱりした学校やったんやけど、三年生まではそこにおって、四年生から解体することになって、寺（宗福寺）とドノカの二か所で授業したんや。地蔵さん（ドノカ）は一年から三年までで、寺では四年生から六年生まで。ほんで五年生の時にできて新しい校舎に（通った）。そらもう学校から机も皆持ってきてんで。怖かったな。やっぱり寺やし。何かでないかなあとか（笑）[55]。

以上のように、学校を解体している間はお寺で授業を行っていたこともあったとのことだ。その後、新しい校舎ができて、A さん（1955 年生まれ）が入学した頃には給食も出るようになったそうだ。また中学校は小浜市街の「小浜第二中学校」に通うようになったようだ。ただその通学はかなり過酷だったようで、D さんは以下のように語っている。

> 中学校は二中言うて、街中。バスが下根来まで来る。中ノ畑までは歩いて行って、そこに男の子は自転車が置いてあって、そこから自転車。女の子はここから下根来まで歩いて行っとった。帰りも。坂が急で、女の子は上るのがしんどかったんちゃうかな。でやっぱり女の子はズボンでないやん。だからなおさらやと思うけど。男でも帰りは結構しんどかったで。自転車で上がんの。毎朝女の子は女の子で一緒やし。男の子は男の子で。同級生や無しに、三学年で一緒に行った。大体それでも十人おらんぐらいやな[56]。

以上のように、道が完全に整備されていない中ノ畑までは徒歩で、中ノ畑から下根来まで男の子は自転車、女の子は徒歩、その後下根来から学校まではバスが通っていたそうだ。また上根来では、冬は雪が 2m 積もるのは「ざら」だったようで、3 学期は中学校の寄宿舎で下根来や中ノ畑の生徒と共に暮らしたそうだ。

最後に中学校卒業後の進路についてだが、「炭焼き期」に中学校を卒業した C さん、F さ

---

[54] 「今島寿吉」という小浜市長で、台風 13 号の際、「もう小浜へでやれんときにヘリコプターでネゴリへ米を持ってきてくれた」（C さん、2022/7/10）こともあったようだ。
[55] 2022 年 7 月 9 日、D さんに行った聞き取りより。
[56] 2022 年 7 月 9 日、D さんに行った聞き取りより

ん、D さんについて以下の表[57]にまとめる。

表 8　「炭焼き期」における学校卒業後の進路

	中学校卒業年度	進路
C さん	1950 年	実家で炭焼きを手伝う。
F さん	1952(1)年	実家で炭焼きを手伝う。
D さん	1961(0)年	離村して、遠敷の町中へ出る。住みこみで大工の丁稚奉公。

（出典）聞き取りより

「炭焼き期」ではほとんどの家で実家が炭焼きをしていたので、C さんや F さんのように、中学卒業と同時に実家の炭焼きを手伝う家が大多数であったと考えられる。ただ D さんの家は、Dさんの父が戦争で負傷していて炭焼きが十分にできなかったことや、「山を持たない家」であった[58]こともあってか、Dさんは父親から大工になるように言われたという。その時の様子を以下のように語っている。

> その時分は先輩二人と同級生二人おった。その先輩二人と同級生と三人、林業（炭焼き）行ったけど、私だけは体も小さいし山は無理や言うことで。卒業と同時に、勝手に親父がお前は大工せえと。親も体弱かったもんで、あんまり反抗できんかったもんで、しゃーないかな思て、いやいや行ったんや。卒業と同じ年に降りたんやけど、昔はここら一帯田んぼがあったんやわ。一番大事な水路が水害かなんかで壊れたもんで、それを直してから、住み込みで、〇〇建設いうとこ行ったんや[59]。

しかしDさんの語りにあるように、やはり卒業と同時に上根来を出て、働きに出るということは稀で、やはりこの時期は上根来に残って、実家の炭焼きをするのが普通だったと考えられる。

2-2-7　「炭焼き期」の集落の意思決定と集まり

上根来集落の意思決定は区長制度と寄合によって行われていた。そこでこの章では、上根来集落の寄合と青年会、婦人会について述べていく。区長については、「次はあの人にし

[57] 2022 年 7 月 9 日に行った D さん、2022 年 7 月 9 日に行った F さん、2022 年 7 月 10 日に行った C さんへの聞き取りから作成した。
[58] 「親父はちょっと炭焼きやっとった」とのことなので、区有林で炭を焼いていたと考えられる。
[59] 2022 年 7 月 9 日に行った D さんへの聞き取りより。

よか、ちゅうてみんなで大体決めて[60]」選んでおり、1 年任期であった。そうして選んだ区長が「決まりごとは責任を持って言い出して、寄合をまとめていた[61]」そうだ。その寄合は「常会」と言っていたようで、月に 1 回宗福寺で開かれ、世帯の代表者（主に男性）が集まって、集落の大事なことを決めていた。またこの時に電気料金等の集金や税金の徴収[62]も行っていたようである。電気会社や農協からの請求書は一軒一軒に届くが、それを区長が集金して、一括で精算していたそうだ。また寄合は上根来集落の「昔の話」を耳にする場であったようで、「どこの家が由緒ある家で、庄屋の隣居」だったとか、「その庄屋はええ家やったらしいけど、火事でなくなったらしい」といった話を寄合でよく聞いたと D さんは語っている[63]。

次に青年会と婦人会について述べていく。青年会については、F さんが中学校を卒業して、加入したときには 10 人そこそこしか入っていなかったようだ。その後 5 年ほどすると自然消滅してしまったようなので、1960 年頃にはなくなってしまったと思われる。その活動内容も「何をするということもせんなんだ[64]」そうだが、C の夫が会長をしていた頃は「天橋立にボートに乗りに行ったり、福井博覧会見に行ったり」と旅行には行ったそうだ。F さんはこの時に初めてテレビを見たそうで、その時の様子を以下のように語っている。

> 昭和 23 年に福井の大きな震災があったやろ。昭和 27 年に福井の復興博覧会があったんやわ。その青年会で博覧会を見に行ったのは覚えとる。その時に博覧会の中にテレビがあった。ごっつい画面が 14 型ぐらいのもんやったけんど、はじめて見たテレビやったんや。テレビっちゅうのはこんなもんかってなあ[65]。

一方で婦人会の活動はもう少し活発だったそうだ。婦人会でも旅行にはよく行ったようだが、踊ったり、芝居したり、歌ったりして、それを披露することもあったようだ。その婦人会の芝居は平日の夜に学校で行われることもあったそうで、それが大変面白かったそうだ[66]。また婦人会は遠敷地区の他の集落とも交流があったようで、遠敷地区全体の婦人会で、旅行に行ったこともあったようだ。また上根来の婦人会で役を作って、遠敷地区全体の婦人会で何か報告することもあった。

---

60 2022 年 7 月 10 日に行った C さんへの聞き取りより。
61 2022 年 7 月 9 日に行った F さんへの聞き取りより。
62 A さんはこれを「納税組合」と語っていた。納税貯蓄組合のことであると考えられる。
63 2022 年 7 月 9 日に行った D さんへの聞き取りより。
64 2022 年 7 月 9 日に行った F さんへの聞き取りより。
65 2022 年 7 月 9 日に行った F さんへの聞き取りより。
66 2022 年 7 月 9 日に行った D さんへの聞き取りより。

2-3　分収造林期

2-3-1　「分収造林期」の産業

以上、集落の産業として「炭焼き」が主流であった「炭焼き期」を見てきたが、エネルギー革命をきっかけに、1963 年（昭和 38 年）以降、集落として「分収造林」に取り組むこととなる。このように集落の大半の世帯が「分収造林」に参加していた、1976 年（昭和 51 年）までを「分収造林期」と定義する。それでは、「分収造林期」(1963 年〔昭和 38 年〕～1976 年〔昭和 51 年〕)について、「2-2 炭焼き期」と同様に、(1)産業から項目ごとに記述していくことにする。

1950 年代に中東やアフリカで相次いで大油田が発見されたことから、石油が世界的に潤沢に供給されるようになった。日本では戦後しばらくの間、「外貨割当制度[67]」のもと輸入が規制されていたが、1962 年（昭和 37 年）になって原油の輸入が自由化される。すると政府は利便性の高い石油を中心としたエネルギー政策に舵を切り、以降も「エネルギー革命」は加速度を増して進んだ[68]。この「エネルギー革命」の煽りを受けて、上根来集落でも、炭焼きで生計を立てることは難しくなった。そこで 1963 年に集落の区有林を「森林開発公団[69]」と契約し、集落ぐるみで「分収造林」を行うことになった。「分収造林」とは、「林地所有者、投資者、造林実施者の 3 者あるいは 2 者が共同で植林を行い、伐採時の収益を土地、資本、労働力の各生産要素に基づき、一定比率で分配する方式[70]」の林業である。ただ「分収造林」には多様な形態が存在する。その種類は、「①部分林（国有林に公共団体または私人が造林する）、②官行造林（公有林に国が造林する）、③県行造林（民有林に都道府県が造林する）、④公団造林（民有林に森林開発公団（現、国立研究開発法人森林研究・整備機構森林整備センター）が造林する）、⑤公社造林（造林公社が私有林に造林する）、⑥一般分収造林（民有林に多様な造林者（個人、団体など）が造林する）、⑦借地林業（定期的に地代を払い、又は伐採時に収益分収制をとる）（井上 1984：148、塩谷 1984：46-47）[71]」に分け

---

67 「外貨割当制度」とは、「輸入代金の支払いに必要な外貨の発行を政府の許可制とすることで、自由貿易をコントロールする制度」のことである。

68 経済産業省、資源エネルギー庁の記事（2018/5/24）
「【日本のエネルギー、150 年の歴史③】エネルギー革命の時代。主役は石炭から石油へ交代し、原子力発電や LP ガスも」を参照した。（最終閲覧日 2023/12/07）
https://www.enecho.meti.go.jp/about/special/johoteikyo/history3shouwa.html

69 「農用地整備公団」と合併して、何度か名称を変更し、現在は「国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林整備センター」となっている。
「国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林整備センター」の HP、「沿革」より
（最終閲覧日 2023/12/07）https://www.green.go.jp/annai/enkaku.html

70 「ブリタニカ国際大百科事典」より。

71 井上由扶『森林経理学』地球社、1984 年、塩谷勉『改訂　林政学』地球社、1984 年

られる。上根来集落の「分収造林」はこのうち「④公団造林（民有林に森林開発公団（現、国立研究開発法人森林研究・整備機構森林整備センター）が造林する）」である。「公団造林」は、土地所有者が造林するのに必要な費用を公団が負担して分収にあずかるという特殊な制度であるが、その具体的な仕組みを以下の図[72]に示す。

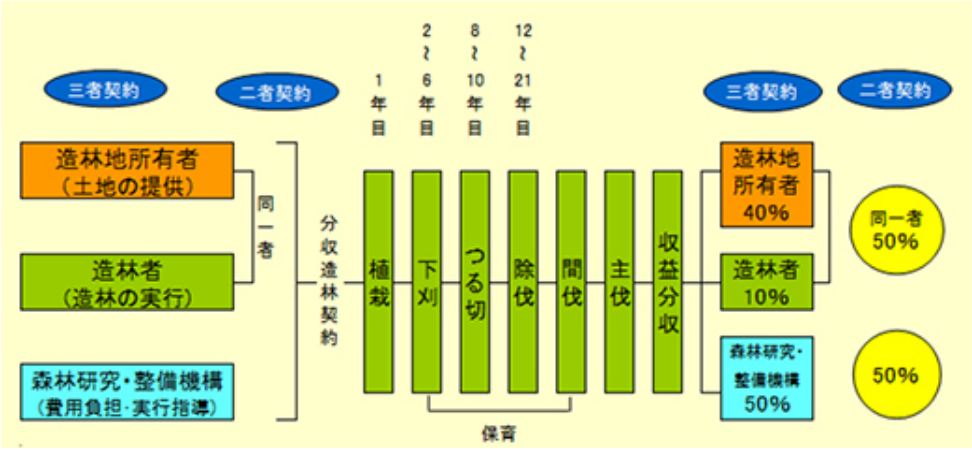

図 4　「公団造林」の仕組み①

（出典）「国立研究開発法人森林研究・整備機構森林整備センター」の HP、「水源林造成事業のしくみ」より。

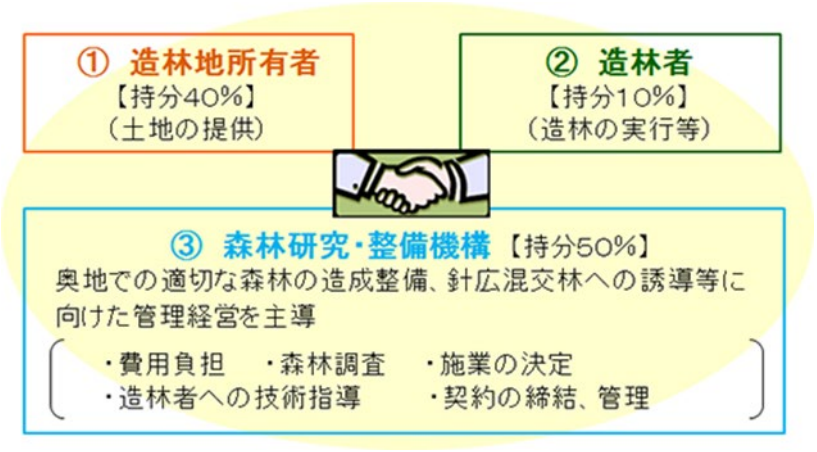

図 5　「公団造林」の仕組み②

（出典）「国立研究開発法人森林研究・整備機構森林整備センター」の HP、「水源林造成事業のしくみ」より。

72　「国立研究開発法人森林研究・整備機構森林整備センター」の HP、「水源林造成事業のしくみ」より。（最終閲覧日 2023/12/07）
https://www.green.go.jp/suigenrin_jigyo/shikumi/index.html

この図に示す「公団造林」とは、「①造林地所有者」の土地に、「③森林研究・整備機構」である「森林開発公団」が費用の負担と技術指導などを行い、「②造林者」が植林から育林と間伐、主伐まで行って出た収益を、三者契約の場合は「①造林地所有者：②造林者：③森林研究・整備機構」が「4:1:5」、二者契約の場合は「①②造林地所有者かつ造林者：③森林研究・整備機構」が「5:5」で分ける制度のことである。上根来集落の場合は、集落の住民全員で、収益を受け取るための法人「上根来生産森林組合」を立ち上げて、「①造林地所有者」は「上根来生産森林組合」、「②造林者」は「小浜市森林組合[73]」、「③森林研究・整備機構」は「国立研究開発法人森林研究・整備機構森林整備センター」の三者契約を結んでいる[74]。

それでは上根来集落の暮らしにおけるこの時期の「分収造林[75]」とは具体的にどのようなものだったのだろうか。まずどのくらいの区有林を「公団」と契約したかであるが、最終的には300町ほど契約している。つまり300ヘクタール、ありふれた例えで表すと、東京ドーム約64個分の面積であり、これは「福井県嶺南地方」で一番面積の大きい「分収林」だという。また上根来では、2個所で「分収造林」を行っており、言葉で表すと、1号地は「牛小屋から真っ直ぐ上」の「百里が岳の裏」で「ずいぶん面積は広い」一方で、「2 号地」は「1号地」とは方角の違う、「鯖街道の方」で、面積は「そんな大きくなかった[76]」という。さて、「分収造林」の具体的な作業であるが、全部手作業だったようで、「今やったら考えられん[77]」と語るほど、大変な作業であった。最初は「広葉樹から針葉樹に木を植えかえる[78]」作業をした。「2-2-2『炭焼き期』の森林の利用」で述べたように、区有林は「山のない者」の炭焼き場であった。炭焼きには広葉樹を用いるので、「それらを切ってスギやらヒノキやらを植え[79]」ていった。また300町分も植えていったので、植える作業と並行して、先に植えた苗木の周りの下刈りをしていった。その様子をCさんは以下のように語っている。

> 山の木を切って、杉を植える。杉を三本植えるくらいの畝に作るんやわ、男の人は。木を切ってその間に木をみな積んで。男はその仕事をするし、女は杉を植えた後の下刈り。夏になると草伸びてくるやろ、木は小さいやろ、そやもんで下刈りって。日当たるように。その仕事しとった[80]。

---

[73] 現在は合併を繰り返し、「れいなん森林組合」となっている。

[74] 「三者契約」を結んでいるが、植林や育林作業の主体は上根来の住民であり、「小浜市森林組合」はあくまでも「窓口」にすぎないという。
（2023年12月11日、Aさんへの聞き取りより）

[75] 厳密には「公団造林」であるが、多くの元住民が「分収造林」と語っていたので、以後は「分収造林」で統一する。

[76] 2023年7月9日に行ったFさんへの聞き取りより。

[77] 2023年7月9日に行ったBさん母への聞き取りより。

[78] 2022年7月9日に行ったFさんへの聞き取りより。

[79] 2022年7月9日に行ったFさんへの聞き取りより。

[80] 2022年7月10日に行ったCさんへの聞き取りより。

このように数年間は、男女問わず、「出られる人は皆んなで[81]」「分収造林」の作業をしていた[82]。しかし、スギやヒノキの苗を造林地に運ぶことも、人力で苗を背負って、山の上まで持って上がるため、繰り返しになるが、かなり大変な作業であった。

ただ収益については、「炭焼き期」に比べて幾分か良くなっており、「必死になって炭焼いとるのに比べれば上等[83]」だとBさんも語っている。それは「給料もらって働くようになった[84]」からであり、「森林開発公団」が植林する人夫賃や苗木を購入する代金を負担するようになったことに起因する。「炭焼き期」では、お盆頃にしか現金収入を得られなかったのが、「分収造林期」では、安定して一定の賃金をもらえるようになったのだから、生活が少し安定するようになったことは想像に難くない。賃金については、仕事量によって変わる[85]とのことだが、Bさんによれば、当時の価値で、「男の給金が一日千円、女の人は七百円か八百円」で「結構な金額やった[86]」という。

しかし上根来集落の全ての世帯が「分収造林」に参加していない点には注意したい。D家やG家を含む5世帯は「分収造林」には参加していない[87]。先述したように、作業が大変であったこともその原因の一つで、D家はそういった理由で参加できなかったと考えられる。一方でG家やもう一軒の場合は、「分収造林」に参加せず、美浜の原子力発電所まで働きに出ていたという。ちょうど1960年から70年代にかけて若狭湾沿岸に原子力発電所が建設されていったのである[88]。また「分収造林」を開始して6年経った1967年には、女性が誰も「分収造林」に参加しなくなった。そして婦人会でドレス作りをするようになるのだが、「2-3-7『分収造林期』の集落の集まり」で後述する。

2-3-2 「分収造林期」の森林の利用

では、産業が「炭焼き」から「分収造林」に変わることで、森林の利用はどのように変化したのだろうか。年代の変化に伴う「森林の利用」の変化を以下の表にまとめた。

---

[81] 2023年7月9日に行ったBさん母への聞き取りより。

[82]多くの家で両親2人が参加しており、Bさんによれば「家によっては1人だけ働きに出るとこもあれば、場合によってはじいちゃんも入れて3人働くとこもあった」（2019/6/4）。

[83] 2019年6月4日に行ったBさんへの聞き取りより。

[84] 2019年6月4日に行ったBさんへの聞き取りより。

[85]Fさんは 「仕事できんと賃金も少ななるんや。」「植えた分だけお金になる」（2023/7/9）と語っている。

[86] 2019年6月4日に行ったBさんへの聞き取りより。

[87] 2023年7月9日に行ったFさんへの聞き取りより。

[88] 小浜市でも1960年代末に「小浜原発」の建設計画に揺れた。しかし「原発設置反対小浜市民の会」の活動により、誘致は断念された。
毎日新聞2022.05.14　地方版／福井　23頁「若狭の海を守る：中嶌哲演と原発／３　はねのけた「小浜原発」　署名１万３０００筆、活動実る　／福井」より

表 9　上根来集落　森林の利用

	区有林					寺所有の山
分け山 （年代不明）	個人登記（「私有地」） →2 個所均等に分割 （クチの山、オクの山）			区有林		宗福寺
「炭焼き期」	炭焼き			植林、伐採 （針葉樹）	炭焼き （山のない者）	
「分収造林期」 (1963 年以降)	分収造林	植林	広葉樹	植林、伐採 （針葉樹）	分収造林	広葉樹

（出典）聞き取りより

表 9 に見るように、「分収造林期」の「私有地」では、2 つの利用方法が存在したことが分かっている。まず「植林できそうな山のところは、生産森林組合の名義にして、分収造林へ提供してある[89]」という。つまり、比較的穏やかな「私有地」は、「区有林」と同じ扱いとして、「分収造林地」になったのだ。一方で、「植林の出来ないような険しい山については個人の持ち主で残っている[90]」という。その「私有地」のまま残った山では針葉樹の造林を行った。これが二つ目の利用である。「分収造林地」での造林以外にも、個人の山で、余裕のある家はスギなどの針葉樹を「ちょっとばかし造林した[91]」という。

また「2-2-2　『炭焼き期』の森林の利用」で、「分け山」する際に、登記時にお金がなく登記できなかった土地があったと述べた。こういった未登記の森林は、この時に、「分収造林地」とは別に、「上根来生産森林組合」として登記したという。

そして、「私有地のまま残った」山のうち、造林ができなかった山については、手を加えなくなり、「炭焼きせんようになってからはそのまんま[92]」広葉樹林として残っている。

一方、「区有林」は、その多くをこの時に「上根来生産森林組合」として登記し、「分収造林」を行った。それが、「分収造林地」の 2 個所の中に含まれている。一方で「昔のマゴジサン（祖父）から（針葉樹を）植えた[93]」区有林については、「分収造林地」から外されており、引き続き植林と育林、伐採を行った。

また区有林の「集落の共有財産としての利用」は炭焼き期の時から変わっていない。「分収造林期」にも集落でバス旅行に行っていたが、その費用を「生産森林組合」から一部補填し

[89] 2023 年 12 月 11 日に行った A さんへの聞き取りより。
[90] 2023 年 12 月 11 日に行った A さんへの聞き取りより。
[91] 2022 年 7 月 9 日に行った F さんへの聞き取りより。
[92] 2023 年 12 月 11 日に行った A さんへの聞き取りより。
[93] 2022 年 7 月 9 日に行った F さんへの聞き取りより。

ていた。この時に小学生だったA さんは以下のように語っている。

> 僕ら 3,4 年生で分収造林始まった頃記憶に残っとるのは、集落でバス旅行があったんやわ。大型バス二台ぐらいで行った。土道やし、ぐねぐねやし、峠で酔うに決まっとったけど、それがああ良いなあっていう思い出やわ。その時分で、一年に一回、旅行計画しよかっていう人もおったんやわ。奈良の動物園も行ったし、琵琶湖の紅葉パラダイスも何回も行ったな。分収造林である程度収益を挙げられたもんで、そのお金を補填して、あと足らん分は会費をとって計画したんやと思うわ。そういうのも知恵やんか。割り勘やと行けん家も出てくる。多分分収造林で挙げたお金を、生産森林組合から、三分の二ぐらい出して、参加費取って計画したんやと思う。だから集落の人みんなが行けたんやわ[94]。

このように、集落でのバス旅行は、「分収造林」での収益を一部補填することで、継続して行われた。そういった意味では、「分収造林期」においても、「区有林」は「集落の住民が仕事をして、稼ぎを得る場」としてだけでなく、「集落の共有財産」として捉えられていたといえる。また上根来集落には、「私有地」と「区有林」の他に、「宗福寺所有の森林」がある。この「宗福寺所有の森林」は「2 か所かそこらしかな[95]」く、大きな面積を持つものではない。そして、名義上は宗福寺になっているが、管理は「昔から上根来の人らで管理しとった[96]」という。そのお寺の山は、「炭焼き期」には、「私有地」の少ない人や山のない者の炭焼き場として利用されていた。しかし「分収造林期」には、手を加えなくなり、広葉樹林のまま残るようになった。

2-3-3 「分収造林期」の寺社とその行事

続いて、「分収造林期」の「寺社とその行事」について見ていくのだが、「2-2-3『炭焼き期』の寺社とその行事」で述べたように、「はっさく」と「サイヤレ祭り」、「遠敷祭り」は「炭焼き期」の途中で行われなくなってしまったので、神社の行事で残っているのは「山をしまう」行事である「ヤマノクチ」だけである。しかしその「ヤマノクチ」も「(昭和) 40 年 (1965 年) 以降は決まってせんようになった[97]」という。その理由についてF さんは以下のように語っている。

---

94 2022 年 7 月 8 日に行ったA さんへの聞き取りより。
95 2023 年 7 月 9 日に行ったF さんへの聞き取りより。
96 2023 年 7 月 9 日に行ったF さんへの聞き取りより。
97 2022 年 7 月 9 日に行ったF さんへの聞き取りより。

ヤマノクチっていうのは山に（雪で）行けんようになったときに、山の神さんに一年働かしてもうたってお礼みたいなことやったんやな。（昭和）40 年ぐらいになったら山行くもんもおらへんし、ずるずるいつっちゅうことはなしに無いようになってもうたんやな[98]。

F さんはヤマノクチがなくなったと語っているが、実際には、現在もヤマノクチは行われており、G さん（1969 年生まれ）も「ヤマノクチはずっと今まで続いてます[99]」と語っていた。この矛盾はヤマノクチの行事の形態が変わったことが原因だと考えられる。A さんは現在の行事について、「行事って言うか（言うより）、みんなで順番にお参りするぐらい」で、厄年の人がいる場合は、「厄の餅とかをお供えする程度になった」と語っていた[100]。つまり昭和 40 年頃から、「ヤマノクチ」が行事として形骸化するようになったのだと考えられる。だからF さんにとって、「山に 1 年間の感謝を伝える神事」という本来的な意味での「ヤマノクチ」はなくなってしまった。同じ「山に行く」とはいっても、森林開発公団から「もらった」苗を植林して、「賃金」を得る「分収造林」と、山や大地の恩恵を受けてできる「炭焼き」では意味合いが異なっており、それが本来的な「ヤマノクチ」が行われなくなった原因なのかもしれない。

一方で、お寺の行事は「分収造林期」でも、比較的継続して行われている。「施餓鬼」と「盆踊り」、「地蔵盆」そして「涅槃」も全て行われていた。また「施餓鬼」や「盆踊り」には、上根来を「出とる人も戻ってきて[101]」参加していたという。この時既に集落を出ていた D さんも「盆に皆それ（盆踊り）を楽しみに帰ってきてくれたさかいなあ」と語っている。一方で子どもの行事である「地蔵盆」に関しては、「2-3-6『分収造林期』の学校生活と卒業後進路」でも後述するが、上根来ではかなり子どもが少なくなっていたこともあり、かなり規模を縮小して行われた。この頃まだ小学生にもなっていなかった G さんは、「僕が知ってる地蔵盆は C さんとこの車庫なんですよ。お地蔵さんが集落の各所にあって、それを 1 か所に集めて参るんですけど、C さんとこの車庫でしたのは覚えてます。ドノカでした記憶はないです[102]。」と語っている。また「僕が小学校入った時は、小学生が 3 人なんですよ。で、2 年生の頃から僕と姉だけなんです。その頃には地蔵盆はなかったんじゃないかな[103]。」とも語っている。これらを踏まえると、1970 年頃には子どもの数の減少に伴って、規模を縮小して「地蔵盆」を行っていたが、1975 年頃になると完全に行われなくなったと考えられる。

---

98 2022 年 7 月 9 日に行った F さんへの聞き取りより。
99 2023 年 12 月 10 日に行った G さんへの聞き取りより。
100 2023 年 12 月 11 日に行った A さんへの聞き取りより。
101 2022 年 7 月 9 日に行った D さんへの聞き取りより。
102 2023 年 12 月 10 日に行った G さんへの聞き取りより。
103 2023 年 12 月 10 日に行った G さんへの聞き取りより。

2-3-4 「分収造林期」の田畑とその管理

次に「田畑とその管理」は「分収造林期」にどのように変わって行ったのだろうか。詳細は「2-3-5『分収造林期』の生活」で、上根来の人口減少について述べるのだが、「分収造林期」では、学校卒業後、町に仕事を求めて離村することが多くなった。そのため田んぼの管理を担う人が減ってしまった。しかし田んぼの作業はかなり大変で、人手がいるので、町に出た子ども達の多くは、田んぼの作業の手伝いのために、定期的に上根来へ帰って来ていた。実際に D さん、E さん、A さんも田んぼの手伝いに帰って来ていたと語っている。特に D さんは「僕らは、田を植える時と収穫するときは、休みもろて帰ってきて、（手伝いを）したんや。それはもう条件付きでって（勤め先に）言うとったもんで。田んぼを植える五月の終わりから六月、ほんで秋は九月の終わりから十月に一週間から十日ぐらい（帰って来ていた）[104]。」と語っており、町に出た子ども抜きでは、田んぼの作業が出来ないことがよく分かる。

また E さんが「耕すのは全部わしがしとった。機械化になったのは、わしの二十歳ぐらいの時やろか[105]。」と語るように、1970 年から 1975 年頃には、田んぼの作業も機械化が進むようになった。すると、「牛を飼う必要もなくな」るようになり、牛糞での肥料作りもしなくなって、「その頃になったら化学肥料に変わっていった。」という[106]。この背景には、分収造林によって、収益がよくなったことも関係していると考えられる。「分収造林の仕事やった方が収入もいい[107]」という語りにもあるように、かなりの労力をかけてまで、田んぼをやる必要性がなくなってきたのかもしれない。

またこれによって、「結い」にも変化が見られるようになった。前述したように、肥料が化学肥料に変わっていったことで、「肥やし上げ」を行わなくなった。実際に G さんは「結い」による肥料作りは知らないと語っている[108]。一方で、田植えや稲刈りは、機械が入るのが遅かったようで、小さい頃の様子を以下のように語っている。

> 田植えは、山の田んぼなので、機械が入らないんですよ。全て手になるんです。稲を刈るのもほとんど手。後で、動力だけど手押しで操作する、バインダーっていうコンバインの小っちゃいようなやつがあって、それは稲を刈って、束にして、括ってポイと投げる機会なんですけど、後で入れたんです。それまでは鎌で刈ってた。後で手押しの田植え機を使いだしたんですけど、手で植えてた時は時間かかった。僕は小っちゃかったから、行かへんかったけど、自分の母親が、今日はあっちへ手伝いに行く、今日は自分ちへ手伝いに来てもらうみたいな感じで日を決めてしてい

[104] 2022 年 7 月 9 日に行った D さんへの聞き取りより。
[105] 2022 年 7 月 9 日に行った E さんへの聞き取りより。
[106] 2023 年 12 月 11 日に行った A さんへの聞き取りより。
[107] 2023 年 12 月 11 日に行った A さんへの聞き取りより。
[108] 2023 年 12 月 10 日に行った G さんへの聞き取りより。

た。お弁当もおやつも持って行って、お昼はみんなで食べながら。僕はおやつだけ食べに行ったのは覚えてます（笑）[109]。

このように「分収造林期」の頃には、田植えや稲刈りは、依然として、「結い」で行っていたことが分かる。また A さんも「田植えの時は、一日で植えんとあかんのでので、その時は「結い」で何人か女の人らが行ったり来たりはしてました [110]」と語るように、田植えは主に女性が「結い」で行う作業であった。

2-3-5 「分収造林期」の生活（交通、行商、食事）

続いて、「分収造林期」の生活について、具体的に記述する。まず「2-2-5『炭焼き期』の生活」と同様に、「小浜市遠敷郷土誌」を参照して [111]、この時期の上根来集落の人口と世帯数の増減を見る。

表 10 「分収造林期」の上根来集落の人口と世帯数

	昭和 39 年 (1964 年)	昭和 41 年	昭和 43 年	昭和 45 年	昭和 47 年	昭和 49 年 (1974 年)
上根来（人口）	104	89	81	79	78	73
上根来（世帯）	23	22	22	22	21	20

（出典）「小浜市遠敷郷土誌」p124 より

以上の統計より、「分収造林期」では、人口と世帯数の双方が緩やかに減少の一途をたどっていることが分かる。特に世帯数以上に、人口の減少幅の方が大きい。これは「炭焼き期」と違い、中学校や高校を卒業後、集落に残って親の仕事を継ぐことはなく、町へ出るようになったことが原因と考えられる。この点については「2-3-6『分収造林期』の学校生活と卒業後進路」で詳しく述べることにする。

それでは「炭焼き期」と比べて、小浜市街へはどのぐらい容易に出られるようになったのだろうか。聞き取りによると、1975 年頃になってようやく、遠敷の町から上根来まで、道が完全に舗装されるようになり、街中へでるのが容易になった。しかしコンクリート舗装が完了する以前から、上根来の住民でも車や単車を持つ人が現れるようになっていた。実際に 1970 年前後には、C さんの夫が「トラック一番先に買うて、みんなの供出の米を遠敷まで運ん [112]」だり、G さんの父が原発の仕事に車で行ったり、生活の中で車が重要な役割を果

[109] 2023 年 12 月 10 日に行った G さんへの聞き取りより。
[110] 2023 年 12 月 11 日に行った A さんへの聞き取りより。
[111] 「小浜市遠敷郷土誌」p124 より。この資料では隔年で統計を取っている。
[112] 2022 年 7 月 9 日に行った D さんへの聞き取りより。

たしており、その 5 年前頃には単車に乗っていたことから、「分収造林期」では「炭焼き期」と比べて、格段に町に出やすい状況になっていた。

また交通状況の変化と同様に、行商も変化するようになった。まず「炭焼き期」の行商で述べた、「小浜から上根来を超えて朽木まで向かう行商」は 1965 年頃には次第に見られなくなった一方、「自転車の行商」は道ができて以降も来ていた。しかし次第に道が舗装されて、車が普及するようになると、「車の行商」が来るようになったと F さんは語っている。

> ようけ（車の）行商おったさけえな。行商どおしの縄張りになって、上根来に来る行商は決まってしまった。３日に１ぺんぐらい来とった。車でくるもんで、生ものやお肉もあった。こっちも今度来る時は何々を持ってきてくれと言っとくと、ちゃんと持ってきてくれたしな[113]。

ここで言う「決まった（同じ）車の行商」は、「遠敷の魚屋[114]」さんだそうだが、F さんが語った通り、頼めば別の商品を持ってきてくれたという。この頃になると、買い物に行くことが少しは容易になるので、食生活も比較的街中の食生活に近づいたことが想像に難くない。

2-3-6 「分収造林期」の学校生活と卒業後進路

次いで、「分収造林期」の具体的な学校生活について記述していくのだが、まず上根来小学校の児童数はどのように変化していったのだろうか。

表 11 上根来小学校 「畜産期」の児童数の変遷

西暦	男子生徒数	女子生徒数	合計生徒数
1965	19	16	35
1970	7	8	15
1975	2	1	3

（出典）「小浜市遠敷郷土誌」p252 より。

以上の表 9[115]より、「分収造林期」の 10 年間で、上根来小学校の児童数が激減していることが読み取れる。この原因については二つ考えられる。一つは中ノ畑集落の人口が激減した

[113] 2022 年 7 月 9 日に行った F さんへの聞き取りより。
[114] 2023 年 12 月 10 日に行った G さんへの聞き取りより。
[115] 「小浜市遠敷郷土誌」p252 より。

ことである。「小浜市遠敷郷土誌」を参照して、中ノ畑集落の人口の推移を見ていく[116]。

表 12　中ノ畑集落の人口と世帯数

	昭和 39 年 (1964 年)	昭和 41 年	昭和 43 年	昭和 45 年	昭和 47 年	昭和 49 年
中ノ畑（人口）	101	88	48	36	35	25
中ノ畑（世帯）	18	18	12	9	8	6

（出典）「小浜市遠敷郷土誌」p124 より。

以上の表から分かる通り、中ノ畑集落の人口と世帯数はこの 10 年間で三分の一以下になっている。中ノ畑の離村の様子について、A さんは以下のように語っている。

> 水害があったのは（昭和）28 年か。中ノ畑の家が何軒も流れてしもとるんやわ。そんなんからじゃないかな。とにかく中ノ畑は谷あいなもんで、田んぼがなかったんや。なもんで、生活しにくかったんやろうなあ。ほんで道路がついてきたらいの一番にこっち（下）へ収入求めて出てきたんやろうやあ[117]。

A さんが語るように、中ノ畑は地理的要因によって、1953 年の水害による被害が甚大であったことに加えて、田んぼはほとんどなく、森林の面積も上根来と比べるとかなり小さかったという。そのため、小浜の町へ出やすくなった 1960 年代後半から、離村が止まらなくなり、上根来小学校の児童数激減に影響した。もう一つの要因は、上根来集落の住民も、学校卒業後に、町へ出ていくことが多くなったことであるが、この点は後に述べる。

さて、具体的な学校生活についてはどのようなものだったのか。昭和 41 年（1966 年）3 月 29 日の福井新聞の記事を一部引用する。

> 上根来小学校は児童数三十五人、男十九人、女十六人で上根来、中の畑両集落の児童が通学している。校長は近くの下根来小学校とかけ持ちの津田治彦先生。下根来小学校とは約四キロ離れており、津田校長は二、三日に一回ずつ両校をバイクで往復している。同小へきて二年目の加福宏行先生（二四）と昨年大学を卒業した三谷友子先生の若い二人が活躍している。
>
> 児童数が少ないため授業はもちろん複々式。四、五、六年を加福先生、一、二、三年を三谷先生が受け持っている。合理的な学習指導を研究するとともに児童たちに自習協同学習の態度を育てるのが、両先生の念願である。授業が時間帯どおりには進まないのが悩みだが、「ノロノロ運転で楽しい授業を続けている。両先生ともはりきっ

116 「小浜市遠敷郷土誌」p124 より。
117 2022 年 7 月 8 日に行った A さんへの聞き取りより。

ているのが何よりうれしい」と津田校長は顔をほころばせている。校下の中ノ畑と上根来は文字どおり山あいの集落である。戸数は四十戸で農林業がほとんど。冬季出かせぎ家庭も多い。同校は児童たちの唯一の遊び場であり、楽しい生活の場である。学校園のイモ栽培、冬じたくのマキ、杉葉拾い、小鳥たちの巣箱づくりなど楽しい行事がある。とくにスキーが三十台もそろっており、冬は思うぞんぶん山の斜面でスキーを満喫している[118]。

以上のように、掛け持ちの校長先生や複複式の授業、山あいの地形を生かした授業など、普通の学校とは少し違ったユニークな学校生活がうかがえる。A さんもスキー授業については思い出に残っているようで、「僕ら勉強も何にもせんかったさけえやと思うけど、よくスキーをしに連れてってもらったわ。当然 1 年生と 6 年生で滑るとこは分けてあるけど、先輩は下の子の面倒を見るってのも、それはちゃんとしてあげんとあかんよとか、そんなんは厳しかった。そやけど、小学校のときスキーしたんが楽しかったなってほとんどの人が言うわ[119]。」と語っていた。しかし雪深い地域であることで、三軒家（図 5 参照）から通学しなければならなかった B さんは、その大変さを以下のように語っている。

冬は今ある林道やなあ、そこを通ったな。除雪できるような積雪量やないから、親がかんじき履いて雪を踏み固めてくれて、その上を歩いたもんやな。ところが、私の家から奥の集落（学校近辺の集落）までは私ともう１人と２人しか児童がおらん。そやから親も 2 人ずつ出て歩いても 4 人や。そやから私ら子どももかんじき履いて歩いたんや。学校までの距離は奥の集落の倍あったわけ。奥の子どもらは家数も多いから、大勢で踏み固めてもらえるからかんじきは履かなくてすむけどな[120]。

このように、上根来の中心集落から少し離れた、「三軒家」からは、「かんじき」で踏み固めないと通学できないほどに雪深く、小学生には過酷なものであった。さて続いて、「分収造林期」に学校を卒業した住民の進路について、以下の表にまとめた。

---

118 「小浜市遠敷郷土誌」p253-254 より。
昭和 41 年（1966 年）3 月 29 日の福井新聞の記事から引用。
119 2022 年 7 月 8 日に行った A さんへの聞き取りより。
120 2019 年 6 月 4 日に行った B さんへの聞き取りより。

表 13　「分収造林期」における学校卒業後の進路

	卒業年度	進路
E さん	1965(4)年	離村して、大阪で集団就職。 その後遠敷へ帰ってきて、住みこみで大工の丁稚奉公。
A さん	1971(0)年	離村して、遠敷の町中へ出る。住みこみで大工の丁稚奉公。
B さん	1976 年	卒業してすぐは、通いで町に出て働く。その後移住する。
H さん	1977 年	通いで町に出て働く。

（出典）聞き取りより

この表にまとめたように、「炭焼き期」とは異なり、学校を卒業後に、上根来の中で仕事をする人はいなくなった。特に E さんや A さんは上根来を離れて、町へ出て働くようになったのだが、二人とも D さんと同じ建設会社で丁稚奉公したという。また「分収造林期」が終わってすぐに就職した、B さんと H さんも、上根来には残ったものの、通いで町に出て働くようになった。このように C さんや F さん等の「子ども世代」になると、上根来の中で生計を立てて、一生を過ごすということは、選択肢から外れるようになった。

2-3-7　「分収造林期」の集落の集まり

「分収造林期」の最後に、「集落の集まり」を述べていくが、「寄合」については「炭焼き期」から変化が見られなかったので、主に「婦人会」に注目してみる。「2-3-1『分収造林期』の産業」の最後に述べたように、数年間は女性も分収造林に参加していた一方で、1967 年には、女性は誰も「分収造林」に参加しなくなった。ツジタイ [121]というドレス会社の工場が小浜市内にあったのだが、その年の 12 月に、上根来の婦人会で、ツジタイのドレスを作ることになったからだ。婦人会でドレス作りを宗福寺で行うことになった経緯を F さんは以下のように語っている。

> 一軒で大方二人ずつ分収造林に行ってたんやけれども、一年に植え付けなんぼ、苗木でなんぼと決まっていて 300 万円から 400 万円を部落の人で取り合いしていてもあかんさかいやな。ほんで女子（おなご）の人は女子のする仕事を見つけにゃならんってことになって、ある人が市役所で事情を話したんや。ツジタイっちゅうドレスの会社の小浜工場が多田っちゅうとこにあった。市役所が世話してくれて、人に上根来の宗福寺まで教えに来てもらって、（ドレス作りを）するようになった。結婚式のドレスやった [122]。

[121] 本社は京都にあった。今は「アルファブランカ」という社名になっており、工場も福井県若狭町に移っている。
[122] 2022 年 7 月 9 日に行った F さんへの聞き取りより。

このように、ある程度植林の作業が終わって、分収造林だけではこの先行き詰まるということで、小浜市に相談してドレス作りを始めるようになった。実際にドレス作りをしたCさんは当時の様子を以下のように語っている。

> 結婚式でこんな頭につけるお花作っとってん。（写真1）16年したわ。お寺で。ええ工場長でな、うち来てくれって話したら、頭につけるお花とか手に持つブーケ、あれを作る仕事さしてあげる言うて、女は皆、村の人10何人で、それ作っとった。8時から17時まで。それはもうきちっとな、お寺で。仕事はちょっと難しいけど、それになったら楽やったわ。中の仕事やもん。後になったら、綺麗にできるようになった。

以上のように、集落の女性ほとんどで、8時から17時まで宗福寺で作業をしていた。Cさんが語るように、慣れれば分収造林よりも幾分か楽な仕事だったという。

写真 1　C さんが作ったブーケ

（2022年7月10日　筆者撮影）

2-4　畜産期

2-4-1　「畜産期」の産業

以上「2-3 分収造林期」では、集落ぐるみで「分収造林」に取り組んだ1976年（昭和51年）までを記述してきた。今度は、「分収造林」に行き詰まった後、集落の5人で「上根来肉牛生産組合」を結成し、畜産団地で「畜産」を始めるのだが、この事業を廃止する1993年（平成5年）までの期間を「畜産期」と定義する。そしてこの「畜産期」(1976年〔昭和

51 年〕～1993 年〔平成 5 年〕)について、項目ごとに記述していく。

まず産業についてだが、1963 年から始めた「分収造林」も、「1950 年頃まで細々やってきてんけんど、うまいこといかんようになっ[123]」たという。「分収造林ばっかりでは、生活は成り立って行かんこっちゃ[124]」という語りや、「公団植林も土地もほぼ満杯になってきた、植林の後の間伐の仕事もあったけど、だんだん年を取ってくると年齢的にも行き詰ってしまうということもあり、これは何か考えなあかん[125]」という語りにあるように、国からもらえるお金が少なくなってきたことと、植林できる土地が少なくなってきたこと、そして高齢化に伴って仕事がより大変になってきたことによって、「分収造林」に限界を感じるようになった。そこで、集落でその後の産業について話し合うようになり、小浜市役所に相談を持ちかけることもあった。

ちょうどこの頃、農業の近代化を目指していた、小浜市や市農協は、「第二次農業構造改善事業」の指定を受けて事業を進めるのが、補助金の関係で有利だと考えていた。ただ、この構造改善事業で補助金を受けるには、カントリーエレベーターの導入や大規模圃場で大型機械の導入、養鶏、畜産など、5 つの事業をセットで取り組まないといけなかった[126]。しかし、牛を飼うところはどこもなかったので、市や市農協[127]は上根来地区で畜産団地を作って、畜産をやってくれないかという提案をするようになった。その提案を受け入れるようになった経緯について、当時の様子を F さんは以下のように語っている。

> 「牛飼いはどうや」って農協から話し（が）あってんけど、はじめはわしらも牛飼いみたいなもん、そんな儲かるもんやないしやな、するか、ようせん（しない）かっちゅう集会をしたんや。そやけど、上根来の牛飼いをしてもらわんちゅうと、カントリーエレベーターもできやなんだ（できない）。なんかもう 5 つほどのセットで来とったらしいんや。それをせんちゅうと（しないと）、国から補助金がおりてこなんので。その５つの中で一つでも欠けたら、その４つもパーになってもて、出来やなんだ。カントリーエレベーターは出来るんやけど、牛飼いもしてもらわんと困るんやさかいに（困るのだから）、そこまで（当時の小浜市農協の）組合長は言わなんだけど（口に出さないけど）、まあなんとかしてこの人らを説得して、牛飼いをさささんなんと思て、市役所もかんで（間に入って）やな、市役所に偉い課長おってんけど、その課長に言われて、わしらもせんなんことになってん。組合長は「補助金がこんさかいにせなあかん」とは言わなんだけど、「とにかくまあせえ」と。ほんでまあ「援助は、できるだけのことしたるさかいに、せえ」っちゅうことになったん

[123] 2022 年 7 月 9 日に行った F さんへの聞き取りより。
[124] 2023 年 7 月 9 日に行った F さんへの聞き取りより。
[125] 2019 年 6 月 4 日に行った B さんへの聞き取りより。
[126] 2019 年 6 月 4 日に行った B さんへの聞き取り、2023 年 7 月 9 日に行った F さんへの聞き取り、「小浜市遠敷郷土誌」の p197 より。
[127] 現在は合併して、「福井県農業協同組合」になっている。

や。ほんでまあわしらもイヤイヤしたけんど、そういう条件があったもんで、そら農協からもずいぶん援助してくれたんや。もうイヤイヤしたけんど、今までした仕事の中で、牛飼いが一番儲かった、正直言うと[128]。

このように、上根来で畜産を始めるにあたっては賛否両論あったが、最終的には小浜市や農協の意向を受け入れる形になった。しかし「いよいよほんまの話になると、わしはかなん（嫌だ）ってやつができてきて、結局 5 人になったんや[129]。」と語るように、結局実際に始める段階になると、F さんと C さんの夫、A さんの父、B さんの父、G さんの父、の 5 人しか参加しなかった。参加しなかった人の中には、まだ「分収造林」の作業をする人もいたという。

こうして、畜産事業は第二次農業構造改善事業の制度を取り入れて、「畜産団地」を造成して、開始することになったのだが、「小浜市遠敷郷土誌」に、その造成と事業開始の様子が記述されている[130]。

> 昭和五十一年（一九七六）に組合法人「上根来肉牛生産組合」を五人で設立した。この事業は五十一、五十二の両年度で進める予定であったが、地すべりが起こって、一部造成地が崩れたため、一年間遅くなったが工事丹開となった。総事業費二億一千万円であった。水田や山林一万一千平方メートルを造成して用地に充て、牛舎五棟（百頭収容四棟、八十頭収容一棟）や飼料庫、堆肥舎、などを設け、常時四百八十頭を飼い、年間六百頭を出荷する計画で始めた。同地区にはかつて各戸に最低一頭の牛が飼育されていて、飼育のベテランがいるので大きな期待がかけられた。事業は農協からの預託方式で実施され、昭和五十三年（一九七八）十二月、第一陣は和牛で宮崎県産三十四頭、兵庫県但馬産六頭を受け入れた。その他、上中町の県営嶺南牧場からも肉用乳牛をうけいれている。毎月五十頭ずつ導入しながら十カ月肥育して農協を通じて出荷していた。最盛期には五百頭を肥育していた。

この「畜産団地」の場所（図 5 参照）はここに記述がある通り、水田や山林であったが、これは「よその田んぼ[131]」だったので、まず「上根来肉牛生産組合」で他の住民の土地を購入して造成した。しかし「あんまり大きな造成やったもんで、地面の 3 分の 1 ほど下がって、1mほどの段差ついたんや。」と語るように、その造成途中で地滑りが起きた。この地滑りと同時に、この近辺の「三軒家」に住まいがあった B さんのお宅は、「家を斜めに横切るように亀裂が入った」ため、B さん一家は住宅移転を余儀なくされた。この地すべりによっ

128 2023 年 7 月 9 日に行った F さんへの聞き取りより。
129 2022 年 7 月 9 日に行った F さんへの聞き取りより。
130 「小浜市遠敷郷土誌」p197 より。
131 2022 年 7 月 9 日に行った F さんへの聞き取りより。

て、工事は 1 年休んだが、その後土地が下がらないように護岸工事をすることで、無事に「畜産団地」が完成した。

また「飼育のベテラン」とあるが、「2-2-4『炭焼き期』の田畑とその管理でも触れた通り、農耕と肥料作りのために、一家に一頭は牛を飼育していたので、牛を育てる技術を有していた。そして、A さんが「うちの家は（牛が）五頭も六頭もおったわ。うちの親父は、肉牛を育てるのは好きやったもんで、生産組合を始める前から、売りに出しとって、肉牛を作るのに詳しかった[132]」と語っているように、畜産を始める前から実際に牛を育てて、売りに出している家もあった。このように飼育に慣れていたためか、牛を飼う技術は高かったようで、1988 年には、若狭地域で行われた肉牛品評会でも、上根来生産組合が上位独占したという。その様子が「小浜市遠敷郷土誌」に記されている。

> 肉牛飼育の技術アップ、農家の意欲向上など音産振興を目的とした第十八回特選若狭肉牛共進会が昭和六十三年（一九八八）十二月九日、上中町の県経済連南畜産センターで開かれ、上根来肉牛生産組合が上位独占するといった素晴らしい成績をあげている。このとき和牛の部に雌（四十四ヵ月以内）十三頭、去勢牛（三十六カ月以内）八頭、乳牛（ホルスタイン）の部に二十七頭の計四十八頭が出品された。審査は北村徹（県嶺南牧場長）ら五人が当たり、肥育度や肉の付き具合を慎重にチェックした。その結果グランドチャンピオンには上根来肉牛生産組合の「あやてる 2 号」が選ばれた。知事賞など各賞が授与されたあと、午後はセリが行われ、業者に引き取られた[133]。

このように高い技術が認められていた上に、「今までした仕事の中で、牛飼いが一番儲かった[134]」と語るように、申し分ない収益が得られていた畜産であるが、1993 年（平成 5 年）に事業を廃止することになった。この理由については、「総経費の三割が自己負担なので、組合員は多額の借金をしていたが、事業が軌道に乗りお金の返済を完了していよいよこれからと言う時に肉牛の自由化ということが起きてしまった。安い牛肉が海外より輸入されることになり、今後の経営の見通しが立たなくなり[135]」とあるように、借金の返済完了と同時に、肉牛の自由化によって経営の見通しが立たなくなったことにある。しかし、それ以上に大きな原因が「後継者の不在」であったと F さんは語る。

> 5 人も高齢になってきたとこに、息子はみんな違う職業に就いとるもんで、息子に牛飼いせえって言われんもんで、断念したんや。それもまあ一つの理由やったん

---

132 2022 年 7 月 8 日に行った A さんへの聞き取りより。
133 「小浜市遠敷郷土誌」p198、199 より。
134 2022 年 7 月 9 日に行った F さんへの聞き取りより。
135 「小浜市遠敷郷土誌」p198 より。

や。もう一つは牛肉の自由化。肉牛が安くなってうまいこと行かんようになったんや。こんな事いつまでもしとったら、借金ができてもかなんさかい（困るから）。後継者おって、息子らがやるんやったら、少々借金あっても問題ない。そやけど誰もおらんさかい、借金できたら返すもんおらへん。それでやめようってなって[136]。

「2-3-6『分収造林期』の学校生活と卒業後進路」で述べたように、「分収造林期」以降、学校卒業後に、上根来の中で生計を立てて、一生を過ごすということは、選択肢から外れており、どこの家の子どもも町へ出て働いていた。そのため「畜産」を継ぐ者がおらず、F さんが語るように「借金できたら返すもんおらへん」ので、「牛肉の自由化」をきっかけに「上根来肉牛生産組合」による畜産事業は 1993 年に廃止することになった。

2-4-2 「畜産期」の森林の利用

次に「畜産期」の森林の利用について見ていくのだが、この時期になると、集落として共同で森林に携わることはなくなっていく。まず「分収造林地」については、そのほとんどに針葉樹を植え終わっているので、次は除伐や間伐の段階になる。前章で少し触れたように、「5 人が牛飼いやったもんで、（分収造林に行く人が）2.3 人のになってもうた[137]」と語っており、除伐や間伐の作業に、上根来の住民も参加していた。また「2-3-1『分収造林期』の産業」で述べたように、「三者契約」を結んでいたので、その管理には「小浜市森林組合」も携わっていたと考えられる[138]。また個人で植林した山については、「10 年ぐらい前までは枝打ちとか行っとった[139]」と語るように、個々である程度の管理をしている。一方で、個人登記やお寺名義の広葉樹林については、「畜産期」でも手を入れることはなく、そのまま広葉樹林として残っている。

2-4-3 「畜産期」の寺社とその行事

「畜産期」の寺社とその行事についても、特に神社に関しては、集落の人が集まる行事は「ヤマノクチ」だけである。さらに「畜産期」になると、集落の人口が激減したため、「神社の世話役」である「コウゾン」さんもなくなっていく。A さんは「僕らが出た頃には、集落の人まだ多かったんで、（「コウゾン」さん）はおったんやで。僕らが出て 10 年ぐらいは

136 2022 年 7 月 9 日に行った F さんへの聞き取りより。
137 2022 年 7 月 9 日に行った F さんへの聞き取りより。
138 「小浜市森林組合」は 1988 年に、他 3 組合との合併により「若狭森林組合」となっている。
139 2022 年 7 月 9 日に行った E さんへの聞き取りより。

あったと思うんや。なくなって 30 年ぐらい違うかな。C の息子か F の息子が最後やと思うんやけどね[140]。」と語っており、少なくとも集落の人口が 20 名程になる、1985 年頃にはなくなっていたと考えられる。また「コウゾン」さんは、年齢の順に 2 年間就任するのだが、「役」を受けることが上根来出身の若者がいなくなっていることも、なくなる原因だったのかもしれない。

またお寺の行事についても、「畜産期」の人口が激減する頃になると、「施餓鬼」は行われる一方で、「盆踊り」や「涅槃」については徐々に行われなくなっていく。「盆踊り」について、G さんは「それ（盆踊りで他集落と交流があったこと）は結構昔の話でしょうね。僕らが若いときネゴリの盆踊りに行ったことはあるんですけど、そんなに盆踊りに行ったってわけではなく。（昔は）各集落開催してる日が違って、今日はここの集落の盆踊りやってしてた時もあったんですよ。そういう盆踊りが盛んな頃っていうのは僕らより世代がちょっと上なんで、僕はあちこち行ったっていう経験はないんです[141]。」と語っており、「2-3-3『分収造林期』の寺社とその行事」で述べたような、集落を出た人が楽しみに帰ってくる「盛んな盆踊り」は行われなくなっていった。その後「（盆踊りは）僕が出るまでには無くなっていると思います[142]。」と言うように、最後は盆踊りそのものが行われなくなった。また「涅槃」についても、「集落の人がいないようになって、一回無くなってんのちゃうかな[143]。」と語るぐらいに、「団子まき」を行うほどの一大行事ではなくなっていく。しかし神社の「役」はこの頃に無くなっている一方で、「2-2-3『炭焼き期』の寺社とその行事」の最後に述べた「寺役（寺総代）」は、「畜産期」でも、集落の誰かがその役を務めている。

2-4-4 「畜産期」の田畑とその管理

続いて、「分収造林期」には機械化の進んだ、「田畑の管理」は「畜産期」にはどのように変わって行ったのだろうか。結論から述べると、「田んぼ」については、「畜産期」の間に徐々にやめていく家が増えて、「畜産期」の終わり頃には、ほとんどの家が田んぼ作りを断念することとなった。それぞれの世帯が田んぼをやめた時期を以下の表にまとめた[144]。

---

[140] 2023 年 12 月 11 日に行った A さんへの聞き取りより。
[141] 2023 年 12 月 10 日に行った G さんへの聞き取りより。
[142] 2023 年 12 月 10 日に行った G さんへの聞き取りより。
[143] 2023 年 12 月 10 日に行った G さんへの聞き取りより。
[144] 田んぼをやめた年については、曖昧な表現が多かった。「仕事しだして、しばらくは親がしてたかなあ。」「子どもらが小学校の三年生ぐらいまでやっとったんやけえ。」といった語りから、表を作っているが、2、3 年の誤差が生じているかもしれない。

表 14　田んぼをやめた時期

	B 家	E 家	D 家	A 家	G 家	F 家	C 家
田んぼを辞めた年（西暦）	1976 年	1980 年	1985 年	1987 年	1989 年	1992 年	1995 年

（出典）聞き取りより

B 家については、「（畜産）団地のとこもうちの田んぼやったんですわ。ほんでもう、うちは（畜産）団地と一緒に辞めました[145]。」と語っているように、畜産団地の造成によって、田んぼができなくなった。その他の多くの家は、1980 年代に徐々に田んぼ作りをやめていき、長く田んぼ作りを続けた家も、1990 年代前半にはしなくなり、C 家を最後に、上根来では田んぼ作りは行われなくなった。この時期になると、E 家のように、「親世代」も上根来を離れる世帯がでてくるので、そういったことも田んぼ作りをやめる一因である。しかし D さんや G さんが以下で語るように、「子世代」が手伝えないようになったことと、「親世代」の高齢化がその大きな要因だと考えられる。

> 母親だけが畑と田んぼをやってた。（D さんの）子どもらが小学校の三年生（1985 年）ぐらいまでやっとったんやけえ。そやけど他の人はやっとったで。まあ（僕も）仕事の方も忙しなってきたし、結婚して向こう（小浜市の多田）にずっとおったさかい。通うの大変やったんや[146]。

> 自分も背中に負って、稲を運んだのは小学校入る前ぐらいからした覚えありますね。高校の間ぐらいまではしてましたね。で、結局みんなが段々田んぼをしなくなっていって、うちも僕が仕事をしだして、手がないでしょ。それからやめたかな。仕事しだして、しばらくは親がしてたかもしれんなあ。でもやっぱりやめよかって言ってやめたと思う。その頃には、C さんも A さんも小浜の方に出てて、おじいちゃん、おばあちゃんは残ってましたけど。ていう感じになると、ネゴリで田んぼできなくなってきますんで[147]。

このように、D さんは「田を植える時と、収穫するときは休みもろて帰ってきて」手伝っていたが、結婚や仕事が忙しくなったことによって、上根来に帰って、田んぼの手伝いをすることが難しくなった。また、G さんも子供のころから、田植えや稲刈りの「戦力」だったが、仕事を始めると実家の田んぼを手伝えなくなった。すると、「おじいちゃん、おばあち

[145] 2023 年 7 月 9 日に行った B さんの母への聞き取りより。
[146] 2022 年 7 月 9 日に行った D さんへの聞き取りより。
[147] 2023 年 12 月 10 日に行った G さんへの聞き取りより。

ゃん」だけで田んぼはできないので、必然的に断念することになっていく。ただ「親世代」の中で、比較的若かったFさんは畜産をやりながら、田んぼを作っていた。その時の様子を以下のように語っている。

> 田んぼの4反全部つくるのはかなん（嫌な）もんで、半分ほどにして作ってた。わしはあそこにおるもんで、田を植えたりするのには人手がいるんで、家内らが手伝いに来て[148]、田んぼ作っとってん。牛飼いしもってでも、ぴったりやないもんで、3日やると休みが回ってくる。その時に田んぼもちょっとは作っとったんです。それも平成4年ごろになったら、イノシシやらシカやら出てきて荒らすもんやけえ、作っとられへん。それで畑も田んぼも辞めました[149]。

Fさんのように、ご家族の協力のもと、面積を減らすなどの工夫をして、田んぼ作りを続行する家もあった。しかし、そもそも田んぼは1軒だけで容易にできるものではなく、田んぼを断念する家がでてくると、ドミノ倒し的にやめていったとAさんは語る。

> 田んぼは、水路を掃除して、水を連れてくるのが大変やねん。それは他の人も一緒じゃないと。ネゴリって川より高い位置にあるやろ。そやもんで水を引いてこうと思うと、相当奥の高い方から引いてこんと水がきやへんねんけ。一回作ったら何回も使えるんやけど、シカが暴れたりすると水路に土が詰まってしまうもんで、それを取り除きに行く作業をせんとあかんやん。距離もあるもんで、それが大変なんや。辞める時は一斉に辞めたようなような感じなんや。一軒ではできひんしなあ[150]。

「2-2-4「炭焼き期」の田畑とその管理」の最後で述べた通り、共同で水路を管理していたので、田んぼ作りを断念する家が多くなると、1軒当たりの負担が大きくなる。こうして水路管理の負担が大きくなった上に、今までで行っていた、田植えや稲刈りなどの「結い」での作業を行えなくなったことも、連鎖的に田んぼ作りをやめることになった大きな理由だと考えられる。また、「2-4-2「畜産期」の森林の利用」で述べたように森林に人の手が加わりにくくなったため、害獣が増えて、その被害が増えていったのかもしれない。

ただその後、田んぼの跡地は、全く手を加えずに放置したわけではなく、植林したという。ただAさんは「田んぼをやめてから、個々の家が少しずつスギの木を植えてあったのが、今40年ぐらい経ってきてるんで、間伐の対象になって、今してもらっとるんです。田んぼに植えとるんで、結構大きくなっとるんです。集落の中に植わっとるのは全部田んぼに植わ

---

148 「2-4-7『畜産期』の移住」で後述するが、Fさんのお宅は1982年に竜前へ移っており、その後はFさんだけが上根来に残っている状態だった。
149 2022年7月9日に行ったDさんへの聞き取りより。
150 2022年7月8日に行ったAさんへの聞き取りより。

っとるもんなんで、昔は全然景色違いましたね。中ノ畑までも丸々見えたんで、それぐらい景色は変わりましたわ[151]。」と語っており、集落周辺の田んぼはほとんど植林している。

田んぼはこの時期に一斉にやめた一方で、畑については、上根来を離れる最後までやり続けている家もある。実際にA家、C家、D家は離村の際まで畑はやり続けていた。

2-4-5 「畜産期」の生活

次に、「分収造林期」には、徐々に減少していた上根来集落の人口は、「畜産期」にどのように推移したのだろうか。「炭焼き期」や「分収造林期」と同様に、人口と世帯数の推移を参照する。

表 15 「畜産期」の上根来集落の人口と世帯数

西暦（年）	1976	1978	1980	1982	1984	1986	1988	1989	1991	1993
上根来（人口）	65	61	53	43	39	20	16	17	17	17
上根来（世帯）	18	19	18	15	13	9	9	9	9	10

（参照）「小浜市遠敷郷土誌」p125、126より

この表から分かる通り、1976年から1986年にかけての10年間は、「分収造林期」以上に人口の下げ幅が大きい上に、「分収造林期」ではさほど変化のなかった「世帯数」が半減している。ここから、本格的な移住が始まったことが読み取れる。つまり「分収造林期」では、「子ども世代」が仕事を求めて離村したのに対して、「畜産期」には「親世代」すらも、高齢化のために、上根来の家を引き払って、町の方へ出るようになったのである。これは、集落である程度まとまって移住しようという風潮が高まったことが大きいのだが、この点は「2-4-7『畜産期』の移住」で後述する。また1980年から1986年にかけて、世帯数と人口が激減しているのは、自然災害の影響も大きいと考えられる。一般に「56豪雪」や「59豪雪」と呼ばれているが、昭和56年（1981年）と59年（1984年）に、北陸を中心に日本列島を襲った「雪害」が発生している。雪深い地域である上根来も例外ではなく、「56年は豪雪やったし、59年も豪雪やった[152]」という。「子ども世代」が町へ出ている中、「親世代」だけでの雪おろし等の作業が大変だったことは想像に難くない。

また交通については、「2-3-5『分収造林期』の生活」で述べた通り、アスファルト舗装が完了しており、町へ車で出るのは容易になっている。そのためか、「分収造林期」には、「遠

[151] 2023年12月11日に行ったAさんへの聞き取りより。
[152] 2022年7月9日に行ったDさんへの聞き取りより。

敷の魚屋 」さんが、頼めば別の商品を持ってきてくれるという行商の形態であったが、「畜産期」には、「ほとんど移動式スーパー[153]」のような行商になったという。つまり「行商」というよりは、今でも街中で見かける「COOP の移動販売」を想像してもらうと分かりやすいだろう。このように上根来での生活は、「炭焼き期」に比べると、町中の生活と大差ないほど、「便利」になっていった。

2-4-6 「畜産期」の学校生活

では次に、「畜産期」の上根来小学校と学校生活を見ていくのだが、1975 年に 3 人であった児童数は、その後増えることはなく、最後の児童が卒業後に休校となり、その後廃校が決まった。

表 16 上根来小学校 「畜産期」の児童数の変遷

西暦	男子生徒数	女子生徒数	合計生徒数	付記
1980	1	0	1	
1981	0	0	0	就学児童なく、休校になる。
1985				廃校となる。

この最後の生徒が G さんであり、小学校に入った時には、既に全校生徒が 3 人であり、その後 1 年で 1 人卒業してしまったので、お姉さんと 2 人だけになったという。そして G さんが卒業した後、上根来小学校は廃校となり、「山の家」として、他の小学校の子ども達が遠足に来る場所になった。

また「分収造林期」まで、中学生は小浜第二中学校に通っており、冬だけその寄宿舎に 3 か月間ほど入っていたのだが、その頃には寄宿舎がなくなっていたため、G さんと G さんの姉は校区外の小浜中学校に通っている。その様子を以下のように語っている。

> 中学校はネゴリの人が行く中学とは違う、校区外の中学に通ってるんです。それは寮（寄宿舎）がなくなったから、小浜中学校の年中入る寮やったんですけど、そこに行くって教育委員会で決まって、姉とそこに入るってことになった。
>
> 月曜から土曜の昼まで一年中寮なんです。土曜日の昼から帰ってきて、月曜日の朝寮に入る。秋から春までは日曜日の夜から入る。この 2 パターンやったんです。行きは親父に（車）で送ってもらってました。寮から家に帰ってくるのは、下根来までバスでそこから歩きですね[154]。

[153] 2023 年 12 月 10 日に行った G さんへの聞き取りより。
[154] 2023 年 12 月 10 日に行った G さんへの聞き取りより。

このように、上根来では子どもの数が少なかったため、寄宿舎が廃止され、G さんは中学生ながら、3 年間のほとんどを小浜市内の寮で過ごすことになった。G さんはその後、小浜市内の高校に進学し、今度は上根来から自転車で通っている。高校卒業後も、町へ仕事に出るものの、上根来から通勤していたという。

2-4-7 「畜産期」の移住

「2-4-5『畜産期』の生活」で述べた通り、「畜産期」には上根来集落の世帯数は半減し、その人口も、20 人にも満たない数になった。この世帯数半減と人口減少の要因になったのが、住民の移住である。しかし上根来集落の住民による移住は少し特殊なので、ここで注目して見ていくことにする。

表 17 上根来集落 移住に関する年表①

1976 年	B 家、畜産団地造成の際に、家に亀裂が入って住めなくなる。
	B 家、F 家、A 家、E 家の 4 軒で共に、竜前（上）に土地を買う。
1978 年	B 一家、上根来を出て、竜前（上）に住む。
	C 家、G 家、他 3、4 軒で共に、竜前（下）に土地を買う。
1982 年	F 家、竜前（上）に家が建つ。F さん以外は移り住む。
1983 年	E 一家、竜前（上）に家を建てて、移り住む。
1984 年	H さん（C さんの息子）、竜前（下）に家を建てて、移り住む。
	A 家、竜前（上）に家を建てる。

（出典）聞き取りより

まず移住を決めたのは、「2-4-1『畜産期』の産業」でも少し触れたが、畜産団地造成の際に、家に亀裂が入って住めなくなった、B 家である。しかし、B さんの父は一軒だけで次の移住先を決めたわけではなかった。「だんだん根来も過疎になってくるし、どっかええ土地無いかな[155]」と考えていた F さんと B さんの父と二人で、新たに住むことのできる土地を探したところ、竜前地区（図 3 参照）に住める場所を見つけたという。ただ「この土地が広すぎ」たために、「もう二人も親戚を呼んだろかいやってことになってきて、E 家と A 家と呼んだ[156]」と F さんは語っている。このようにして、結局 4 軒で地続きの土地を買うことになったのだ。しかし「親戚 4 軒の中で示し合わせて、みんなで出た」という語りを聞くこ

[155] 2022 年 7 月 9 日に行った F さんへの聞き取りより。
[156] 2022 年 7 月 9 日に行った F さんへの聞き取りより。

とはできなかった。ただ「(集落を出るのは）一緒やなかったんですけど、こんなことで出るしって言うことで（伝えた)。そやけど、今まで一緒に住んどった人やもんで、離れ離れになるとかなん（困る）し、土地続きに土地が買えたらええかなっていう、そんな話もあったんです[157]。」とB さんの母は語っており、離れ離れになることは避けたいと考えていたようだ。その理由について、A さんは「その中で土地を求めるのに、一軒ぽつんぽつんと（出て）いくのは良くないぞと。っていうのは中ノ畑がバラバラになってしまうのを見て、親らがああいうのはあかんなって思ったんやろな[158]。」と語っている。中ノ畑集落は、上根来よりも早くに集落を出た人が多かったことは、前述した通りだが、まとまりがなく離村したために、地縁コミュニティが崩壊し、中ノ畑集落自体も維持管理もできずに荒れ果ててしまった。このような事例を間近で見ていたために、「何となく」まとまって離村することを目指したのかもしれない。

その後、親戚 4 軒でまとまって土地を買った前例を踏まえて、C さんの夫は親戚関係なく、上根来の住民がまとまって住めるように、竜前地区の中の下側[159]に共に土地を買わないかと提案したという。A さんは C さんの夫のこの行動を尊敬しており、以下のように語っている。

> 僕らのとこ（竜前（上)）はほんまの親戚なんや。C 家の親父は賢い親父でな。親戚とかやなしに、ネゴリの残っとる人らみんなに声掛けたって、「何坪でもええぞ。いるだけ買わんか。」言うて、残った分を最終的に買ったんやと思うわ。その辺のリーダーシップは抜群にあった。あそこを買ったのは、○○（C さんの夫)、○○（G さんの父)、○○、○○、○○の 5 人やわ。○○もおったっけな。6 人か。今家建ってんのは 3 軒だけやけど。それはみんな（が）後で「よう家建てんし（とても建てることができないから)」とか、「買ってくれんか」って言うて残っとる分全部 C 夫が買ったんちゃうか。口で言うのは簡単やけど、そんなもんなかなかできんぞ[160]。

以上のように、C さんの夫は「何坪でもええぞ。いるだけ買わんか。」と他の住民が買いやすい状況を作った上で、率先して上根来に残っている住民に声を掛けて、コミュニティを維持しようと考えていた。こうして結局 5、6 軒が竜前（下）の土地を共に買うことになった。

しかし集落の住民で共に土地を買ったと言っても、竜前はこの頃「半分畑で、半分山みた

---

157 2023 年 7 月 9 日に行った B さんの母への聞き取りより。
158 2023 年 7 月 8 日に行った A さんへの聞き取りより。
159 4 軒がはじめに買った土地は同じ集落内だが、徒歩 5 分程の距離離れている。以後、親戚 4 軒で買った土地を竜前（上)、C さんの夫が率先して購入した土地を竜前（下）と表記する。
160 2023 年 7 月 8 日に行った A さんへの聞き取りより。

いなとこ[161]」だったので、すぐに移住できるわけではなかった。またA さんの父やF さん、C さんの夫はまだ上根来で「畜産」をしているので、竜前に住むよりは上根来に残る方が都合が良かった[162]。そのためA 家やC 家は竜前に家を建てただけで、F 家も奥さんや息子さんが移った一方で F さん自身は「一週間にいっぺんほど（竜前に）帰ってきて」いたという。つまり「二地域居住」というより、まだ竜前の家の方が「離れ」のような状態であった。ただ何はともあれ、上根来を離れても、コミュニティを維持できる準備は、この段階で整っていたのである。

2-5　移住期

2-5-1　「移住期」の仕事

以上「炭焼き期」、「分収造林期」そして「畜産期」を見てきたが、最後に、「畜産」を廃業して、集落としての産業がなくなる 1993 年から、集落の住民が実質ゼロになる 2013 年頃までを、「移住期」と定義して、記述していく。この時期には、集落での活動が少なくなっているため、集落の様子を簡単に記述した後、主な出来事についても述べていきたい。

先述したように、この時期には集落としての産業がなくなるのだが、個々人でどのような仕事をするようになったのだろうか。畜産廃業後の 5 人について、F さんは「5 人もバラバラになってもうてやな。G さん父と C さん夫は、牛舎あるもんで、『細々と個人で牛飼いするさかい』って。A さんの父は国の難病に指定された病気やったもんでやな、その人は入退院繰り返してた。B さんの父はわしより年が上なもんでやな、『わしは家でなんかするわ』って。わし（F さん）はそういうわけにはいかんもんでやな、若狭森林組合（現れいなん森林組合）の作業員に来んかっちゅうことで、また森林組合の山仕事に入ったんや[163]。」と語っている。以上のように、「上根来肉牛生産組合」による畜産事業を廃止した後にも、C さんの夫と G さんの父は、個々で畜産を続けた後、G さんの父は 1996 年頃に、C さんの夫は 2000 年頃に、廃業した。一方で F さんは上根来を離れて、森林組合の作業員として 60 歳まで働いた後、65 歳以降はシルバー人材支援で「剪定で庭木の手入れしたり、畑仕事したり、年寄りの介護の仕事したり[164]」したという。このように、「移住期」の上根来集落では、「仕事」をする人はほとんどいなくなっていった。

---

161 2023 年 7 月 9 日に行った F さんへの聞き取りより。
162 B 父は竜前（上）から「畜産」をするために上根来まで通っていた。
163 2022 年 7 月 9 日に行った F さんへの聞き取りより。
164 2022 年 7 月 9 日に行った F さんへの聞き取りより。

2-5-2　林道の開通と「百里会」の発足

「炭焼き期」、「分収造林期」、「畜産期」の「生活」の中で、交通について述べてきたが、それらは全て小浜市街と上根来を結ぶ道について言及しており、滋賀県側の「朽木」（図 3 参照）と上根来を結ぶ交通には触れてこなかった。1 章で述べたが、上根来と朽木を結ぶ道は、古来より「鯖街道」と呼ばれ、「日本海でとれた鯖に塩をして、一夜にして若狭から根来坂を越え針畑谷を抜け京の都へ運ばれ、また多くの歴史的人物もこの街道を往来した重要な街道[165]」であった。しかし 1980 年代では依然、整備された道がない状態であった。そこで「福井県小浜市と滋賀県朽木村[166]において森林の適切な維持管理と生産基盤整備に合わせ、古来『鯖街道』で栄えた両地域を連絡することで交流が促進され、地域活性を取り戻すことを目的に」林道（上根来―小入谷線）の開通が目指され、1987 年に「林道上根来線」、1989 年に「小入谷線」（朽木側）の整備を開始し、1991 年には両林道を連結させるため、「林道小浜朽木線開設促進期成同盟会」が発足した[167]。その後 2003 年には両林道が連結し、開通式典が県境の「おにゅう峠」で行われた。

上根来の住民の中でも、大半はこの林道の開通に賛成だったが、中には土地を渡したくないという家もあったという。そういった家を説得して、林道の開通を目指すため、「百里会[168]」という組織を作り、一家に一人この組織に入ることになった。その時の様子をＡさんは以下のように語っている。

> ちょうど、畜産団地のところから朽木へぬける林道を開通さすというので、「生産森林組合の山」はなんにも問題ないんですけど、「個人の山」も通っていかんとあの道っていうのはつけられなかったんです。その中で 1 軒だけ「そんな道路もつける必要ないし、うちら山言うても、そこしかないので、そこに道をつけるっていうのは協力出来ん」ていう家があったんですね。
>
> その頃の上根来の区長さんらが何回も何回も話はしに行っとったみたいやけど、なかなか話が上手くつかなくて、「これから林道を向こうへ開通するっていうのは、自分らの代（「親世代」）やなしに、子どもらの、お前らの代のことに繋がっていくので、そういう話の窓口になって、『上根来の区を補佐する会』として『百里会』っていう会を作って、そこで若い人らで『林道っていうのはこれから必要やないか』っていう話もして、そこの地権者の理解も得てくれんか」っていうことやったんです。
>
> それで全員が入って、百里会のメンバーとして、その中で土地の買収っていうか、

165　「小浜市遠敷郷土誌」p199 より。
166　現在は市町村合併によって、滋賀県高島市となっている。
167　「小浜市遠敷郷土誌」p199 より。
168　上根来と朽木の間にそびえ立つ、小浜市最高峰の山を「百里ヶ岳」といい、これが「百里会」の由来になっていると思われる。

そこ全部寄付なんですけど、通らしてもらう理解をもらうのに、出来たのが発足なんです[169]。

このように林道を通すために、「子ども」世代が集まった組織として、1995 年に「百里会」が発足することになった。そのメンバーはとしては、「子ども世代」の「男の人」が入るため、「後継者で男のいない家は、そこの家の主に入ってもらっ[170]」たという。そして「最初の頃は、 1 年で例えば 2000 円やったら 2000 円だけ集めて 、みんなで 1 年のうちに 1 回ぐらいは、お弁当食べて話をするような感じからスタートしていった」が、「その頃から 20 年くらい経つと、段々集落の人らがいなくなっていって、みんなの家がそれなりの歳になってきたもんで、奉仕作業も百里会が主になってや」るようになった[171]。この奉仕作業については 4 章で詳しく述べるが、無住集落となった現在、このようにして発足した「百里会」が重要な役割を果たすようになっている。

2-5-3 「共同墓地」をつくる

上根来では、「個人個人の家で墓があった[172]」のだが、ある方の一言がきっかけで、共同墓地を作ろうと思い立ったのだと A さんは語っている。

> ○○さんっていう、僕より 10 歳上の人で、30 歳すぎぐらいから視力が落ちてきて、今マッサージの仕事しとる人がおるんや。平成 15 年に墓できたから、平成 13 年の時やったと思うんやわ。お盆になるとお寺に集まって法事をするんやけど、○○さんが僕に「集落で共同墓地作ってくれんか」って言うたんや。「今上根来でそれぞれの場所に墓がある。けど歳いってくるとなかなか墓の管理もできんし、参りに行くこともできん」と。僕ら自分とこは不自由なくできとるもんで、こんなこと思いもせんかったんやわ。なんやけど、僕らが感じんことをこういう人は感じるんやな、と思ってこれは絶対せんとあかんなって思ったんや[173]。

このようにして、墓の管理が難しくなってきた人からの提案を受けて、共同墓地を作ることに決めた A さんは、「するからにはみんなが参りに来る墓を作らなあかんなって思」ったが、「ちょうど道路の近くで A 家の畑と縁戚（F 家）の田んぼがあった」という[174]。そこで、

---

169 2023 年 12 月 11 日に行った A さんへの聞き取りより。
170 2023 年 12 月 11 日に行った A さんへの聞き取りより。
171 2023 年 12 月 11 日に行った A さんへの聞き取りより。
172 2022 年 7 月 9 日に行った D さんへの聞き取りより。
173 2022 年 7 月 8 日に行った A さんへの聞き取りより。
174 2022 年 7 月 8 日に行った A さんへの聞き取りより。

F さんに相談を持ちかけたところ、「お前そういうんやったらなんぼでも寄付する」と快諾してもらったため、すぐに話がまとまった。そして A さんは「手作りの墓」を作りたいと、他の人たちに持ち掛けたという。

> 集会で手作りの墓つくりたいんやってみんなに言うたんや。ほんなら「業者に頼んで割り勘したらええやん」って言うんや。でも「僕は手作りしたいんや」と。「できる分で良い」と。「できんかったらその時点で業者に出す」と。「だからとにかく来てくれんか」と。ほんでやり始めたらできるなあって。そやし 2 週間後にみんな来ようやって言うて、あの墓作ったんや。全部で 4 日か 5 日で作れたんや。そしたら今でも、ネゴリの墓よう参りに行くんや。自分らでつくった墓がきれいやし。これはよかったなあと思って[175]。

このように、2013 年に共同墓地を「手作り」で作り上げた。しかし費用については、材料代だけの出費で、「一軒につき三万しか出しとらん[176]」という。費用負担を減らして、多くの家が参加できるように、A さんは「手作り」の共同墓地を提案していたのである。また自分達で作ったお墓の方が愛着をもって参りに来れるのかもしれない。

それだけでなく、「あんな山奥なもんで、あんま管理もできひんさけえ、シカの囲いしたり、墓の下の砂利も全部先にコンクリうってあるんや。だから草絶対生えへんし、管理に行かんでええやん。」と語っており、後々のために、あまり管理をしなくても長続きするお墓を考えて作っていたのである[177]。

2-5-4　無住集落へ

それでは、「移住期」には、上根来集落の人口と世帯数はどのように推移したのだろうか。

表 18　「移住期」の上根来集落の人口と世帯数[178]

	1995	1997	1999	2001	2003	2005	2007	2009
上根来（人口）	19	15	14	15	14	14	13	11
上根来（世帯）	11	10	9	10	10	10	9	7

（出典）「小浜市遠敷郷土誌」p129 より

[175] 2022 年 7 月 8 日に行った A さんへの聞き取りより。
[176] 2022 年 7 月 8 日に行った A さんへの聞き取りより。
[177] 2022 年 7 月 8 日に行った A さんへの聞き取りより。
[178] 「小浜市遠敷郷土誌」p129 より。1995 年以降は、中ノ畑と合併しているため、中ノ畑の人口と世帯数が含まれている。

以上のように、「畜産期」と比べると、人口や世帯数の減少幅は緩やかになっている。これは、「2-4-7『畜産期』の移住」の最後で述べたように、「親世代」が上根来に残り続けたことが原因だと考えられる。しかし、「小浜市遠敷郷土誌」ではどのように統計を取っているのか分からないが、「二地域居住」のような状態が続いていたと考えると、実際の上根来集落の様子とは少し異なっている可能性がある。そこで、聞き取りより作成した「移住に関する年表を見ていく。

表 19　上根来集落　移住に関する年表②

1993 年	F さん、畜産廃止と同時に竜前（上）に降りる。
1996 年	G さん、竜前（下）に家を建てて、移り住む。
1998 年	D 家、D さんの母が施設へ入ると同時に、離村する。
1998 年	Gさんの父母、竜前（下）に移り住む。
2000 年頃	Aさん中心に、4 軒まとまって中の宮に移り住む。
2006 年	Cさん夫妻、竜前（下）へ移り住む。
2010 年頃	この頃には、上根来に残っている人は 3、４人であった。
2012 年	Aさんの父、竜前（上）に移り住む。
2013 年頃	誰も住まなくなる。実質的に無住集落になる。

（出典）聞き取りより

まず 1993 年、畜産事業の廃止と同時に、家族と離れて上根来に残っていた、F さんも竜前（上）に降りることになった。その後 G 家については、「平成 8 年（1996 年）の 1 月に僕引っ越ししてるんですよ。平成 8 年の 1 月に家が完成して、その年の秋に僕結婚してるんです。」と語るように、G さん自身は 1996 年に離村している一方で、G さんの両親については、「一応ね、行ったり来たりまでいってないか、ネゴリがメインでちょこちょこ竜前の方に来たっていう感じですかね。親父は行ったり来たりで、母親はほとんどネゴリというパターンでしたね。」と語るように、両親の程度に差こそあるが、基本は上根来に残っていた[179]。しかし、「娘が生まれて、子どもも見てほしいしってなって、それからずっと竜前の方っていう感じになる。だから娘が生まれたぐらいから、みんな竜前で生活をしたっていう感じになるんです[180]」と話すように、平成 10 年に娘さんが生まれて、両親も竜前（下）の家に同居するようになった。

ただ竜前（下）の土地については、6 軒で土地を買ったものの、「うちの裏の裏ももともとネゴリの人が買ってて、そこに建てる予定だったんでしょうけど、また違うとこに建ててっていうのはありますね。うちの固まりは結局 3 軒だけです[181]。」と言うように、共に土地

[179] 2023 年 12 月 10 日に行った G さんへの聞き取りより。
[180] 2023 年 12 月 10 日に行った G さんへの聞き取りより。
[181] 2023 年 12 月 10 日に行った G さんへの聞き取りより。

は買ったものの、家を建てない家が数軒あって、結局 3 軒のみがまとまって住むことになった。

また D 家について、D さん自身は卒業と同時に上根来を離れたことは既に述べた通りだが、D さんの父が亡くなっても上根来で一人、暮らしていた D さんの母も病気の関係で上根来を離れることになった。

A 家については、「2-4-7「畜産期」の移住」で先述したように、他の 3 軒と竜前（上）に土地を買っていた。しかし、中学卒業後、小浜の町の方へ出て働いていた、A さんは「親父が買ってあったとこ、あんまり宮さんの横は嫌やなと思って、うちの嫁さんも嫌言うし、中の宮で中古の小っちゃい家を買って、そこに 10 年ぐらい住んどった[182]。」と言うように、竜前（上）には住まず、中の宮（図 3）に住んでいた。すると 2000 年頃、「たまたま、小浜市の公有地で、企業団地として埋めたとこの残地が、公募で売りに」出ていたが、「結構大きい面積なんで、一人でもてへんもんで、知っとるもんら（上根来の元住民）に声かけて『ここで買わんか』言うて、『そこやったら買うわ』っていうことやったもんで」A さんが、抽選に応募したところ、土地を買う権利を得たという[183]。そして、「親らの次の代[184]」（「子ども世代」）の上根来出身者、4 軒で中の宮に土地を買い、固まって住むことになった。このようにして、既に上根来を離れて別の場所へ移った家も含めて、中の宮で固まって住むことになり、竜前（上）、竜前（下）と合わせて、3 か所でまとまって元住民が住むことになった。

その後、2006 年には C さん夫妻も竜前（下）に移り住むのだが、この頃から上根来に残っていた「親世代」が亡くなったり、高齢のため上根来に住むことが困難になって町へ移り住んだり、ということが多くなり、2010 年頃には A さんの父を含めて 3、4 人しか集落に残らなくなったという[185]。そして 2012 年には A さんの父も上根来を離れ、2013 年か 2014 年には、上根来に住み続ける人は誰もいなくなった。実質「無住集落」になったのだ。ただしばらくは、C さんの弟[186]が上根来の区長を務めており、行政上の住所は上根来にあった。しかし 2019 年、そのC さんの弟が急死してしまったことによって、上根来は行政上の単位としても姿を消し、名実ともに上根来集落は「無住集落」となった。

---

[182] 2023 年 7 月 8 日に行った A さんへの聞き取りより。
[183] 2023 年 7 月 8 日に行った A さんへの聞き取りより。
[184] 2023 年 7 月 8 日に行った A さんへの聞き取りより。
[185] 2022 年 5 月 27 日に行った A さんへの聞き取りより。
[186] C さんは結婚して、C 家に嫁いでいるのだが、実家も上根来集落であり、妹 2 人と弟との 4 人兄弟であったため、C さんの実家はC さんの弟が引き継いでいる。

3　上根来集落の「共同のいとなみ」

3-1　親戚関係

以上のように、2 章では上根来集落が「無住集落」に至るまでの「歴史」を具体的に見てきたが、上根来集落では、森林の利用や、寺社の行事、田んぼでの作業等において、集落の「共同のいとなみ」がかなり重要な役割を果たしていた。そこで、ここでは 2 章を踏まえて、上根来集落の「共同のいとなみ」に着目して、その歴史を振り返ってみたい。

しかし、そもそも、なぜここまで「共同のいとなみ」が盛んだったのだろうか。B さんが「大体（上）根来の集落って、昔昔からの縁故関係がほとんどの家あるんやわ。うちのひいじいさんはここから嫁さんもうとったとか、今直接のものはないけど、血縁から見れば結構残っとる。なもんで、なおさら繋がりも深かったんや思う[187]」と語るように、上根来集落では、昔から集落内での縁故関係が強かったことがその大きな要因だと考えられる。その親戚関係は現在では、詳しくは分からないが、集落の中で大きく分けて、3 つの親戚関係に分かれていたと A さんは語っている。

> 「結い」っていうのはほぼほぼ親戚関係の人らでしとったんやわ。ネゴリもあんだけの集落なもんで、親戚関係で言うと三つぐらいに分かれとったんちゃうかな。G 家とか、〇〇と C 家と〇〇が一つの親戚関係やもんで、その辺の人らで「結い」をしてたんやと思うんやわ。うちらで言うと、うち（A 家）と B 家、F 家、ほんで〇〇（A 家の分家）とで 4 軒ぐらいやったかな。ほんで E 家と〇〇と〇〇いうところと、〇〇いうとこか。そこらが大体行ったり来たりをしとったんやわ。多分僕らで分からんぐらい（前の世代の親戚関係）。B 家で言うとうち（A 家）から 4 代ぐらい前に、うちの家の娘が B 家へ嫁いどったらしいんやわ。そういうのが 1 回あるっていうと、ずっとそんな関係で「親戚関係やから助け合わなあかん」っていうのがあるみたいやな。だから今今の親戚のうて、何代も前の「家の親戚」言うてしとったんやな[188]。

このように、何代も前に嫁いだ、嫁がれたという縁故関係があると、「親戚関係やから助け合わなあかん」と、「結い」による助け合いが行われるようになった結果、大体 4 軒ずつまとまった、3 つの「親戚関係」が出来上がった。では実際にどのような血縁関係があったのだろうか。聞き取りで分かる範囲内で、A 家、B 家、F 家、A の分家の親戚関係について、家系図をまとめたのが以下の図の通りである。

---

[187] 2022 年 5 月 27 日に行った B さんへの聞き取りより。
[188] 2023 年 7 月 8 日に行った A さんへの聞き取りより。

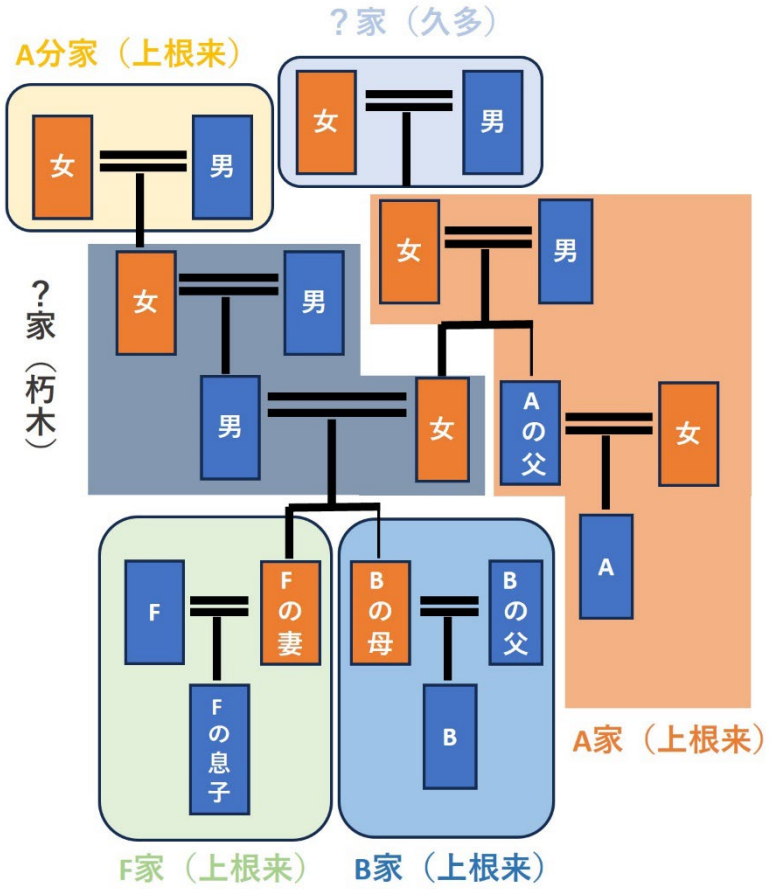

図 6　親戚関係

（聞き取りより作成）

「結い」における親戚関係は、何代も前の親戚関係から生まれたものであるが、実際聞き取りで分かる範囲の数代前でも、B さんの母と F さんの妻が姉妹であることや、A さんの「叔母」が、B さんの母と F さんの妻の「母」であることが分かり、図 3 のような親戚関係が確認できる。また、この図でも「朽木」や「久多 [189]」という地名で示しているのだが、「鯖街道（針畑越えルート）」の沿線集落との縁故関係が多い。B さんが「下根来との親戚よりも、朽木との縁戚が多いのが上根来やな。盆踊りでも下根来へ行くよりは山超えて朽木側へ行ったもんや [190]」と語るように、特に「朽木」とは、縁故関係が多く、交流も多かった。

189　「京都府京都市左京区久多地区」のことを指す。
190　2019 年 6 月 4 日に行った B さんへの聞き取りより。

3-2 「結い」の変容

それでは、こういった親戚関係のもと行われていた、「結い」はどのように変化していったのか、再度振り返ってみたい。そもそも「結い」とは、ある集団の中で、ある作業を、「何日はどこの家で作業をする」という取り決めをして、助けに回ることである。そして、上根来の場合、その「ある集団」が先述した「親戚関係」であり、「ある作業」については、時期ごとに変化している。「炭焼き期」では、炭焼きにおける「炭窯作り」と、田んぼ作業における、牛の糞尿から作った堆肥をまく作業である「肥やし上げ」や、「田植え」、「稲刈り」、「脱穀」まで「結い」で行っていた。特に「肥やし上げ」は「2-2-4　『炭焼き期』の田畑とその管理」で前述した通り、臭いが強烈だったため、肉体的にも、精神的にも大変な作業であった。しかし、「炭窯作り」が毎回 8 人で行う作業だったり、「田植え」は女性が主に行う作業だったりしたように、同じ「結い」の中でも、関わる人は違っていたと考えられる。

その後、「分収造林期」には、産業が「炭焼き」から「分収造林」に移ったため、「炭窯作り」が行われなくなった。また「肥やし上げ」については、農耕用機械の利用によって、牛が一軒に一頭いなくなったり、化学肥料を使う家が現れたりしたので、共同で作業が行われなくなった。これによって、「結い」で行われる作業は、「田植え」と「稲刈り」だけになってしまった。その後、田んぼをやめる家が増えて、「結い」で行われる作業はなくなってしまった。

3-3 共有物の「共同管理」

以上、「結い」について、前節でまとめたが、上根来の生活において、「共同のいとなみ」と呼べるものが他にもあった。それが寺社や区有林などの共同管理である。2 章で見たように、上根来では神主や住職がずっと寺社にいて管理しているわけではなかった。そこで、「コウゾン」や「寺役」など、寺社のお世話役を決めて管理していた。また「炭焼き期」の区有林については、「2-2-2『炭焼き期』の森林の利用」で既に述べたように、「集落の共有財産」としての利用と「弱者救済の場」としての利用、の 2 種類の利用をしていた。「弱者救済の場」としては、山を持たない住民が炭焼きをしていたが、それ以外の区有林には、「2-3-2『分収造林期』の森林の利用」で述べた通り、「昔のマゴジサン（祖父）から（針葉樹を）植え」ていた。そういった区有林は、実際に住民たちで手入れをしたり、「自分たちで森林組合に頼むとか、誰かに頼むとか言うて区で頼んで、間伐とかなんやかんやして[191]」もらったりと、おそらく寄合で話し合って、その管理を決めていたと考えられる。こうした区有林の、集落による「共同管理」は「分収造林期」になっても変わらず、「上根来生産森林組合」を組織して、区有林において、広葉樹の伐採と針葉樹の植林を進めていた。

[191] 2023 年 7 月 9 日に行った F さんへの聞き取りより。

以上、寺社や森林の「共同管理」について見てきたのだが、住民で共有しているものの、管理方法の特徴はいずれも似通っているように思う。その特徴は、管理対象ごとに、グループを組織して、その管理責任者を決めるというものである。小さな規模のものでいうと、「2-2-4『炭焼き期』の田畑とその管理」で述べた田んぼの水路当番もそうであるし、畜産団地と肉牛の管理は「上根来肉牛生産組合」、そして上根来集落全体の管理では、区長制度と寄合で集落の意思決定をしていた。このように、上根来集落での「共同のいとなみ」には、「結い」による共同作業と、管理対象ごとに、グループを組織して、その管理責任者を決める、共有物の「共同管理」が存在するといえる。

3-4 「結い」と「共同管理」

しかし、以上見てきたような、「結い」による共同作業と共有物の「共同管理」には、「共同のいとなみ」として、どのような違いがあるのだろうか。第一に、対象が異なっている。「結い」による共同作業は、少し誇張した言い方をすると、お互いの家のことに「首をつっこんで」いる「助け合い」であるのに対して、「共有物の『共同管理』」ではその名の通り、共有物について役割を担って、活動している。

第二に、「共同のいとなみ」としての意識が異なっている。結いについては、「なかなか一人で出来へんもん[192]」である、「炭窯作り」や「田植え」、そして「臭いが強烈で嫌だった」「肥やし上げ」をみんなで集まって作業をするため、「連帯感」が生まれる。さらに、「みんなあっち行ったり、こっち行ったり、親戚同士やら、お互いに。親戚やない所の人も、来てもらいましたけど。大体そんな形でやったんです[193]」と語るように、時には親戚ではない家とも「助け合い」をしていたが、いずれにしても、「助けたら、助けかえす」という「いとなみ」である。しかし、「助ける」といういとなみは、思った以上に単純なものではない。桜井政成(2020)が述べているように、「コミュニティでは贈り物をされたら、受け取らなければならないし、さらに返礼しなければならないという暗黙のルールがある」ため、「贈り物にお返しをしないということは、大変気持ちが悪くなること」である。これを桜井は「心理的負債」と呼んでいるが、とにかく「助けられっぱなし」ではコミュニティの中で居心地が悪くなることは共感できる。しかし、「結い」では、「助けたら、助けかえす」ことが決められているので、そういった「心理的負債」を抱えることはない。

一方で「共有物の『共同管理』」ではどうだろうか。「共同管理」においても、神社やお寺の「役」や「区長」は「持ち回り」であるし、「田んぼの水路当番」も当番制なので、一見「心理的負債」を抱えることはないと思われる。しかし、「田んぼの水路当番」程度の小規模なものは大丈夫かもしれないが、神社やお寺の「役」や森林の管理になると、「想い」の

[192] 2023 年 7 月 9 日に行った B さんの母への聞き取りより。
[193] 2023 年 7 月 9 日に行った B さんの母への聞き取りより。

違いや体の具合などで、活動に少し差が生じることがある。そうすると、「あの人に神社や森林のこと任せっきりになってしまって申し訳ない」という気持ちが生じやすい。つまり「共同管理」では、ともすると「助けられっぱなし」とまではいかないが、「申し訳ない」という気持ちが生まれがちな、バランスが難しい「共同のいとなみ」なのである。

これを上根来集落の「歴史」に当てはめて考えると、「炭焼き期」では、小さいコミュニティの中で「結い」による「助け合い」があって、その上に「共有物の『共同管理』」という「共同のいとなみ」があった。つまり、「共同管理」でバランスを維持できなくても、「結い」による作業で、「助け合い」の関係を維持することができた。しかし「分収造林期」、「畜産期」にかけて「結い」での共同作業が少なくなり、最終的にはなくなってしまう。これによって、「助けたら、助けかえす」が決められていた「共同のいとなみ」がなくなって、「共同管理」だけが残ることになり、「助け合い」の関係を維持することが難しくなった。

4　上根来集落の現在

4-1　奉仕活動

3 章まで上根来の「歴史」について見てきており、上根来集落が「無住集落」となったことは、「2-5-4　無住集落へ」で前述した通りだが、現在の上根来集落はどのようになっているのだろうか。実際に上根来へ行ってみると、「無住集落」というには、多くの家がきちんと手入れされており、まだ人が住んでいると言っても不思議ではない風景がひろがっている。それでは、現在、上根来集落の元住民は、上根来とどのような接点を持っているのだろうか。結論から述べると、聞き取りの結果、現在、上根来集落と多くの元住民をつなぐものは、「奉仕活動」、「寺社」、「森林」そして「鯖街道」などがある。そこで、この 4 章では、これらがどのように上根来の元住民と上根来集落をつないでいるのか、具体的に見ていきたい。

まず「奉仕活動」についてだが、これを主導しているのが既に述べた通り、「百里会」である。そこで「百里会」についてもう少し詳しく見ていく。「2-5-2 林道の開通と『百里会』の発足」で述べたように、1995 年に林道を通すため、「上根来区を補佐する会」として、「子ども世代」が 1 軒に 1 人参加した会が、「百里会」であるが、この時のメンバーは 18 人であった。しかし、そのうちの 5 人は敦賀や大阪、名古屋など小浜市外に出てしまったため、脱会して、現在は 13 人がそのメンバーである。また「子ども世代」の「男の人」が入るため、後継者で男のいない家は、そこの家の主に「百里会」に加入してもらったことは、既に述べた通りだが、現在は「子ども」が女性の場合、その夫が「百里会」に参加している家もある。「男の人」がいなかった家が、父から娘の夫に引き継いだ結果だと考えられる。そして、最初は「子ども世代」がお弁当を食べて交流する会であった、「百里会」が、集落の住民の減少と高齢化が進んだ 10 年ほど前から、「奉仕作業」を主になってやっていくようになった。そして 4 月と 7 月、10 月の、年 3 回の「奉仕活動」が「百里会」の公式な活動となった。

それでは、「奉仕活動」では一体どんな作業をするのだろうか。作業の一つは側溝掃除等の道路の整備である。私自身も、2022 年 7 月の作業に参加させてもらい、写真 2 のように、溜まった木々や泥等をスコップや手で取り除く作業を手伝わせていただいた。ただ重機を使って、本格的に作業している「百里会」のメンバーもいて、少し驚いた。

写真 2　側溝掃除

（2022 年 7 月 8 日　筆者撮影）

側溝掃除をしないと、道路が冠水しやすくなり、道路が傷む原因になる。そのため、元住民も小浜の町から上根来に向かうために利用する、「中ノ畑から上根来の道中」と、主に「鯖街道」を体験する観光客が利用する、「県境までの『林道上根来線』」の 2 個所を整備する。要するに、上根来集落内の [194]、小浜市街側と朽木側をメンテナンスするのである。雪の影響で側溝が泥や落ち葉が側溝に詰まりやすいため、特に 4 月の作業は大変だという。また「奉仕活動」では、水道整備も行うこともあり、2023 年 10 月の作業で手伝わせていただいた。

[194] 現在は中ノ畑集落と合併しているので、中ノ畑集落の境界まで、整備を行う。

写真 3　水道整備①

写真 4　水道整備②

写真 5　水道整備③

写真 6　水道整備④

（いずれも 2023 年 10 月 22 日に撮影。写真 3、4、6 については百里会のメンバーに撮影していただいた。写真 5 は筆者撮影。）

そもそも水道は「2-2-2『炭焼き期』の森林の利用」で述べたように、F さんの語りによると、1961 年にはじめて、上根来に水道が通っている。それ以降、何度か水道に改良を加えているのだが、大きな変化は水源である。最初は山の湧き水を引いていたが、ある時から、山の保水力がなくなったためか、水があまりでなくなってしまった。そこで遠敷川の水を引くことにしたという。最初は、田んぼまで水を引くための「用水路」を通して、水を運んでいたが、「維持管理すんの大変やし、30 年ぐらい前にパイプにしたんや」と H さんは語っている[195]。そうして写真 5 にある「川の飲み口」から水を引いて、写真 6 の 2 つの井戸のような「水量を調整する装置[196]」を挟んで、写真 3 の「オレンジのタンク」で水を貯め、各家に水が届く仕組みである[197]。そこで「水道整備」では、「タンク」や「水量を調整する装

[195] 2023 年 10 月 22 日、H さんの語りより。
[196] この井戸のような「装置」について、H さんは「奥は 50 年以上前に、集落の人が生コンここに持ってきて作ったんや。手前は、30 年前ぐらいに、業者に依頼して、市の補助金で建てたんや。」と語っている（2023/10/22）。
[197] 厳密には、「貯水する施設」は 2 つある。「オレンジのタンク」と、もう少し低い場所

置」、「川の飲み口」周辺の手入れを行う。特に「タンク」や「水量を調整する装置」には、泥がつまっており、この泥を取り除く掃除をしないと、「助太郎（後述するが、鯖街道の「お休み処」のことである。）の水を出しっぱなしにしてたら、水が濁るようになってしまう[198]」ほど、水を使うのに支障が出るのだという。

またこの「奉仕作業」もここ最近は、少しずつ変わってきている。第一に、中ノ畑集落の元住民も参加するようになった。「2-4-7『畜産期』の移住」で既に述べた通り、中ノ畑集落は上根来よりも早くに集落を出た人が多かった上に、まとまりがなく離村したために、地縁コミュニティが崩壊し、集落の維持管理ができずに荒れ果ててしまった。しかし、2022 年頃に、A さんが中ノ畑集落の元住民に対して、「たまたま木材組合[199]で（一緒になった時に）、『上根来が（中ノ畑の分も）補助金もろて（奉仕作業を）やったら、こんなにいいことはないからお前らもやれや』と」声を掛けたが、はじめは「ようせんし一緒にしてくれんか」という返答だった。しかし、「一緒にして、山へ行ったり、弁当食べて喋ったりして、（上）根来のこんなん（みんなで協力して、維持管理していること）はええなって、ほんで『入れてくれんか』になった」という[200]。そして実際、2023 年 7 月の奉仕作業には、中ノ畑の元住民が 9 人も参加することになったため、上根来出身の 11 人と合わせて 20 人で作業をしていた。

また中ノ畑の住民の参加に伴って 2023 年 7 月の「奉仕作業」から、昼食にお弁当を配布して、「助太郎」でみんなで一緒に食べるようになった。それまでは、午前中から作業を開始して、お昼ごろには解散していたのだ。昼食のお弁当会を開こうと考えたことについて、「百里会」会長である A さんは以下のように語っている。

> 明日も作業は午前中だけにして、皆んなでお昼に弁当を食べて、『昔はこうやったなあ』って話をすると次に繋がるかなあと思って。まだ言うてはないけど、秋にもしようと思ってる。一年に 2 回ぐらいはやりたいなあ。一緒に軽作業しますっていう案内にしておいて、お昼、弁当食べて皆んなで話をするのがこれからは大事なん違うんと思って。今までは根来の人だけなもんで、午前中の作業だけでご苦労さんでしたって終わっとんたんや。少しずつでも話をすることで中の畑の人も打ち解けてくれるようになるんで。小学校は（中ノ畑の元住民も）同じように行っとんたんや。そんな話をする人もいるし[201]。

に「貯水槽」がある。しかし「貯水槽」より標高の高い家は水が届かない。そのため、標高の高い家の場合、「川の飲み口」、「『手前』の水量を調整する装置」、「オレンジのタンク」の順に通り、家まで水が引ける。一方で、その他の家は、「川の飲み口」、「『奥』の水量を調整する装置」、「貯水槽」の順で、最後は家まで水が届く。

198 2023 年 10 月 22 日、H さんの語りより。

199 「福井県木材組合連合会」のことだと思われる。

200 2022 年 5 月 27 日に行った A さんへの聞き取りより。

201 2023 年 7 月 8 日に行った A さんへの聞き取りより。

昼食会には、中ノ畑の元住民が打ち解けられるようにという意図は、もちろん込められている。しかし、「お昼、弁当食べて皆んなで話をするのがこれからは大事なん違うん」という語りには、「奉仕作業」自体が集落の維持には当然必要である一方で、この活動を続けていくには、「奉仕活動」だけでは不十分ではないかという、Aさんの、別の意図を読み取ることができる。実際にAさんは、聞き取りの中で、よく「名前だけでは意味がない」や「強制しても持続しない」といった言葉を口にする。中ノ畑の元住民の参加についても、「『お前らやっとることいいな。わしらも入れてくれや』って。そうして入ってくれんことにはあかんので[202]」と語っており、「自発性」や「理解」といったことに重きを置いている。そのためには、まず交流して「昔を思い出し、語り合うこと」が必要だと考えており、「昼食会」にはそういった意図が込められている。このように、「奉仕活動」は少しずつ、「集落のインフラを整備すること」を超えて、「集落の今後を考える場」であることが目指されるようになってきた。

4-2　寺社の管理と行事

以上、現在の元住民の上根来との接点の1つとして「奉仕活動」を見てきたが、「寺社の管理と行事」のためにも、上根来の元住民が集うことがある。またHさんが「お寺とお宮さんを、どう最後にしまうかというのが『百里会』の最後の（仕事）[203]」だと語るように、現在集落の維持管理の中心的役割を担う、「子ども世代」も、寺社をどのような形で、次の世代へ引き継ぐかというのは重要なテーマだと捉えている。それでは、どんな行事や管理を上根来で行っているのだろうか。また神社とお寺ではその管理に違いはあるのだろうか。

まず神社の行事についてだが、形骸化した「ヤマノクチ」だけになってしまったことは「2-3-3『分収造林期』の寺社とその行事」で、既に述べた通りである。そして現在も、「ヤマノクチ」自体は行われているが、本来通り12月7日に決まって行われることは少なく、2023年も「みんな日曜日しかあかんので、遅いんやけど、昨日の日曜日、10日の日が一応ヤマノクチってことでしてきたんやわ[204]。」と語っている。「奉仕活動」については、「百里会」がその役割を担っているので、「親世代」は参加しないのだが、この「ヤマノクチ」は「親世代」であるCさんやFさんも含めて、元住民で出られる人は全員参加で、「宮さんの掃除をして、宮さんの扉を開けて[205]、お神酒とおこわとお供えして、みんな順番にお参り[206]」

[202] 2022年5月27日に行ったAさんへの聞き取りより。
[203] 2022年5月27日に行ったHさんへの聞き取りより。
[204] 2023年12月11日に行ったAさんへの聞き取りより。
[205] この神社の扉の中には、室町時代由来と思われる「24面の懸仏（かけぼとけ）」が奉納されている。
[206] 2023年12月11日に行ったAさんへの聞き取りより。

するという。

また「神社の世話役」である「コウゾン」さんがなくなったことも、既に述べたが、それでは誰が中心になって、神社を管理しているのだろうか。まず「移住期」以降については、「もう集落に人がいなくなって、区長っていうのも変わってやれないくらい、人もみな小浜の方へ出てきたんで、それからあとは○○（C さんの弟）さんが、区長さんやもんで、ずっと住民票だけ上根来に置いて、『コウゾン』（の代わり）っていうのも一緒にしとってもらったんやね[207]。」と語るように、区長である C さんの弟が、神社の管理を担っていた。しかしその区長さんが亡くなった現在では、「上根来区っていうのがなくなって、その受け皿として、『百里会』っていうのが行政の窓口になっとるもんで、その会長は兼務で、しとってくれ[208]」ということで、A さんがその管理を任されて、神社の鍵も預かっている。

さらに、「2-2-3「炭焼き期」の寺社とその行事」で少し触れたように、若狭彦姫神社の宮司さんが、兼務で廣嶺神社の宮司を務めているのだが、上根来の人々と折り合いの悪かった宮司さんが亡くなって、「大人しい、ええ宮司さん[209]」が京都からお見えになり、新たに宮司を務めることになった。その新しい宮司さんは、前の宮司さんの非礼を詫びた上で、「ヤマノクチだけでもお祭り事をさしてもらうんで言うてくれんか」と A さんに言いに来ていたという。A さん自身は「宮さんも一年に一回ぐらいそんなことした方がいいんちゃうかなぁと僕は個人的に思とる」というが、「ただ頼んでしようと思うと、玉ぐし料はいるやんか。ほんで集落の人に言うと、今までしとらんで、いいんちゃうかって皆言うとるけど、まあそれもみんなの総意がないとあかんしな[210]。」と語っており、長い間宮司さんに「玉ぐし料」を納める「ヤマノクチ」をやっていなかったこともあってか、簡単に「再びお願いします」というわけにはいかない。

一方でお寺の行事とその管理は、現在どのようになっているのだろうか。行事に関しては、「畜産期」以降と同様に、お盆の「施餓鬼」だけは毎年欠かさず行い、「檀家」である上根来の元住民が世代に関わらず、集まっている。同じ小浜市内のお寺では、一家に一人お寺に行って、「和尚さんに来ていただいて、先祖のお参りをする」地域もあるというが、「ネゴリは人が少ないのでみんな（全員）行く」という。そして、毎年先祖の供養のために、「方丈（住職）さんが何人か来られてお経を頂いて、施餓鬼の供養で焼香をあげて、自分とこの位牌のところをお参り」する[211]。また「ヤマノクチ」の時にも、神社の掃除を行うと同時に、お寺の掃除を「檀家」で行う[212]。お寺の掃除は、一家で男性と女性 1 人ずつ出て、「男は大体外の掃除とかをする、女の人はお寺の中の掃除」をするが、それは上根来に住んでいた時

---

207 2023 年 12 月 11 日に行った A さんへの聞き取りより。
208 2023 年 12 月 11 日に行った A さんへの聞き取りより。
209 2023 年 7 月 8 日に行った A さんへの聞き取りより。
210 2023 年 7 月 8 日に行った A さんへの聞き取りより。
211 2023 年 12 月 10 日に行った G さんへの聞き取りより。
212 B さんは竜前に移住して以降、檀家を竜前地区のお寺に移したという。そのため、｛ヤマノクチ｝の時のお寺掃除には参加されなかった。

から変わらずやっている。

この「ヤマノクチ」の時に、お寺掃除を行うのは、例年お寺の「雪囲い」をこの時期にしていたからである。雪深い地域であるので、「木材を立ててトタンをはってっていう作業[213]」をしないと、お寺が傷んでしまうのだが、2023 年から「雪囲い」をしなくなった。それは昨年に「雨戸作り」をしたからだという。「だんだん高齢になってきて出てくる人も少なくなってくると、なかなか（「雪囲い」の作業は）出来ないだろう」という考えのもと、「去年みんなで、材料を買って、雨戸をお寺の全面に」したたま、「今年から雨戸を閉めて終わる」ようになった[214]。この「雨戸作り」を開始するに至った経緯について、百里会「三役」である A さん、B さん、H さんは以下のように語っている。

> （A）わしらも年やから、次の代にバトンタッチするのにどういう風にしていかんといかんのかなっていうのは、これから 10 年かけて（考える）。「いずれは寺もやめにしよう」言うて、「計画的に寺をしまう準備をせんとあかん」と。それも僕らよりちょっと若い世代の子らから、みんな年々年いってきて力もなくなっていったし、これから先のことを考えたら、今の間に雨戸をきちっとつけてせんといかんなぁっていうことで。
>
> （B）砕けかけてからではどうにもならんさかいに、寺もどこかの寺に入檀するっていうのは前提なんやけれども、ほっといたらええやんっていうわけにはいかない。
>
> （H）お寺が法人化されとるんで、最終的になくすようにもっていかなあかんっていう話まではいってたんや。
>
> （A）そういうこと（雨戸作り）をしていくと、みんな雪囲いで年いって行けんでも、この寺はもっと置いといてほしいなっていうこともできるし。必ず来なさいよって、言われると年いって行けんと（行けないで）「やっぱりほんならどっか出ようかな」ってなってしまうと減る一方にもなるやん。なんで、年いっても守っていける方法を[215]。

このように、「どこかの寺に入壇する」ということも視野に入れつつ、「年いっても」行く回数が少なくなっても、お寺を守っていける方法として「雨戸作り」がなされた。そしてこの作業について、A さんは「今度僕が言わんでも、お寺の雨戸も『とにかく間に合わんでええし、みんなでしてみよう』っていうて、今度は僕以外の下の子がそう言うてくれるようになったんや。いいことやなあと思ってなあ。うまく繋げていけとるなあって喜んどるんやけど。来週の日曜日は雨戸付けや。けっこう予定びっしりやで（笑）。[216]」と語っており、A さ

[213] 2023 年 12 月 10 日に行った G さんへの聞き取りより。
[214] 2023 年 12 月 10 日に行った G さんへの聞き取りより。
[215] 2022 年 5 月 27 日に行った A さん、B さん、H さんへの聞き取りより。
[216] 2022 年 7 月 8 日に行った A さんへの聞き取りより。

ん達「子ども世代」の中でも、A さんより若い人達が率先して作業を行っていることを喜んでいた。

また神社の「コウゾン」さんとは違い、お寺の「役」である「寺役（寺総代）」は、現在でも 4 年から 6 年就任すると別の人が務めるという慣例は変わらず存在している。そして、何の仏教行事をやるかは、「寺役」に委ねられているため、「寺役」によって「涅槃」をやったりやらなかったりすると、A さんは語っている。

> 涅槃ていうのは今もした方がいいでって言うとんやけんど。したりせんかったりしとる寺役さんがおったもんで。2 月やもんで、雪が多かったりすると行きにくいし今年はやめとこかっていう感じではしとったんですけど。お寺ある以上は「涅槃くらいはした方がいいで」ってお坊さんからも言われとるんで。
>
> 寺役の方も去年の 8 月で僕らに変わったんで、今年の筆頭総代さんらは 2 月のときに涅槃はするんじゃないかなとは思っとるんですけど。みんな連絡しとくとみんなお参りは来るんで。ただ、それも信仰の個々の思い方やな、強制は出来んので[217]。

このように「涅槃」については、2 月の雪と重なるため、「寺役」次第でなくなることも多々あった。しかし兼務でお願いしている、住職さんにも「涅槃くらいはした方がいい」と言われているといい、A さん自身も行った方が良いと考えている。2023 年から、E さんが筆頭総代で、A さんも「三役」になるため、来年以降は習慣的に「涅槃」が行われるかもしれない。

以上、現在の「寺社の管理と行事」について見てきたが、お寺と神社で、元住民にはその意識の差が見られる場合もあり、H さんは、「お寺の場合は檀家がしっかりしてるから、ある意味ええんやけど、お宮さんが問題や[218]」と語っている。B さんも、「感覚的にも宮さんと寺って、違う[219]」と語っており、それは「氏子」は掛け持ちができるため、「檀家」ほど厳密ではなく、曖昧なことがその要因の一つだという。実際に、やはりお寺には人が集まるようで、A さんも上根来の今後について話している時、以下のように語っていた。

> 今上根来でいうと、お寺おいてあるやろ。あれで人が集まるきっかけになっとるんや。先祖祀ってあるもんで、お盆前になったらみんな集まって、その掃除に来たりとかは年に何回かはする。お盆にはお盆で、施餓鬼っていう供養もするときにはお参りに来るんで、一軒に対して何人も来るさけえ、何十人も来るわな。それが一つ（上根来に集まる機会）になっとるんやわ[220]。

---

[217] 2023 年 12 月 11 日に行った A さんへの聞き取りより。
[218] 2022 年 5 月 27 日に行った H さんへの聞き取りより。
[219] 2022 年 5 月 27 日に行った B さんへの聞き取りより。
[220] 2023 年 7 月 8 日に行った A さんへの聞き取りより。

このように、上根来に頻繁に戻って来られない家もある現在、「お寺」は、上根来に「何十人も」人が集まる大きな「きっかけ」になっている。お寺には「先祖の供養」という役割があるため、関心が向く元住民が多いことがその要因で、「先祖はネゴリからのお寺なんで、お寺に祀ってもらってお寺でお世話になっとるんで、お寺のことには協力的になるけども、お宮さんのこと言うたら、なんもせんでもいいん違うんかっていう考え方の人もそら何人かはおるんで。やっぱり先祖の供養っていうのが一番大きいです[221]。」とAさんも語っている。

4-3　森林の管理と木材の収益

前章では寺社について見てきたが、「森林の管理と木材の収益」も、元住民にとって、上根来との大事な接点になっている。ところで、日本では木材価格がどのように推移しているのだろうか。林野庁のデータによると[222]、「木材価格は高度経済成長に伴う需要の増大等の影響により1980年にピークを迎えた後、木材需要の低迷や輸入材との競合等により長期的に下落」している。特に1985年以降はその価格が急激に下落し、2000年を過ぎた辺りにはピーク時の3分の1以下にまで安くなっている。ただ1980年ピーク時の3分の1程度であるものの、「2021年には世界的な木材需要の高まりや海上輸送運賃の上昇により輸入木材の価格が高まり、代替需要により国産材の価格も上昇（いわゆる「ウッドショック」）」している。その影響は、森林組合による間伐で、地権者にわたる金額に表れており、Aさんは以下のように語っている。

> 今（れいなん）森林組合が間伐事業の作業をしとるんや。ウッドショックの前の年ぐらいからやけど、中国への輸出がものすごい多いんや。日本人は節のない木を使うと高く売れるんやけど、中国は大きさだけで、何立米いくらで買いますよみたいなもんなんや。だから細いところまで売れるんやわ。その分だけ収益が上がるから、今のれいなん森林組合は業績がものすごいいいんや。地権者への返還金も多くなってきとるんで、けっこうな金になるんやで。一昨年ぐらいからその単価がものすごい上がっとんのや。だから地権者も間伐してもらうだけでけっこう金入るもんで皆んな「やってくれ、やってくれ」っていう人が多い。僕は森林組合の役もしとるもんで、今年その総会に行ったら業績がものすごいええんやわ。組合長が「間伐事業

[221] 2023年12月11日に行ったAさんへの聞き取りより。
[222]林野庁「森林・林業・木材産業の現状と課題　3.林業について（1）林業生産の動向」より（最終閲覧日2023年12月18日）
https://www.rinya.maff.go.jp/j/kikaku/genjo_kadai/attach/pdf/index-60.pdf

様様や」言うてた[223]。

このように、現在は、れいなん森林組合の業績が伸び、間伐による地権者への返還金も多くなっているため、地権者の森林に対する注目度が上がっている。さて、それでは上根来の元住民は、現在どのように上根来の森林と関わっているのだろうか。少し話は遡るが、「2-3-2『分収造林期』の森林の利用」の表 9 において、森林の種類ごとの利用について述べた。その中で、分収造林期から、「広葉樹」として手が入れられていない山は、現在もそのまま広葉樹林となっている。そこで、ここでは「分収造林地」と「個人で植林した山」の管理について分けて見ていきたい。

まず「分収造林地」の管理について、この土地は、上根来集落の全ての家が加入している「上根来生産森林組合」が所有しているのだが、「2-3-1『分収造林期』の産業」で述べた通りの「『分収造林』契約」上では、「森林研究・整備機構森林整備センター（旧森林開発公団）」が間伐等の計画を立て、実行できるような整備をして、「れいなん森林組合」が間伐や主伐を実行するはずであった。しかし、契約期間の 50 年を過ぎても、間伐の作業計画すら進んでいないほど、ほったらかしであった[224]。この要因には、前述した木材価格の下落が大いに関係していると考えられるが、これには、元住民の中でもかなりの不満が出ていた。「一番困るのは地権者。上根来生産組合で法人化したって法人税がかかる。そんな感覚国の方には全くない。2、3 年前にそこの出先機関の人に来てもらって、『90 年税金払っとったら 720 万税金払うんやぞ。720 万のもと（を間伐や主伐事業で）とれるんか』という話もしたんやけど、全然眼中にあらへん。だからあかん[225]。」と A さんが語るように、特に大きな問題が法人税の支払いである。上根来の住民は、「分収造林」契約における木材の収益を、集落の全員で受け取るために、「上根来生産森林組合」を作ったのだが、その収益がゼロであるにも関わらず、法人税の支払いだけがかさんでいるため、不満が募っていたのだ。

しかし、こうした元住民たちの気持ちが伝わったのか、あるいは木材の価格上昇に伴ってか、2023 年に入って、ようやく間伐のための作業道がつけられることになった。「区有林(分集造林地)は山深いもんで、作業道つけんのも時間かかるんやけど、少しずつはつけていってくれ」ており、「あと 2 年ぐらいで間伐できるぐらいまでいく」かもしれないという[226]。そして間伐作業を進めていくにあたって、「上根来生産森林組合」側からの提案で、生産森林組合のメンバーと、「森林研究・整備機構森林整備センター（旧森林開発公団）」の所長、そして「れいなん森林組合」責任者、の三者で話し合いが行われることになった。私自身も参加させてもらったので、その様子を簡単に紹介する。

---

[223] 2023 年 7 月 8 日に行った A さんへの聞き取りより。
[224] このため、2010 年頃に 40 年の「契約延長」を行い、現在はトータルで 90 年の契約になっている。（A さんの語りより。2023/12/18）
[225] 2022 年 5 月 27 日に行った A さんへの聞き取りより。
[226] 2023 年 7 月 8 日に行った A さんへの聞き取りより。

写真 7　分収造林地

写真 8　作業道

（いずれも、2023 年 10 月 22 日、筆者撮影）

その話し合いは、2023 年 10 月の「奉仕活動」後の昼食会のあとに行われた。まず「森林整備センター」の所長からは、「生産森林組合」と「分収造林」の現状と課題について語られ、「れいなん森林組合」からは、作業道の進展状況と今後の予定が伝えられたのだが、質疑応答でも「作業道新設のうち、どの代金が地元負担なのか」といった質問がとんだ。中でも、A さんは、前述した法人税について、法人税に見合うだけの間伐をして欲しいということを強く訴えていた。また「法人を休眠しながら、収益を受け取れないのか」といった提案まで行っていた。さらに A さん達は、作業道を 1 週間前から下見しており、間伐事業の問題点を見つけていた。それは、作業道をつけている場所は、スギの樹皮をツキノワグマが剥がしてしまう被害である、「熊はぎ」が多く、この辺りを間伐しても、木材の価値が低いため、高く売れないのではないかという点である。そして、別の「熊はぎ」が少ない、平らな場所に、作業道をつけてはどうかと提案していた [227]。話し合い自体はこれで終了だったのだが、この「熊はぎ」の状況と、代替案の「平らな場所」について実際に見てもらった方が良いという元住民側からの提案で、実際にみんなでこの 2 個所を見に行くことになった。

[227] 少し勾配がある場所を抜ければ、「平らな場所」に着くので作業しやすいという提案だったのだが、この勾配についても、測量の仕事をしている H さんが測ったところ大丈夫ではないかと言っていた。

写真 9　「熊はぎ」の被害

写真 10　「平らな場所」の入り口

(いずれも、2023 年 10 月 22 日、筆者撮影)

そもそも、このような地元と「整備センター」による話し合いをすること自体が珍しいというが、1 週間前から下見をしたり、積極的に地元側から提案を行ったりすることで、A さん達は「お金」にこだわっているように思えるが、これにはどういった背景があるのだろうか。第一に、「50 年先、子どもが少しでも良い暮らしができるように」と、一生懸命に植えた親の想いを粗末にしたくないという気持ちがある。聞き取りの中でも、「植えたのは親で、親父らの想いを考えると粗末にするとバチ当たるかなって思う [228]」と頻繁に語っている。そしてもう一つは、上根来に関心をもってもらうためである。この話し合いの中でも A さんは、「法人税に見合うだけの間伐をできていないことが、今日の会議にも 18 人中 7 人しか参加してない原因 [229]」になっていると話しており、収益を出すことが、「分収造林地」ひいては上根来自体に関心を向けてもらうことにつながると考えている。そして、「お金が入ってからなんやけど、やっぱり今までみんな一円ももらってないんで、入ったら分配するっていうのも一つした方がいいなって。また理解も深めてくれるんで [230]。」と語るように、収益を得たら、まずは分配することで、集落を受け継いでいく活動への「理解」を示してくれる一歩になると考えている。

続いて、「個人で植林した山」の管理について述べるのだが、ここで言う「個人で植林した山」とは、「分収造林期」に個々で針葉樹を植えた土地と、田んぼや畑の跡地に植林した土地のことである。前述したような木材価格の上昇や、間伐事業をするための国の補助金もある影響で、「今間伐してもらうと 1 番地主への還元率も高い [231]」ため、数年前から、間伐事業に「れいなん森林組合」が力を入れて取り組んでいる。本来こうした「個人の山」の間伐は、個人から「れいなん森林組合」に頼むのだが、上根来を含む小浜近辺の「個人の山」は面積が小さい。そこで、「10 町に近いくらいの面積のあるところやと、森林組合も効率よ

[228] 2022 年 7 月 8 日に行った A さんへの聞き取りより。
[229] 2023 年 10 月 22 日、A さんの語りより。
[230] 2023 年 7 月 8 日に行った A さんへの聞き取りより。
[231] 2023 年 12 月 11 日に行った A さんへの聞き取りより。

くできる」ため、森林組合は「何人もいる地権者を全体的に取りまとめてくれんか」と依頼がある。そこで、上根来でも間伐事業をやってもらいたいという話をすると、「みんな理解してくれ」るため、A さんは「そんなんをとりまとめて」いるという。また「(間伐の) 立ち会いなんかも行かなあかんのですけど、地主の人らに声かけして、何日何時から立ち会いをしたいんでって言うとみんな来てくれる」という[232]。このような「取りまとめ」に、「上根来は早くから取り組んどったんで、理解のある地域やって、森林組合も優先的に[233]」行ってくれるため、「個人の山」の間伐は順調に進んでいる。

さらに上根来では、「れいなん森林組合」が、このような間伐作業を行うためにつけた、「作業道」の整備を、元住民たちで行っている。2023 年の「ヤマノクチ」の後にも、新たな「作業道」の確認と古い「作業道」の整備を行ったことについて、以下のように語っている。

> 今から何年も前についた作業道なんかがあって、そんなところやと枯木が倒れとったり、道路へ土も被ったりして、車が行けないようになってる作業道もあるんです。その整備をするっていうと、整備をするために必要な重機であるとか、材料費を補助してもらえる団体が、「小浜市林業振興会」っていう会。それは小浜市全部の地域の人らが入会しとるんです。作業道について整備なんかをしてくれるんやと、そこ（「小浜市林業振興会」）から、重機代であるとか材料費は補助しますよっていう風になっとるんで。その補助金をもらって、まあ 5 人だけやったんですけど、5 人で作業道の整備をして、その後、今年つけてもらった道路もこんな様にここまでこうやってしてついとるしなっていうのを確認に行ってきたんです[234]。

このような作業については、集落の元住民全員で行うわけではないが、A さん、B さん、H さんの「百里会」の三役を含む 5 人で行っていた。また、この小浜市の補助金については、「林道維持管理地域支援事業補助金」のことだと考えられる。この補助金は、「林道清掃や小規模な補修などの維持管理に要する経費の助成」として「機械・重機リース費」は上限 5 万円、「原材料購入費」は上限 10 万円、「委託費」も上限 10 万円が取り決められている[235]。しかし、小浜市の 20 集落程あり集落のうち、3 集落しかこの制度を利用していないという。それは、役所への計画書の提出、そして施工する前の作業についての現場写真や、その後の写真の提出など、手続きが複雑だからである。しかし、上根来には建築や測量の仕事をしている人も多いので、そういった仕事を活かして作業を行う。

---

[232] 2023 年 12 月 11 日に行った A さんへの聞き取りより。
[233] 2023 年 7 月 8 日に行った A さんへの聞き取りより。
[234] 2023 年 12 月 11 日に行った A さんへの聞き取りより。
[235] 小浜市の HP、「林業支援」の「林道維持管理地域支援事業補助金」より。
https://www1.city.obama.fukui.jp/shigoto/shigoto-sangyo/ringyoshien/4593.html
（最終閲覧日 2023/12/19）

我々のところは、〇〇（H さん）がそんな仕事もしとるんで、計画書を提出してくれたりとか、施行した現場写真とか全部してくれたりとか。重機やったら、うちには重機あるんで何台も持って行って使ったりして、その分だけ一応お金も浮かせれるんで。浮かしたやつをプールしといてみんなでご飯食べたりとか、集落の結束とみんなの意思疎通っていうのに使うようにして。懇親的なことも絶対必要なんで、そういうのにそういうお金を使うようにしとるんですよ[236]。

そして A さんがこう語るように、「作業道」整備のためだけにこういった補助金を得るのではない。補助金を利用して、上根来集落の元住民同士の結束や意思疎通を図ろうと、A さんは考えているのだ。

4-4　「鯖街道」関連のイベント

近年では、「鯖街道」が「日本遺産」に登録されたため、上根来でも「鯖街道」関連のイベントが増えた。このイベントへの協力をすることも、元住民が上根来と関わる「理由」になった。

2016 年、「海と都をつなぐ若狭の往来文化遺産群 ～御食国若狭と鯖街道～」が「日本遺産」に認定された。「日本遺産」とは、「歴史的経緯や、地域の風土に根ざした世代を超えて受け継がれている伝承、風習などを踏まえたストーリーの下に有形・無形の文化財をパッケージ化」したものであり、「文化庁」が「文化財や伝統文化を通じた地域の活性化を図るため」に、「有形・無形の様々な文化財群を総合的に『活用』する取組を支援」している[237]。そしてこの「若狭の往来文化遺産群」は、「若狭街道 ―御食国若狭の原点と鯖街道のメインルート―」、「鯖街道の起点 ―湊町・小浜の賑わい―」、「針畑越え ―最古の鯖街道の歴史的景観―」、「若狭の浦々に続く鯖街道 ―都の祭りや伝統を守り伝える集落―」の 4 つから成るのだが、「上根来集落」も「針畑越え ―最古の鯖街道の歴史的景観―」の「構成文化財」に選ばれた。「針畑越え」は、「1-3 調査地」で前述した通り、古代以来、若狭と京都を結ぶ鯖街道の最短ルートである。これによって、上根来集落にも、国から補助金がおりて、「鯖街道」を「活用」する取組に協力することになった。そしてその補助金をどのように利用するか、小浜市と協議したところ、道路沿いで、由緒ある庄屋の隣居だったと伝わる民家、屋号「助太郎」を改修して、2016 年 10 月に「鯖街道お休み所『助太郎』」をオープンすることになった。

---

236 2023 年 12 月 11 日に行った A さんへの聞き取りより。

237 「日本遺産　ポータルサイト」の HP、「日本遺産とは」より。
https://japan-heritage.bunka.go.jp/ja/about/
（最終閲覧日 2023/12/19）

写真 11　「助太郎」外観

写真 12　「助太郎」の中の様子

（いずれも、2022 年 5 月 29 日　筆者撮影）

この「助太郎」は現在、「奉仕活動」を含めて、様々な活動において元住民が集う拠点になっている。それでは実際に、どういったイベントが行われているのだろうか。これは、「日本遺産」に登録される以前から行われているが、「鯖街道」関連の一番大きなイベントは「鯖街道ウルトラマラソン」である。「鯖街道ウルトラマラソン」とは、その名の通り、鯖街道の「古道」を約 77 ㎞走る長距離マラソンであるが、小浜市街を出発して、京都の街中を目指す通称「本鯖」と、その中間地点から京都を目指す通称「半鯖」がある。上根来はこの「本鯖」の通過地点になっている。また同様に、「鯖街道」を小浜から京都まで歩く、「鯖街道体験ウォーキング」なども開催されたり、小浜の小学校でも、5 年生が「鯖街道」を歩いて朽木まで行く体験をしたりする。こういったイベントは、鯖街道の「古道」を通るため、アスファルトの道以上に整備が必要である。そこでイベントの前には、その整備を行い、上根来の元住民も数人参加する。

写真 13　鯖街道

写真 14　池の地蔵

（写真 13 は 2022 年 7 月 10 日、写真 14 は 2023 年 5 月 7 日、いずれも筆者撮影）

「鯖街道」は写真 13 のような山の中の道なので、太い木が道をふさいでいる場合は、その木を切ったり、伸びた枝がイベント参加者に当たりそうであれば、その枝を切ったりという作業を行うのだが、その道中には写真 14 のような江戸時代に掘られ、未だに水が枯れることのない井戸等を見ることができる。またイベント前の整備だけでなく、「ウォーキングやるから、（上根来が）ちょうど中間やから、百里会さん昼おにぎりか鍋か作ってもらえんかと」小浜市から依頼があることもある。その際には、「B さんが狩猟もしとるもんで、きれいに獲れたやつが冷凍庫にあったりすると、それ持ってきて自分が作ろかとか。猪鍋を作って振る舞ったり」しているという[238]。

また「鯖街道」の活用については、小浜市が積極的であるため、2023 年の 10 月には、街道沿線集落の住民と小浜市、大学教授や大手旅行会社の社員までも交えて、「鯖街道」を今後どのように活用していくかという話し合いが「助太郎」で行われた。話し合いでは、小浜市から沿線集落の住民に向けて、提案を求められ、針畑峠に展望台が欲しいという旨を伝えたという[239]。こういった「鯖街道」の新たな利用提案や前述した街道整備などは、沿線集落が協力して行われる。実際に、下根来の「さみどり会」、遠敷地区の「遠敷まちづくり協議会」という団体と共に活動している。上根来だけは「無住集落」であるが、「百里会」と名前をつけて活動しているため、小浜市から「百里会」を窓口にして、元住民に協力を呼びかけやすいのだという。

以上のような「鯖街道」関連のイベントへの協力は、基本Aさん、Bさん、Hさんの「百里会」三役を中心に行われている。しかし、「百里会」三役より若い世代がその役割を担っているのが、「助太郎」の掃除当番である。「2 週間に 1 回、『助太郎』のトイレ掃除とか掃除を若い者 5 人のローテーション」の「1 か月交代制」で行っている[240]。この掃除当番の 1 人である、G さんは以下のように語っている。

> お寺の行事の時、ちょっと余裕があるときくらいに、家を見に行ったりとかお墓を見に行ったりとかはするんですけど、A さん、B さん、H さんは結構ネゴリの方も行ってくれてて、〇〇（F さんの息子）さんとかもお父さん（F さんのこと）がまだ元気なんで、行ってらっしゃるんですけど、僕は 1 番行けてないですね。申し訳ないくらいに。
>
> あと、助太郎さんのトイレの掃除っていうのも当番でしてるんですよ。やっぱりちょっとしとかないと、掃除とかね。何月は頼むでって言われたらその月くらいは月に 2 回とかそれくらいは行くんですけど、全く行かない月は全然行けないですね。トイレ当番は「百里会」（の仕事）なんですけど、Aさんなんかは会長もしてくれて

[238] 2022 年 7 月 8 日に行った A さんへの聞き取りより。
[239] 上根来から朽木に抜ける道中の「針畑峠」は、見下ろすと、雲が一面に広がり海のように見える「雲海スポット」であり、「雲海」が見える時期には、車が渋滞するほど、多くの人が訪れる。
[240] 2023 年 12 月 18 日に行った A さんへの聞き取りより。

るし、っていう方を除いて、簡単な掃除なんで、役員をしてない 5 人くらいで回して[241]。

実際、Aさんは、Gさんについて、「理解もできるし、行動力もある[242]」5 人のメンバーの 1 人であると考えている。しかしその中では、「1 番行けてない」と語る G さんにとっては、「掃除当番」は上根来との重要な「関わりしろ」になっている。

4-5　さまざまな「通い」

以上、「奉仕活動」、「寺社」、「森林」そして「鯖街道」と 4 つ、元住民が上根来と関わる重要なポイントを見てきたが、その他に上根来に行く機会や関わる機会はあるのだろうか。ここではある種、「公式」とは言えない、上根来との関わりを見ることで、日々の暮らしの中で、元住民にとって「上根来」をどういう存在として捉えているのか描いてみたい。

まず「百里会」三役である、A さん、B さん、H さんについてだが、週に 2、3 回は上根来に行くというが、そのことについて、A さんや B さんは以下のように語っている。

> 1 週間に僕らでも 2 回や 3 回ぐらい行くし。荒らす人もいるから、「人がよく来てるな」と思うと悪いことするのも留まるやろ。今百里会の役員をしとるもんで、それぞれが時間のあるときには、ちょこちょこっとでもええさかいちょっと通ったりしながら。この 3 人が頻繁に行くようにしてる。不審な車とかあれば、警察からもナンバー控えといてくれって聞いてるから。あんな車止まっとったけど、お前昨日行ってないかとか聞いて、情報交換とかはしながら[243]。

> 責任感があってどうこうっていうんじゃないんやけど、やっぱり愛着もあり。こないだも泥棒が入って、なんやかんやあったけど別に取られて困るもんはあらへんねやて。ただそれが横行するとなぁ。岸本のお嬢さんも言うとったけど、「大風が吹いて屋根がはがれてるぞ」とか「ガラス入ったから泥棒入ったんちゃうか」って情報入れるようにはしてる。責任を持って行っとると言う感覚ではないんや[244]。

このように、上根来が荒れ果てた姿にならないように、「百里会」三役の三人は頻繁に訪れている。しかし、B さんが語る通り、それは責任感からというよりは、愛着もあって、「ほ

[241] 2023 年 12 月 10 日に行った G さんへの聞き取りより。
[242] 2023 年 7 月 8 日に行った A さんへの聞き取りより。
[243] 2022 年 5 月 27 日に行った A さんへの聞き取りより。
[244] 2022 年 5 月 27 日に行った B さんへの聞き取りより。

っとけない」というのが正しいのかもしれない。また A さんも、元旦には必ず「廣嶺神社」にお参りへ行って自分自身を見つめ直したり、頻繁に行って、小さい頃の景色を思い出したりしていると語っている。

> 僕はあそこ行くことで原点見つめ直せるもんで、「いいなあ」って思ってよく行ってる。「子どもの頃に見とった風景こんなんやったからなあ」とか、「やったら今の苦労は大したことじゃないなあ」とか、「まだ頑張り足らんなあ」とか、を思えるもんで。自分を一番思い返せる場所であるもんでな。故郷（ふるさと）の一番いいとこってそこやで。自分の原点に帰れる場所ってそこしかないもん。
>
> やっぱり日々追われるし、白木君かって就職もし、また結婚もし、子どもができたりとか、新居をどこ構えるか、とか色んなことをこれからやっていくんやけど、「これでよかったんかなあ」とか「これでいいんかなあ」とか思ったりすると、故郷へ帰ってそこの景色を見ると一番正しい答えが出て来るような気がするけどなあ。
>
> 「ここであの親父（C の夫)、こんなこと言っとった」とか、その時は「ふーん」思て聞いとったけど、「なかなかできることやないもんなあ」とか、「やっぱりそういうこと思えたりできたりする人間にならんとああかんなあ」とか、自分に言い聞かせたりできる場所は故郷やわ。ほんま（笑）[245]。

このように、A さんにとって、上根来は「故郷」であり、「原点に帰れる場所」と考えている。故郷を離れて 1 人暮らしをする多くの人が経験することかもしれないが、故郷へ久しぶりに帰ると、子どもの頃の記憶を思い出したり、普段の思考と違った考えになったりする。それは A さんにとっても変わらず、上根来は、普段の日々の中で忘れがちな大事なことを思い起こさせてくれる、「故郷」という大切な場所だと考えている。

しかし、もちろん、「百里会」のメンバー全員が週に 2、3 回の頻度で訪れているわけではない。小浜市内に住んでいても、竜前や中の宮に一緒に固まって住んでいるわけではない人は、少し上根来まで訪れるのは大変だったり、仕事が忙しくて頻繁に上根来まで中々行けなかったりする。実際、聞き取りの中でも、奉仕作業だけは顔を出すという人や、2 か月に一度は行くようにしているという人もいた。そんな中でも、「公式」な活動以外で、集まって作業をすることもあるのだと A さんは語っている。

> 5 人牛飼っとった畜産団地あるわな。あそこは皆片づけに行ったりとか、屋根の塗装しに行ったりとかはずっとしとんのや。「維持管理はきちっとしていこな」と。我々しとらんのに他人にも言えんし。あの 5 人のメンバーは、理解もできるし、行動力もあるんで、できていくんやわ。やっぱり 5 人でそんなようなことをしながら、お昼食べて、しゃべってる中で、「他何人もおるけど、やっぱり我々の親らの代もそ

[245] 2023 年 7 月 8 日に行った A さんへの聞き取りより。

の 5 人しかおらんかったんやろな」って。「やっぱりネゴリの生計立てるために、こういうこともやろう言うて、理解し合えて協力し合えてやれたのが 5 人しかおらんかったんかもわからんなあ」って言いながら。今もそうやもんで。今も理解したり心底協力してくれるのはあの 5 人なんやわ。あとの者らは「招集かけるもんで、お寺もあるし、行かんとあかんなあ。昼まで行ったらええやろ。」みたいな感じで来る人が多いんや。「これからこんなことしようかとか。こんなことやってよかったなとか。」とか言うのも全然おらんな[246]。

このように、「奉仕活動」や「寺社」、「森林」の管理以外にも、三役の A さん、B さん、H さんと F さんの息子、そして G さんの 5 人が集まって、「畜産団地」の維持管理をすることがある。また A さんが語るように、他の上根来のことに関しても、同世代で共に「理解し合えて、協力し合える」関係なのは、この 5 人だという。実際、「4-3 森林の管理と木材の収益」の最後で述べた、「ヤマノクチ」の後の作業道整備は、この 5 人で活動しているように、「畜産団地」の作業の他にも、5 人だけで上根来の作業に行くことも多い。

それでは、「親世代」である C さんや F さんは、どのくらいの頻度で上根来に戻っているのだろうか。F さんは「しょっちゅう行きます[247]」、C さんも「ネゴリには一週間にいっぺん（一回）は行くなあ[248]」と語っており、毎週上根来へ行っている。ただ何かをするために行くというわけでもないようで、以下のように語っている。

> 上根来では何もしとらへんねや。テレビ見て夕方には帰ってくる。家の中に風を通したりやな、あそこは山の上なもんで涼しいしやな、暑い日にはいつもあそこにいるんや。毎週行ってるようなもんです。土日はあまり行かんねんけど。滋賀県まで越えられるもんで土日は車が多いんや。特に単車が多いんや。危ないさかい土日は行ったらあかんって（息子夫妻に言われている）（笑）[249]。

> ネゴリにテレビ残してるんよ。ケーブルテレビっているやろ、あれやないと入らんもんで。それだけ残してもろて。一台くらいあったほうがええちゅうてな。あとは、草刈りしたり、薪作りしたり、家にいてちょっと掃除したり。それくらいや。何かものとりに行ったり。ミョウガとか、ひとりでにできるんやわ。ようけできるんやって、広がって、蔵の前に。親戚の人らみんな採りに行っとる[250]。

このように、F さんや C さんは、上根来で過ごした時間の方が長いため、家に帰るような

[246] 2023 年 7 月 8 日に行った A さんへの聞き取りより。
[247] 2022 年 7 月 9 日に行った F さんへの聞き取りより。
[248] 2022 年 7 月 10 日に行った C さんへの聞き取りより。
[249] 2022 年 7 月 9 日に行った F さんへの聞き取りより。
[250] 2022 年 7 月 10 日に行った C さんへの聞き取りより。

感覚で上根来に行っているのかもしれない。実際、「2-4-7「畜産期」の移住」や「2-5-4 無住集落へ」で述べたように、移住先で土地を買っても、家が建っても、子どもが先に移り住んでも、「親世代」は上根来に残っている家が多かった。やはり「親世代」にとっては、上根来こそが自分が「いるべき場所」だという意識があるのかもしれない。F さんは、「上根来も時間の問題やさかい。もうあの集落も今みたいやないようににになってしまうさかいな。もうそうやなあ、わしらの息子のおる間は何とかもつけんど、息子の子供らは、住んだこともない、行ったこともないんやさかい。自然消滅してしまうやろうと思う。寂しい、ほんま[251]。」とも語っており、Aさん達には、「無住になった集落が頑張ってしとる[252]」というある種の「誇り」のようなものも感じたが、F さんは上根来から人の気配がなくなってしまうことを、本当に寂しいと感じており、上根来への想いの違いを少し感じた。

4-6 まとめ

以上、現在の元住民と上根来集落の接点について、詳しく見てきたのだが、ここで簡単にまとめてみたい。多くの元住民は、主に 4 つの点で上根来集落と未だに関わりをもっていた。一つは「奉仕作業」である。この「奉仕作業」では、「百里会」がこの役割を担っているため、ほとんど上根来に足を運ぶことがない元住民も含めて、「子世代」のほぼ全員が参加していた。この「奉仕作業」も最近は中ノ畑の住民が参加したり、「お弁当会」を開くようになったりと、「上根来の今後を考える場」であることが目指されつつある。二つ目は「寺社の管理と行事」である。こういった「寺社の管理と行事」には、「親世代」も「子世代」も参加する。特にお寺の重要な行事である、お盆の「施餓鬼」には、上根来の元住民がほぼ全員顔を出す、貴重な機会となっている。その一方で、神社の管理や行事には参加したいという意識が低い人もいる。そして三つ目は「森林の管理」である。特に「分収造林地」の管理は、上根来の全戸が加入している「上根来生産森林組合」がその管理を担っているため、本来は元住民全員に関わる問題なのだが、現状は収益が出ておらず、興味が遠のいている。しかし、こうした「分収造林地」も「個人の山」も、間伐事業が着々と進んでおり、今後収益が出れば、元住民と上根来の重要な接点となるかもしれない。最後の四つ目は「『鯖街道』関連のイベント」であるが、イベントでの炊き出しなど人手が必要なものを除いて、「百里会」三役を中心にしか参加していない。またこれら以外にも、上根来への「さまざまな『通い』」が見られた。こうした「通い」には、元住民の上根来への「想い」の違いが垣間見えた。では、こうした元住民と上根来との接点が「上根来のこれから」にどのように影響するのだろうか。次章で詳しく見ていきたい。

[251] 2022 年 7 月 9 日に行った F さんへの聞き取りより。
[252] 2022 年 7 月 8 日に行った A さんへの聞き取りより。

5　上根来集落のこれから

5-1　「むらじまい」せずに時代にあった維持管理を

それでは、上根来集落の「これから」について、元住民はどのように考えているのだろうか。私が「むらじまい」という言葉を出すと、A さんは次のように語っていた。

> だいたい「むらじまい」とか言うてる、どっかの学校の教授の話も聞きに行ったこともあるんやけど、上根来っていうのはそんなんではないで。あんなみすぼらしいことって先祖に申し訳ないというか、ああいうことは、僕は人として一番したらあかんことじゃないかなと思っとるんやわ。「むらじまい」やって言うて、もう廃墟になったら、きれいに片づけることも、草刈りすることもなく、全部のものが腐ってなくなって、これで自分のところも何もわかりませんよ、みたいな感じで、集落から引きあげた人らがまとまっておるわけでも、交流するわけでもないしっていうようなところが全国で多いのは多いみたいやわ。そんなもん「むらじまい」ってほったらかしてあるだけのことやないか。あれじゃあかんと思うんやけどな。やっぱり先祖から預かっとる、お金にはならんけども、山であったり田んぼであったりの財産はみんな受けついどるんで[253]。

このように、「先祖から預かっとる」土地を荒廃させてしまうことは「一番したらあかんこと」だと考えている。しかし実際問題、4 章で見たように、元住民の全員が全員、同じように荒廃させたくないという強い気持ちを抱いているわけではなく、上根来に通うことがかなり少ない人もいる。その差が如実に表れるのが、個人所有の「家」である。「4-5 さまざまな『通い』」で述べたように、A さん達「百里会」の三役は定期的に上根来へ通って、集落の状況を「点検」しているが、くずれている家があっても強く本人に言うことはできないと A さんは語っている。

> （家がくずれたとかを直接本人に言うことは）しとるんですけど、やっぱり強制はできんわな。個人のもんやもん。やっぱり維持管理していこうと思うとお金もいるやんか。お金の出せないところに「ここきれいにしてくれんと困る」って言われへんので。なもんで「もうちょっと早めに手立てしといた方がいいと思うで」とか、「格好も悪いしな」とかは言うようにはしとるんやけど。それに対してはすごい個人差あるんよ。綺麗にしてあるとこはしてるし、ようせんとこはもうそのままほったらかしみたいな。明日の（奉仕）作業とかにはみんな来るんやけども、「ああうちもあかんな。こんなことしとくと。」って言いながら、何もようせずにしとる家もや

[253] 2023 年 7 月 8 日に行った A さんへの聞き取りより。

っぱりある[254]。

A さん達からすれば、先祖から受け継いだ上根来を「荒廃させたくない」という気持ちがあるため、家の維持管理は自己管理してほしいと考えているが、やはり個人の持ち物にそれを強制することはできず、「盆とかそんな時ぐらいしか来ん人らは『うちもこんなんしとくとあかんなあ。みんなに迷惑かけとるなあ。』と言いつつもそのまま」ほったらかしだという。しかしこうした空き家の維持には、想像以上にお金がかかる[255]。その上ある程度頻繁に通って換気などを行わないと、朽ちるのも早くなり、その分費用がかかるため、それなりの気持ちがないとその維持をすることは容易ではない。

しかし、「鯖街道」関連のイベントで上根来を利用していることもあって、「あんまりにもみっともないようになってしまったら、我々百里会で重機でも買っていって、最終的にはきれいに壊して整地するぐらいせんとあかん家も何軒か出てきそうやな」と百里会で空き家を取り壊すことも考えている。しかし、「ただ先に『こっちの方で片づけよか』って言うと、みんな『片づけてくれ』ってなる。それもあかんやろ。そこが難しいとこやなって言いながら、百里会の役員の中では最終的にはそうしたらなあかんやろうなっていうのは言うとんや」と語っているように、空き家を百里会で壊すことを決めてしまうと、雪崩を打つように元住民が取り壊しのお願いをするようになって、元住民の足が、より上根来から遠のいてしまうことを危惧している[256]。

また「4-2　寺社の管理と行事」で少し触れたように、寺社の管理も、A さん達「子ども世代」で終わりにして、宗福寺については、別のお寺に入れてもらうことも視野にいれているという。「廣嶺神社」と「宗福寺」の今後について、「百里会」三役の三人は以下のように語っている。

> （A）何百年あったものがここ 100 年ももたん。我々の代だけでも、持していくのかやんけな。そういうのも正式に無関心で、それぞれの住所のとこの氏子だけでいいんやとするんやったら、手続きをしてきれいに全部壊してせんと。一番ものであかんのは朽ちらせること。それは一番あかん。それだけは宮さんであってもお寺であってもきちっとそこまで考えてしていかなあかんなと思う。
>
> （H）村をしまうというより、お寺とお宮さんをどう最後にしまうかというのが百里会の最後の（仕事）。

---

254 2023 年 7 月 8 日に行った A さんへの聞き取りより。

255 空き家の活用に関する記事では、空き家の維持には、固定資産税等の税金や光熱費、メンテナンス費用を含めて、年間 10 万円から 30 万円かかるという。
アキサポ「空き家維持にかかる年間費用は？費用や維持費の削減方法を解説」より。
https://www.akisapo.jp/column/3025/
（最終閲覧日 2023/12/21）

256 2023 年 7 月 8 日に行った A さんへの聞き取りより。

（B）これ（神社とお寺）は我々の代でめどをつけんと、次の代にってのは苦痛やと思う。今は大工をしてる人間が多いもんで。息子の代になると、うちなんかも放ち飼いやさかい、あれを管理せい言うたかって、金出すことにしかならんのでそこまで被せるのはかわいそう[257]。

A さん達の息子世代、つまり「百里会」の次の世代は、上根来に住んだことのない世代であるため、お寺や神社に対する「想い」は A さん達とは異なっている。その子ども達に、上根来の神社やお寺の管理を押し付けたくないという気持ちが読み取れる。また「まあゆくゆくは宗福寺もそう（別のお寺に入れてもらうこと）なるやろけど。そやけど今おる者らの中では、先祖からのもの預かって我々もこうやってできるんで、1 年でも長く、ここで墓もせっかく作ったし、祀っていく方がいいんやないかっていうのが大半やもんで。でも『もうみんなでどっか行こか』って言う人もおるにはおるんや[258]。」と語るように、A さん達の世代の中でも、もう別のお寺に移ろうと考えている人もいる。

しかし、「4-2 寺社の管理と行事」でも述べたが、A さんも「今上根来でいうと、お寺おいてあるやろ。あれで人が集まるきっかけになっとるんや[259]。」と語っている通り、特に「宗福寺」は上根来に人が集まる大きな理由になっているため、その「宗福寺」をなくしてしまうと、格段に上根来から足が遠のくことが予想される。また「次の代になると、我々が思ってるよりも逆に（上根来のことを）思うかもわからん。寺でも宮さんでもさらででもたてるやつおるかもわからん[260]。」と語るように、全く次の世代に期待をしていないわけではない。実際、「共同墓地」は作っている上に、住職については、先述しているように、近隣集落の神宮寺区にある「正明寺」に兼務でお願いしていて、「ネゴリの谷の住職はほとんど正明寺さん[261]」というように、「竜前」や「下根来」などの同じ曹洞宗のお寺の住職を全て「正明寺」が務めているため、小浜市内には、同じ集落内にお寺がいくつもあって、お布施による檀家の負担が大きいところもある一方、その点上根来は安心である。以上のように見ていくと、お寺については、次の世代の「想い」次第なのかもしれない。

このように寺社については「区切り」を考えている一方で、「奉仕活動」や「森林の管理」では、活動を持続させるために様々な取り組みを行っている。その一つが「4-1 奉仕活動」で述べた、中ノ畑の住民の参加とお弁当会を始めたことである。中ノ畑集落の元住民が参加することによって、A さんが「人が集まれば、知恵も出てくるし、次の世代送れるぐらいうまいことといかんかなあって思ってる」と語るように、アイデアを出し合うようになり、今後も集落をうまく維持管理できるのではないかと考えている。実際に、「中ノ畑の人も 9 人来てくれる中で、4 人ぐらいはそういうこと（みんなで知恵を出し合って、きっちり維持管理

[257] 2022 年 5 月 27 日に行った A さん、B さん、H さんへの聞き取りより。
[258] 2023 年 7 月 8 日に行った A さんへの聞き取りより。
[259] 2023 年 7 月 8 日に行った A さんへの聞き取りより。
[260] 2022 年 5 月 27 日に行った A さんへの聞き取りより。
[261] 2023 年 7 月 8 日に行った A さんへの聞き取りより。

していくこと）に理解できる人がおるんやわ。で、協力もしてくれる。そんな人らの協力も得ていくとちょっとは良くなっていくやろう」と語っており、中ノ畑の元住民の中にも積極的に維持管理したいと考えている人もいる[262]。

しかし「4-1 奉仕活動」で述べた通り、中ノ畑の元住民は「奉仕活動」にはじめから乗り気で参加しようと考えていたわけではなかった。それでは何をきっかけに参加するようになったのだろうか。その意識が変わるきっかけについて、A さんは以下のように語っている。

> ちょうど（福井）県の方で「コミュニティ林業支援」っていうので、補助金もらえる枠があって、ほんで（そのお金で）上根来は全部の図面を作ったんや。一軒ずつみんなの名前を入れた図面をみんなに渡したんや。あれを渡すことによって、場所はわからんでも、地図上で自分の山がここにあるんやってみんなの人が分かったわけやん。そうするとお金にも何にもならんけど、自分のとこのがあるというだけで、人間っちゅうもんは足が通うようになるやん。
>
> で、中ノ畑の人にもこうしなって言うたんやけど、なかなか取りまとめてする人がいなかったもんで、上根来中ノ畑っていう名前にして、僕ら中ノ畑の分も作ったんやわ。それからやわ。中ノ畑の人らの意識が変わったのは。ほんで明日もそれだけの人が来てくれるんや。
>
> 中ノ畑の権利関係を調べるというと、うちには H（さんが）測量会社におるやん。なんで航空写真も手に入るし、権利関係も調べられるやろ。ほんで昔の測量図引っ張っていくと、山の形も調べられるやん。だからあいつが全部作ったんや。あれが何よりも財産やって。中ノ畑の人らにも「家の財産やぞ」と、集まってもらって一軒ずつに渡したんや。「うちの山はここにあるんや。」とか、「ここは炭焼いとる親父のとこにいったことあるわ。」とかっていう話をみんながするようになった[263]。

このように、H さんが測量会社で働いているため、福井県の「コミュニティ林業支援[264]」という制度を利用して、上根来の山の所有権を図面で明らかにしたのだが、5 名以上が集まって、任意の組織を設立しないと補助金を利用できず、中ノ畑集落の元住民だけでは図面を作れなかった。そこで、上根来の H さん達が代わりに、中ノ畑の分まで山の図面を作った。すると、中ノ畑の元住民たちは、自分たちの故郷である中ノ畑のことについて興味をもつよ

---

[262] 2023 年 7 月 8 日に行った A さんへの聞き取りより。
[263] 2023 年 7 月 8 日に行った A さんへの聞き取りより。
[264] 福井県では平成 22 年度から、集落等が協力して山の課題を解決し、 計画的に木材生産等を行う「コミュニティ林業」の活動に対して、 その経費の助成を行っている。①間伐等の支援②主伐の支援③所有山林の集約を支援④補助金等の手続きの支援の 4 つを支援しており、③所有山林の集約を支援では、最大 240 万円の補助金がおりる。
福井県「コミュニティ林業について」より
https://www.pref.fukui.lg.jp/doc/okuetsu-noso/ringyou/comunity_ringyo_d/fil/tirashi.pdf
（最終閲覧日 2023/12/21）

うになり、「奉仕活動」にも「理解」を示してくれるようになったという。この他に、「4-3 森林の管理と木材の収益」でも前述したように、「森林の管理」においては、市や県の補助金を活用する等して、私有林や「分収造林地」の間伐事業を進めている。そして、森林から収益を得て、「例えみんなに 1 万円ずつでも 1 回でも分配することで、『これでこんだけもらえたんか』」と、少しでも分配するところまでつなげることで、「また少し今よりは興味も持ってもらえたりとか、協力もしてくれることにもなる」と A さんは考えている[265]。

さらに、新しく始めることになった「奉仕作業」後の「お弁当会」に関しても、「理想」を以下のように語っている。

> 自分とこの山とか、昔行った記憶が蘇ってきたなっていう話を、軽作業（奉仕作業）の後に弁当食べながら、そんな話をしようやないかと。そうすると、その中で「これからこんなことをしていこうか」っていうアイデアは出てくると思うんで。それをうまく集約していって、やれることから一つずつでもやっていこうかなって思っとるんや。そうすると、今もそうやし、これから先の時代も、時代に合うた引継ぎができていくん違うかなと思て。村をしまわなくても、時代にあった維持管理をしていくっちゅうんが、僕は一番良いんと違うかなと僕は思うけど[266]。

「4-5　さまざまな『通い』」で述べたように、現在は「理解したり心底協力してくれるのはあの 5 人なんやわ」と語る A さんだが、元住民が上根来との接点を増やす活動を「間違えずに一個ずつ積み重ねていく」ことで、理解し合える「仲間」を増やし、新たなアイデアを出し合って、やれることから一つずつ行うことで、上手く維持管理をしていけるのではないかと考えている。

5-2　「伝える」から「受け継ぐ」へ

以上、前節では、「上根来集落のこれから」を元住民がどのように考えているか見てきた。しかし本当に「時代にあった維持管理をしていく」ためには、次世代に活動を引き継いでいくことが必要である。こういった次世代への引継ぎのためには、どういった工夫をしているのだろうか。「百里会」三役の皆さんに、子どもには百里会へ入ってもらわないのか尋ねたところ、以下のように答えが返ってきた。

> （B）（「百里会」に）入ってくれって言うんじゃなしに、自然とつないでもらえるようにせないかんなっていう。息子に「わしの代わりにいきなり出え」っていうんじ

[265] 2023 年 7 月 8 日に行った A さんへの聞き取りより。
[266] 2023 年 7 月 8 日に行った A さんへの聞き取りより。

ゃなしに、徐々にやな。無理やり入れてもな。

（A）やっぱりそれぞれの家の中の話なんやって。みんな我々の知らん話でも話せるっていうのは親やじいちゃんから聞いとるもんで。我々も一緒。子どもらに「お父さんはこんなことやったんやわ」とか「根来行って見てきたけど、木もこんなんなっとったわ。」とか。「これから木も、金になるかもわからんな」っていうのを話をしとるかしてないかっていう差なんや。13 人百里会のメンバーおるやろ。でもやっぱりそこの家で話を聞いとる家の子と聞いてない家の子とは全然違うもん。

（B）とりあえず関心というか興味を示してもらわんと。「今日は百里会の奉仕や」「こんなことせなあかんかったんや」っていう話をたまにするさかい、たまに行っても「こういうことしてるんか」と思うようになってくれたらええなっていう。「わしが行かんようになったら、お前行かなあかんねんで」ってそんなこと言うても（あかん）。

（A）そういうことを積み重ねていくと、うまく引き継いでいけるんやないかなあと思とるだけで。

（B）そら今は子育てはせなあかん、家のローンは払わんなんしっていう世代なんやから[267]。

このように、A さん達は活動を引き継いでほしいという気持ちはありつつも、働き盛りの子どもには「百里会」へ直接入ってほしいと言わないが、子どもが聞いていても、聞いていなくても、上根来でどんな活動をしていたかということを家の中で話すようにして、上根来に少しでも興味を持ってもらおうと考えている。しかし、実際に興味を持ってもらえるかも分からず、半ば強制した方が確実に上根来について知ることができるのではないかとも考えてしまう。このように、ある種「待ちの姿勢」でいるのは、どういった背景があるのだろうか。A さん達が上根来で精力的に活動する動機から、その背景に迫ってみたい。

2021 年に「廣嶺神社」の鳥居が倒れたのだが、それを住民たちの手で修繕したという。その時の心境について、B さんは「ひっくり返ってそれでええわっちゅうわけにはいかんやろ[268]」と語っているのだが、「壊れたまま放置できない 」という気持ちになる背景について、A さんは以下のように語っている。

宮さんの鳥居の話じゃないけど、「村のもんらが寄ってあそこの山にあった木をみんなで切って、それを引っ張ってきてこれを作ったんや」わっていうのを聞いとるもんで、そんなことまでして作ったもんを、我々がひっくり返すわけにはいかんなっていう思いにもなるやん。そやけどそんな事何にも聞いとらんかったら、「こけるんやったらこかしてしまおか」っていうのがでてくる。そういうのが出てこずにす

[267] 2022 年 5 月 27 日に行った A さん、B さん、H さんへの聞き取りより。
[268] 2022 年 5 月 27 日に行った B さんへの聞き取りより。

るっていうのは親やじいちゃんばあちゃんから言葉として受け継いで自分らの体の中耳の中、頭の中に残っとるもんで、今できる事だけは最小限こういうことしよかと（いう気持ちになる）[269] 。

A さんの語りから分かるように、神社の鳥居は、「昔の集落の住民が汗水たらして作り上げたもの」であるという意識があるため、倒れたまま見過ごすことができない。ただこういった意識になったことは、「集落のストーリーを語り継いできたこと」が大きい。いくら先祖が苦労して作り上げたものでも、こういった話が受け継がれていなければ、その子孫が「見過ごすことができない」という意識にならない。さらに「みんなから金集めて誰かに修理してもらえばええわっていうそういう感覚ではないんや。」と語るように、「見過ごすことができない」からと言って、お金で解決することはしない。やはり昔から受け継いできたものを「自分達の手で」直すことが重要なのだ。

このように、A さん達が精力的に活動する動機には、「昔の集落の住民が汗水たらして作った」ものという意識であったり、「4-3 森林の管理と木材の収益」で述べたように、森林についても、「親の代が一生懸命植えたもの」だという意識があったりするため、朽ちていく様子を黙って見過ごせないというのが大きい。そのため、「無住集落」になっても一生懸命維持管理していることを、A さんの子ども世代にも感じてほしいのかもしれない。だから A さんは他の元住民に対しても、「『今日こんなことしとったんやわ』っていうのはお前らも家帰ったら子供らおるとこで、聞いとっても聞いとらんでもええさかいにしゃべった方がいいで[270]」と伝えている。

しかし、A さん達の世代が受け継いでいるのは、「集落のストーリー」だけではない。実際に維持管理を行う「方法」も受け継いでいる。私が 2023 年 10 月の「奉仕活動」に参加して、水道整備を手伝わせてもらったことは「4-1　奉仕活動」で既に述べた通りであるが、その際に、写真 6 に写っている 2 種類の「水量を調整する装置」に泥がたまっていたので、水の入れ替えと清掃を行った。手順については、まず双方の「水槽」のバルブを開けて、溜まっていた汚れた水を取り出し、その後に「水槽」内の泥を取り除く作業をする。手前の「水槽」は水をためて、ブラシでこすればある程度洗える。しかし、奥の「水槽」は深い上に狭いため、中に入って洗うことはできない。そのため、水を力強くぶつけて、その水圧で洗う必要がある。しかし、この写真では分かりづらいが、川はこの「水槽」よりもかなり下にあるため、水を汲むことすらできない。そこで、H さんが「まずこっち（手前）の水槽をきれいにするんや。ここ石置こか。親父が石置け言うとったんや（写真 15）。ほんで水貯めて、その水を使ってバケツでこっち（奥）の水槽を洗うんや。最後に親父に一緒に連れてきて教えてもろたんや。こうやって洗うんやって。」と、教えてくれた[271]。また汚い水を排出する

[269] 2022 年 5 月 27 日に行った A さんへの聞き取りより。
[270] 2023 年 7 月 8 日に行った A さんへの聞き取りより。
[271] 2023 年 10 月 22 日、H さんの語りより。

ために開けたバルブを、戻す作業をやらせてくれたのだが、バルブが下にあって手を伸ばしては届かない。そこで、私が川に落ちそうになりながら、足の踏み場を探していると、H さんが「ここの木(写真 16 の右側の赤で丸を囲んだところ)を左手でつかんで、こっち（写真 16 の左下の赤丸）の足をそこに置くんや。わざと親父が残しておいたんや」と教えてくれた[272]。

写真 15 手前の「水槽」

写真 16 バルブを閉める

（いずれも 2023 年 10 月 22 日に筆者撮影。写真 16 については少し分かりにくいが、写真中央にバルブがあり、茶色の枯葉と緑のコケの間が崖になっている。）

このように水道の整備の細部まで、H さんは父親から教わり、受け継いでいたのだ。H さんと一緒に作業したからこそ簡単に見えた作業だが、実際このような「知恵」を引き継げていなかった場合、そもそも水道の仕組みすら分からない上に、どのような作業をしていいか分からなくなる。つまり、上根来のことを伝えるだけでなく、一緒に作業をして、こういった作業方法も次の世代に受け継ぐことが、集落の維持管理を持続するうえでは肝要である。

とは言っても、先述している通り、こういった維持管理の「方法」を受け継ぐ前に、まず次の世代に興味を持ってもらうことが第一である。そこで A さん達は、上根来での活動を話す以外に、次の世代が集まれる場所を上根来に作ろうと考えている。

> 若い子らも興味の持てるものを作っていったりとかや。今お寺が集まる機会になっとるけど、こっちへ出て来よかってなったら、それまでにはみんなで集まれる何かを作って準備さえしとく。例えば 8 月になったら、あそこでバーベキューするんやぞとかいうようなもんを作っとけば、若い子らも来やすいやんか。そんなんも作

[272] 2023 年 10 月 22 日、H さんの語りより。

っていきたいなあって言うて。場所の選定とかも、「ここがいいけどなあ。ここの家のもん理解してくれんかなあ。」とか言いながら。僕ら 5 人の中のもんやったらすぐにできるんやけど、いい場所がそうじゃないもんで。それも課題の一つ言いながらやっとるんや[273]。

先述している通り、現在お寺での「施餓鬼」が、元住民が一同に集まる機会となっているのだが、そのお寺は別の場所へ移すことも考えている。そうなる前に、若者も集まれる場所である、景色の良い「バーベキュー場」を作ろうと考えているのだという。

直接上根来と関わりを持ち続けて欲しいとは言わない A さん達であるが、次の世代に興味をもってもらうための取り組みを行っているのは、以上見てきた通りである。しかし、実際に次の世代が引き継ぐ未来が微かに見えた部分がある。A さんの息子が中の宮に住むことになったのだ。A さんが、中の宮に元住民と固まって住んでいることは既に述べた通りだが、その上根来の元住民の一人が亡くなって、空き家となった家ができてしまった。そこで、「よその人に売るんが嫌や」と思っていた A さんが、息子にその土地を買わないかと尋ねたところ、「渋々息子がそこ買って、全く違う家にリノベーションするんや言うて、こないだ工事をスタートした」という[274]。A さんは「渋々」と語っているが、A さんの上根来への「想い」が届いていたのかもしれない。このように、上根来の現代史を含めたストーリーを次の世代に「伝える」ことで、少しずつ維持管理を「受け継ぐ」ことに近づいているのかもしれない。

5-3　上根来集落の今後を「歴史」から考える

以上、上根来集落の「歴史」と「現在」を記述した上で、上根来集落の「これから」を元住民がどのように考えているのかについても見てきた。この 5 章では、元住民たちは「次の世代」に維持管理を押し付けたくないため、諦める気持ちと、やはり先祖から受け継いだ土地を守っていきたいという気持ちの中で葛藤が見られた。しかし、一貫して「百里会」三役の三人からは、「できることなら次の世代に維持管理をつなげていきたい」という気持ちが見られた。特に A さんは、理解し合える「仲間」を増やし、新たなアイデアを出し合って、やれることから一つずつ行えば、上手く維持管理することは不可能ではないと考えている。しかし、全員が全員そう考えているわけではなく、現在は 5 人が維持管理の中心的な役割を担っていることは 4 章で見た通りである。そのため、徐々に興味を持ってもらえる活動を積み重ねているのだが、他に「仲間」を増やすためにできることはあるのだろうか。上根来の「歴史」から考えてみたい。

[273] 2023 年 7 月 8 日に行った A さんへの聞き取りより。
[274] 2023 年 7 月 8 日に行った A さんへの聞き取りより。

3 章の最後で、「結い」による「助け合い」が無くなって、バランスが難しい「共同管理」だけが残ったことは既に述べた通りだが、「無住集落」になって、「集落」という単位が無くなったことにより、「百里会」、「上根来生産森林組合」などの「組織」を単位とした「公式な」活動が多くなった。それによって、いっそうグループを組織して、その管理責任者を決める「共同管理」が多くなった。さらに「責任者」に同じ人が就任する例もあるため、いっそう「助け合い」のバランスが難しくなった。ただそれでも、今は 5 人がリーダーシップを取ると同時に、うまく元住民を巻き込んでいるため、維持管理ができているが、次の世代ではそうはいかない。そこで、「共同管理」の大きなまとまりの他に、小さな「助け合い」の関係を作ることができれば、「仲間」を増やすことができるかもしれない。

しかし住む場所も固まって住んでいるとはいえ、上根来に住んでいた時ほど関係性が近いわけでもないので、「結い」を復活させるのは難しい。そこで、「4-4『鯖街道』関連のイベント」で述べたトイレ当番のような、小さな「共同管理」を作る、あるいは上根来の「空き家」の換気を小さなグループごとに行う「非公式」な「助け合い」を組織すれば、「申し訳ない」という気持ちが生まれがちな「共同管理」を補完することができるかもしれない。

ただいきなり何か制度を変えるというのは難しい上に、突然何か役割を与えられるというのは面倒に感じてしまう人もいると思う。そこで「話を聞くこと」で「申し訳ない」気持ちを減らすことを提案したい。

少し私自身の話になるが、私はとあるホテルで受付のアルバイトをしている。朝の 8 時からシフトのある日、私と 50 代女性（以下「お姉さん」とする）との二人体制だったのだが、私は朝から体調が優れず、そのことに気付いたお姉さんから「座っててていいから」と言ってもらい、座っていると水や薬まで持ってきてもらって、何から何までお世話になっていた。そこへお客さんの送迎をしている 60 代の男性ドライバーが仕事を終えてやって来て、「俺の話最後まで聞いて」と、最近のホテルでの出来事を、順を追って説明し出したので、座って水を飲みながら話を聞いていた。しかしかなり話が長かったので、さすがにお姉さんに仕事を全部任せっきりになるのは申し訳ないと思い、ドライバーの男性が少し席を話した隙に立ち上がって、仕事を始めようとした。するとお姉さんから「白木君は〇〇さん（ドライバーの男性）の話を聞くことが仕事だから」と言われ、もう一度座らされた。お姉さんは私の体調を気遣って言ってくれただけかもしれないが、その時私はすごく救われた気持ちになり、「何もできないけど、ここにいてもいいんだ」と思えるようになった。

このように、この時は「話を聞くこと」を「仕事」と認められたことによって、「私はここにいても良い」という実感を得られたわけだが、同様のことは往々にしてあると思う。例えば、祖父母の家に行って祖母にお茶を出してもらったり、何か食べるものを作ってもらったりしている間、自分は祖父の話を聞いているだけで申し訳なく思うこともある。そして、祖母を手伝おうとすると、「それよりおじいちゃんの話を聞いてあげて」と言ってもらえると、自分に「祖父の話を聞く」という役割を与えられた気がして、申し訳ないと思う気持ちが和らぎ、「ここにいても良い」と思えるようになる。また実際、つらい時に誰かに話を「聞

いてもらう」ことで、「助かった」という気持ちになったことがある人は多いのではないだろうか。このように考えると、「話を聞くこと」は「贈り物」の「返礼」だと考えられるのではないかと私は考える。そこで、上根来集落においても、「助け合い」のバランスが難しくなった今だからこそ、「話を聞くこと」の重要性を認めることは、「仲間」を増やすことにつながるのではないか。

実際、

6　おわりに

本稿では、福井県小浜市上根来集落を事例に、「共同のいとなみ」に着目して、「集落の『歴史』」と「無住化後の現状」を明らかにすることで、集落の「歴史」を踏まえて、無住集落の今後を議論することを試みた。

2 章では、主に、⑴産業、⑵森林、⑶寺社と行事、⑷田畑、⑸生活（交通、行商、食事等）、⑹学校と卒業後進路、⑺集落の意思決定と集まり、⑻移住のような項目に分けた上で、集落の主な「産業」で時期区分をして、上根来集落の「歴史」を「共同のいとなみ」に着目して記述し、その変化を追った。その中では、産業の変化と技術の発達、さらに交通の利便性向上などに伴って、子どもたちが学校卒業後に町へ出て働くようになって、森林の利用や寺社の管理や田畑の管理が変わっていく様子を具体的に描いた。そして、3 章では、2 章で見た「歴史」から、上根来集落の「共同のいとなみ」を分類し、それがどのように移り変わっていったのかまとめた。次に 4 章では、「無住集落」となった上根来集落と元住民の接点について、「奉仕活動」、「寺社の管理と行事」、「森林の管理と木材の収益」、「さまざまな通い」に分けて記述し、その具体的ないとなみと元住民の想いに迫り、最後の 5 章では、それまでの議論を踏まえて、元住民が「上根来集落のこれから」を考える上での葛藤を描いた上で、次の世代に維持管理を受け継ぐことについて議論した。

また「無住集落の今後」を見ていくためには、4 章で見たような、現在の元住民と集落の接点を具体的に見ていく必要があった。しかし、「集落の現在」は「集落の歴史」を踏まえないと分からない。例えば、「4-3 森林の管理と木材の収益」において、現在の接点だけ切り取ってみても、「親世代」が今だったら考えられないような大変な作業の末植えた「分収造林地」だが、それがお金にならなかった上根来の元住民の「怒り」や「悲しみ」は見えてこない。また「奉仕作業」についても、「百里会」ができた経緯を知らずに、「元住民の会」で行っていると捉えると、有志が集まって能動的に作業をしていると捉えられるが、林道を通すために結成された、ある種「青年会」とも呼べる「百里会」が、その役割を担うようになったことを知ると、「先祖から受け継いだ土地を守りたい」という意識のもとに集まっている姿が捉えることができる。このように、集落の外から見ている場合はもちろんだが、集落のコミュニティを構成する一員でも、「歴史」を知らないと、「現在」を的確に捉えられず、集落の今後を議論しても、「上っ面だけ」になってしまっては意味がない。だから「現在」を知ることと「過去」を知ることは結局同じことなのかもしれない。

しかし「歴史」を知るとは言っても、そんなに容易くはない。集落の「歴史」は学校で習う歴史のように、誰もまとめてはくれない。その「歴史」は人の中にあるため、ただ聞くこと、話すことでのみ、その「歴史」は受け継がれる。だから「むらおさめ」で後世に残すために、アーカイブを作るのではなく、集落が生きるために、「歴史」をつむぐことが大事なのかもしれない。

参考文献

文献

・増田寛也(2014)「地方消滅 東京一極集中が招く人口急減」中公新書
・小田切徳美・筒井一伸(2016)「田園回帰の過去・現在・未来 移住者と創る新しい農山村」農山漁村文化協会
・林直樹・齊藤晋編著(2010)「撤退の農村計画:過疎地域からはじまる戦略的再編」学芸出版社
・作野広和(2006)「中山間地域における地域問題と集落の対応」経済地理学年報第 52 巻 p264-282
・浅原昭生(2020)「日本廃村百選　ムラはどうなったのか」秋田文化出版
・桜井政成（2020）「コミュニティの幸福論」明石書店
・遠敷郷土誌編纂委員会編（2010）「小浜市遠敷郷土誌」遠敷地区ふるさとづくり推進会

Web サイト

・小浜市「小浜はこんなまち（人口・沿革など）」
https://www1.city.obama.fukui.jp/shisei/obamashinitsuite/132.html
・「海と都をつなぐ若狭の往来文化遺産群～御食国若狭と鯖街道～」「針畑越え」
https://www1.city.obama.fukui.jp/japan_heritage/story/index.php?id=
（最終閲覧日 2023/12/22）
・国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林整備センター」の HP、「沿革」より
https://www.green.go.jp/annai/enkaku.html（
最終閲覧日 2023/12/07）
・鯖街道　「鯖街道」とは
https://sabakaido.jp/about/
（最終閲覧日 2023/12/22）
・NHK 福井 NEWS WEB 2023/8/25 の記事より
https://www3.nhk.or.jp/lnews/fukui/20230825/3050015576.html
（最終閲覧日 2023/12/05）
・御食国若狭小浜｜お菓子処 井上耕養庵のホームページより
https://inoue-kouyouan.jp/post-1622/
（最終閲覧日 2023/12/22）
・経済産業省、資源エネルギー庁の記事（2018/5/24）
「【日本のエネルギー、150 年の歴史③】エネルギー革命の時代。主役は石炭から石油へ交代し、原子力発電や LP ガスも」
https://www.enecho.meti.go.jp/about/special/johoteikyo/history3shouwa.html

（最終閲覧日 2023/12/07）
「国立研究開発法人森林研究・整備機構森林整備センター」の HP、
「水源林造成事業のしくみ」
https://www.green.go.jp/suigenrin_jigyo/shikumi/index.html
（最終閲覧日 2023/12/07）
・毎日新聞 2022.05.14　地方版／福井　23 頁「若狭の海を守る：中嶌哲演と原発／３　はねのけた「小浜原発」　署名１万３０００筆、活動実る　／福井」
（最終閲覧日 2023/12/07）
・林野庁「森林・林業・木材産業の現状と課題　3.林業について（1）林業生産の動向」より
https://www.rinya.maff.go.jp/j/kikaku/genjo_kadai/attach/pdf/index-60.pdf
（最終閲覧日 2023 年 12 月 18 日）
小浜市の HP、「林業支援」の「林道維持管理地域支援事業補助金」
https://www1.city.obama.fukui.jp/shigoto/shigoto-sangyo/ringyoshien/4593.html
（最終閲覧日 2023/12/19）
・「日本遺産　ポータルサイト」の HP、「日本遺産とは」
https://japan-heritage.bunka.go.jp/ja/about/
（最終閲覧日 2023/12/19）
・アキサポ「空き家維持にかかる年間費用は？費用や維持費の削減方法を解説」
https://www.akisapo.jp/column/3025/
（最終閲覧日 2023/12/21）
・福井県「コミュニティ林業について」より
https://www.pref.fukui.lg.jp/doc/okuetsu-noso/ringyou/comunity_ringyo_d/fil/tirashi.pdf
（最終閲覧日 2023/12/21）